

2026年3月の地震活動の評価

1. 主な地震活動

目立った活動はなかった。

2. 各領域別の地震活動

(1) 北海道地方

目立った活動はなかった。

(2) 東北地方

- 3月8日22時08分、22時17分、14日および26日に三陸沖の深さ約15 kmでそれぞれマグニチュード(M) 5.6、M6.1、M5.2、M6.7の地震が発生した。これらの地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。これらの地震の震央付近では、3月中に震度1以上を観測した地震が12回発生するなど、地震活動が継続している。

これらの地震の震央付近では、2025年11月4日にM5.3の地震が発生して以降、地震活動が活発になり、11月9日にはM6.9の地震が発生し、その後も地震活動が継続していた。

またこれまでの一連の地震活動に伴って、微動活動が断続的に継続している。

- 3月10日に福島県沖の深さ約60 kmでM4.7の地震が発生した。この地震の発震機構は東北東－西南西方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレート内部で発生した地震である。

(3) 関東・中部地方

- 3月2日に硫黄島近海の深さ約20 km (CMT解による)でM6.2の地震が発生した。この地震の発震機構は北東－南西方向に張力軸を持つ正断層型であった。
- 3月15日に群馬県南部の深さ約85 kmでM4.5の地震が発生した。この地震の発震機構はフィリピン海プレートの沈み込む方向に圧力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内部で発生した地震である。

(4) 近畿・中国・四国地方

目立った活動はなかった。

(5) 九州・沖縄地方

- 3月1日に薩摩半島西方沖の深さ約120 kmでM5.4の地震が発生した。この地震の発震機構はフィリピン海プレートの沈み込む方向に張力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内部で発生した地震である。
- 3月15日、21日に熊本県天草・芦北地方のそれぞれ深さ約5 km、10 kmでM3.9、M3.5の地震が発生した。21日の地震の発震機構は北西－南東方向に張力

軸を持つ横ずれ断層型で、地殻内で発生した地震である。

これらの地震の震央付近では、3月15日以降地震活動が活発となり、震度1以上を観測した地震が3月31日までに51回発生するなど、地震活動が継続している。

今回の地震活動域の周辺には、日奈久断層帯（八代海区間、日奈久区間）が存在しており、地震調査研究推進本部における長期評価では、いずれの区間も今後30年以内の地震発生確率がS*ランク（高い）※¹と評価されている。

今回の地震活動域の北東には「平成28年（2016年）熊本地震※²」の地震活動域が熊本県熊本地方から大分県中部に存在する。熊本県阿蘇地方から今回の地震活動を含む領域では、「平成28年（2016年）熊本地震」発生以前に比べ、地震活動が活発な状態が継続している。

- 2月26日から宮古島北西沖で地震活動が活発となり、3月31日までに震度1以上を観測した地震が32回（3月中は17回）発生した。これらの地震は陸のプレート内で発生した地震である。このうち、最大規模の地震は3月2日に発生したM6.2の地震であり、この地震の発震機構は北北西－南南東方向に張力軸を持つ正断層型であった。

G N S S観測によると、一連の地震活動に伴い地殻変動が観測されている。

（6）南海トラフ周辺

- 南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。

補足（4月1日以降の地震活動）

- 4月1日に茨城県南部の深さ約50 kmでM5.0の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

G N S S観測によると、この地震に伴う有意な地殻変動は観測されていない。

注：G N S Sとは、G P Sをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。

※1：活断層における今後30年以内の地震発生確率が3%以上を「Sランク」、0.1～3%未満を「Aランク」、0.1%未満を「Zランク」、不明（過去の地震データが少ないため、確率の評価が困難）を「Xランク」と表記している。地震後経過率※³が0.7以上である活断層については、ランクに「*」を付記している。Zランクでも、活断層が存在すること自体、当該地域で大きな地震が発生する可能性を示す。

※2：「平成28年（2016年）熊本地震」（気象庁による命名）は、2016年4月14日21時26分以降に発生した熊本県を中心とする一連の地震活動を指す。

※3：最新活動（地震発生）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

2026年3月の地震活動の評価についての補足説明

令和8年4月10日
地震調査委員会

1. 主な地震活動について

2026年3月の日本及びその周辺域におけるマグニチュード(M)別の地震の発生状況は以下のとおり。

M4.0以上及びM5.0以上の地震の発生は、それぞれ155回(2月は144回)及び25回(2月は22回)であった。また、M6.0以上の地震の発生は4回(2月は1回)であった。

- (参考) M4.0以上の月回数 81回 (69-104回)
(1998-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)
M5.0以上の月回数 10回 (7-14回)
(1973-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)
M6.0以上の月回数 1回 (0-2回)
(1919-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)
M6.0以上の年回数 16回 (12-21回)
(1919-2017年の年回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)

2025年3月以降2026年2月末までの間、主な地震活動として評価文に取り上げたものは次のものがあった。

— 長野県北部	2025年4月18日	M5.1 (深さ約15 km)
— トカラ列島近海	2025年6月30日	M5.3
— トカラ列島近海	2025年7月2日	M5.1
— トカラ列島近海	2025年7月2日	M5.6
— トカラ列島近海	2025年7月3日	M5.5 (深さ約10 km)
— トカラ列島近海	2025年7月5日	M5.4
— トカラ列島近海	2025年7月6日	M4.9
— トカラ列島近海	2025年7月6日	M5.5
— トカラ列島近海	2025年7月7日	M5.1
— ロシア、カムチャツカ半島東方沖	2025年7月30日	M8.8
— トカラ列島近海	2025年9月17日	M4.7
— 根室半島南東沖	2025年10月25日	M5.8 (深さ約40 km)
— 三陸沖	2025年11月9日	M6.9 (深さ約15 km)
— 熊本県阿蘇地方	2025年11月25日	M5.8 (深さ約10 km)
— 青森県東方沖	2025年12月8日	M7.5 (深さ約55 km)
— 島根県東部	2026年1月6日	M6.4 (深さ約10 km)

2. 各領域別の地震活動

(1) 北海道地方

北海道地方では特に補足する事項はない。

(2) 東北地方

ー G N S S 観測によると、2025 年 12 月 8 日に青森県東方沖で発生した M7.5 の地震の後、およそ 4 か月間に東通観測点で東方向に約 3 cm 変動するなど、青森県を中心に余効変動と考えられる水平変動が観測されている。

また、M7.5 の地震が発生して以降、地震活動域よりも東の領域で微動活動が断続的に継続している。

(3) 関東・中部地方

ー G N S S 観測によると、2022 年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけてのフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。すべりの中心は渥美半島周辺から浜名湖周辺に移動している。

(4) 近畿・中国・四国地方

ー 紀伊半島中部から東海で 2 月 8 日から 2 月 26 日、3 月 1 日から 3 月 7 日、3 月 9 日から 3 月 10 日、3 月 12 日から 3 月 16 日にかけて、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界付近で深部低周波地震（微動）を観測している。ひずみ及び傾斜データによると、その周辺では深部低周波地震（微動）とほぼ同期してわずかな地殻変動を観測している。これらは、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における短期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。

(5) 九州・沖縄地方

九州・沖縄地方では特に補足する事項はない。

(6) 南海トラフ周辺

ー「南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。」：

（なお、これは、4 月 7 日に開催された定例の南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会における見解（参考参照）と同様である。）

（参考）南海トラフ地震関連解説情報についてー最近の南海トラフ周辺の地殻活動ー（令和 8 年 4 月 7 日気象庁地震火山部）

「現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時（注）と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

（注）南海トラフ沿いの大規模地震（M8 から M9 クラス）は、「平常時」においても今後 30 年以内に発生する確率が高い（詳細は「南海トラフの地震活動の長期評価（第二版一部改訂）」参照）と評価されており、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から約 80 年が経過していることから切迫性の高い状態です。

1. 地震の観測状況

（顕著な地震活動に関する現象）

南海トラフ周辺では、特に目立った地震活動はありませんでした。

（ゆっくりすべりに関係する現象）

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震（微動）のうち、主なものは以下のとおりです。

（1）紀伊半島中部から東海：2 月 8 日から 2 月 26 日、3 月 1 日から 3 月 7 日、3 月 9 日から 3 月 10 日、3 月 12 日から 3 月 16 日

(2) 紀伊半島西部：3月19日から3月21日

2. 地殻変動の観測状況

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)、(2)の深部低周波地震(微動)とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られました。

GNS観測によると、2022年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。

なお、三重県中部において、2024年夏頃からそれまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されていることが新たに確認されましたが、2025年秋頃には停滞し、既に収束したとみられます。

(長期的な地殻変動)

GNS観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

3. 地殻活動の評価

(ゆっくりすべりに関係する現象)

上記(1)、(2)の深部低周波地震(微動)と地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

2022年初頭からの静岡県西部から愛知県東部にかけての地殻変動及び2024年夏頃からの三重県中部の地殻変動は、それぞれ渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけて及び志摩半島周辺のプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。このうち、渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけての長期的ゆっくりすべりは、すべりの中心が渥美半島周辺から、浜名湖周辺に移動しています。志摩半島周辺の長期的ゆっくりすべりは、2025年秋頃から停滞し、既に停止しています。

これらの深部低周波地震(微動)、短期的ゆっくりすべり、及び長期的ゆっくりすべりは、それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。

(長期的な地殻変動)

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレートの沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

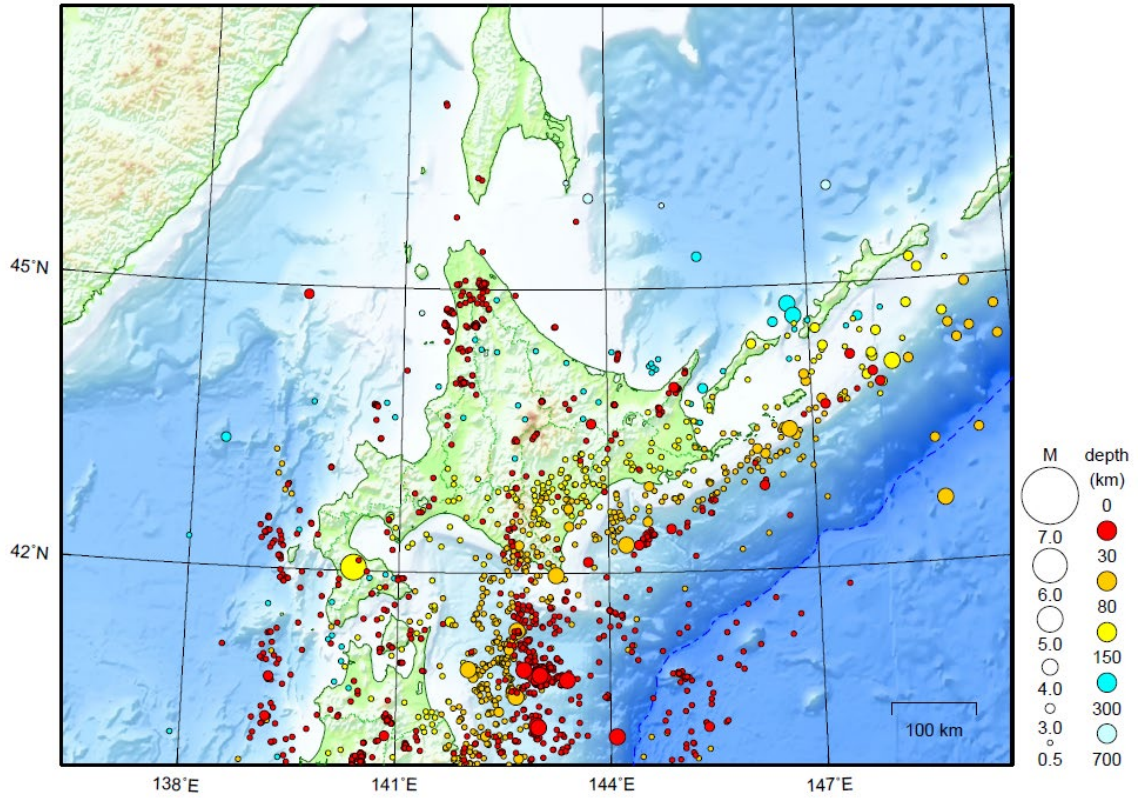
上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。」

- | | |
|-----|--|
| 参考1 | 「地震活動の評価」において掲載する地震活動の目安
①M6.0以上または最大震度が4以上のもの。②内陸M4.5以上かつ最大震度が3以上のもの。
③海域M5.0以上かつ最大震度が3以上のもの。 |
| 参考2 | 「地震活動の評価についての補足説明」の記述の目安
1 「地震活動の評価」に記述された地震活動に係わる参考事項。
2 「主な地震活動」として記述された地震活動(一年程度以内)に関連する活動。
3 評価作業をしたものの、活動が顕著でなく、かつ、通常の活動の範囲内であることから、「地震活動の評価」に記述しなかった活動の状況。
4 一連でM6.0以上が推定されたゆっくりすべりとそれに伴って発生した低周波地震(微動)。 |

北海道地方

2026/03/01 00:00 ~ 2026/03/31 24:00

N=2038



地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

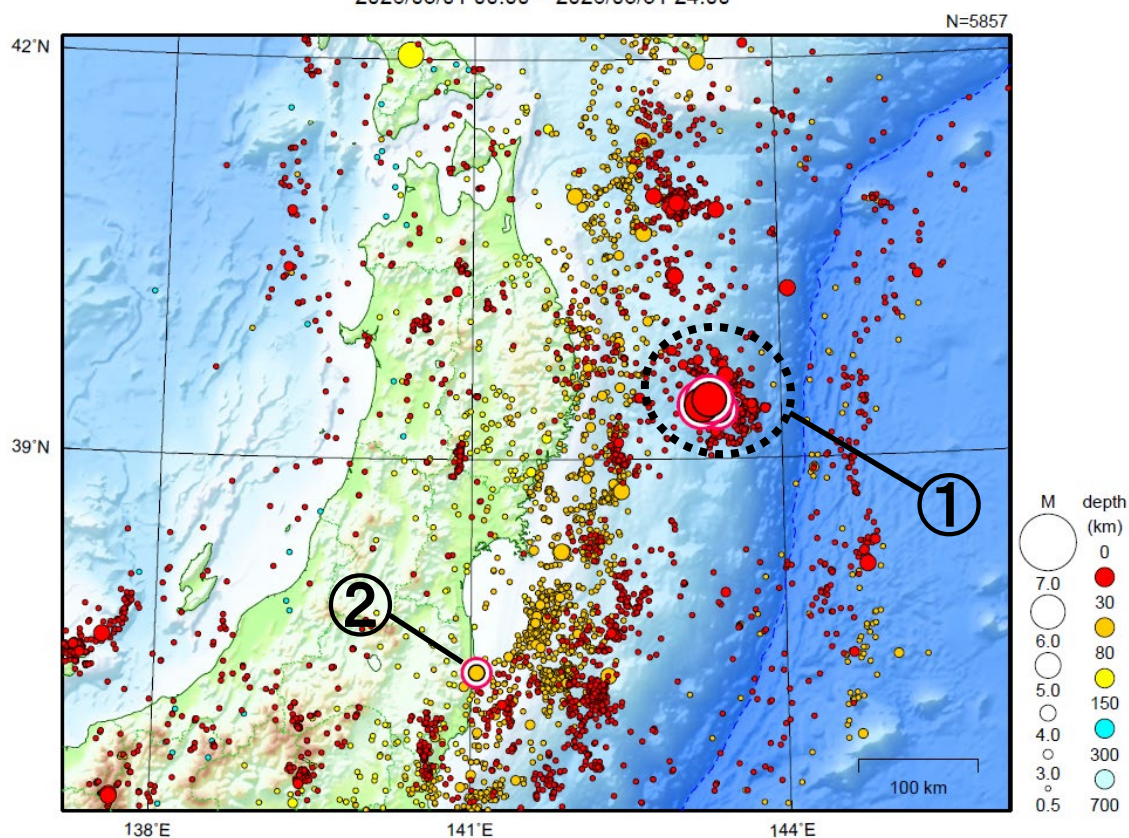
特に目立った地震活動はなかった。

[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

気象庁・文部科学省

東北地方

2026/03/01 00:00 ~ 2026/03/31 24:00



地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

- ① 三陸沖では 3 月 8 日 22 時 08 分に M5.6 の地震(最大震度 3)、3 月 8 日 22 時 17 分に M6.1 の地震(最大震度 3)、3 月 14 日に M5.2 の地震(最大震度 3)及び 3 月 26 日に M6.7 の地震(最大震度 4)が発生した。3 月中に震度 1 以上を観測する地震が 12 回 (震度 4 : 1 回、震度 3 : 3 回、震度 2 : 1 回、震度 1 : 7 回) 発生した。
- ② 3 月 10 日に福島県沖で M4.7 の地震(最大震度 4)が発生した。

[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

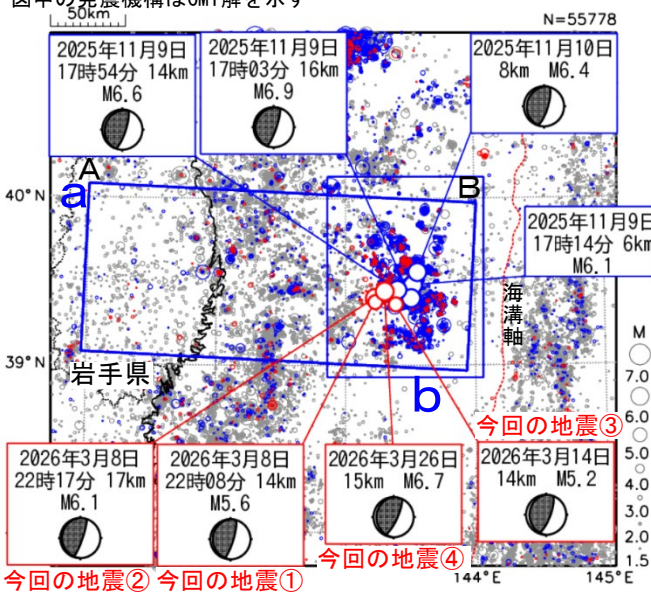
3月8日、14日、26日 三陸沖の地震

(2025年11月からの三陸沖の地震活動)

震央分布図

(2020年9月1日～2026年3月31日、
深さ0～140km、M \geq 1.5)

○2020年9月1日～2025年10月31日
●2025年11月1日～2026年2月28日 ●2026年3月1日以降
図中の発震機構はCMT解を示す



2026年3月8日22時08分に三陸沖の深さ14kmでM5.6の地震(最大震度3、図中①)が発生した。また、同日22時17分にはほぼ同じ場所の深さ17kmでM6.1の地震(最大震度3、図中②)が発生した。

さらに、3月14日04時55分にこれらの地震の近傍でM5.2の地震(深さ14km、最大震度3、図中③)が発生した。

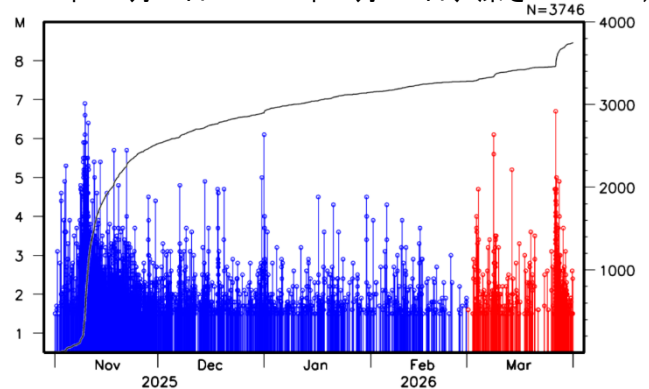
その後、3月26日23時18分にこれらの地震の近傍でM6.7の地震(深さ15km、最大震度4、図中④)が発生した。

これらの地震は、発震機構(CMT解)が西北西-東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した。

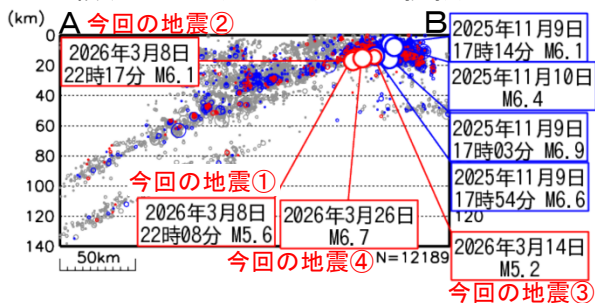
今回の地震の震央付近(領域b)では、2025年11月4日からまとまった地震活動が見られるようになり、11月9日にM6.9の地震(最大震度4)が発生して以降地震活動が継続している。領域bでは、3月1日から31日にかけて震度1以上を観測する地震が12回(震度4:1回、震度3:3回、震度2:1回、震度1:7回)発生した。

領域b内のM-T図及び回数積算図

(2025年11月1日～2026年3月31日、深さ0～80km)



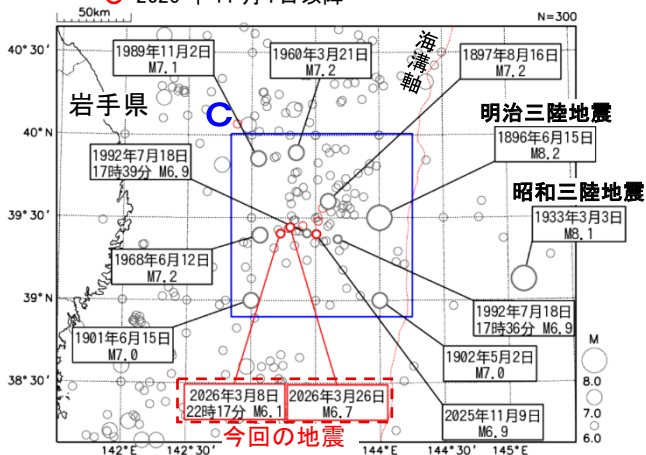
領域a内の断面図(A-B投影)



震央分布図

(1885年1月1日～2026年3月31日、
深さ0～90km、M \geq 6.0)

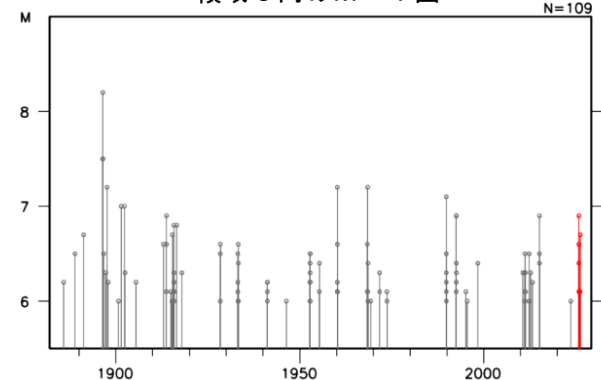
○ 1885年1月1日～2025年10月31日
● 2025年11月1日以降



震源要素は、1885年～1918年は茅野・宇津(2001)、宇津(1982, 1985)による。

1885年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺(領域c)では、M6.0以上の地震が時々発生している。1896年6月15日にはM8.2の地震(明治三陸地震)が発生し、死者21,959人などの甚大な被害となった(被害は「日本被害地震総覧」による)。

領域c内のM-T図



宇津徳治(1982):日本付近のM6.0以上の地震および被害地震の表:1885年～1980年,震研彙報,56,401-463.

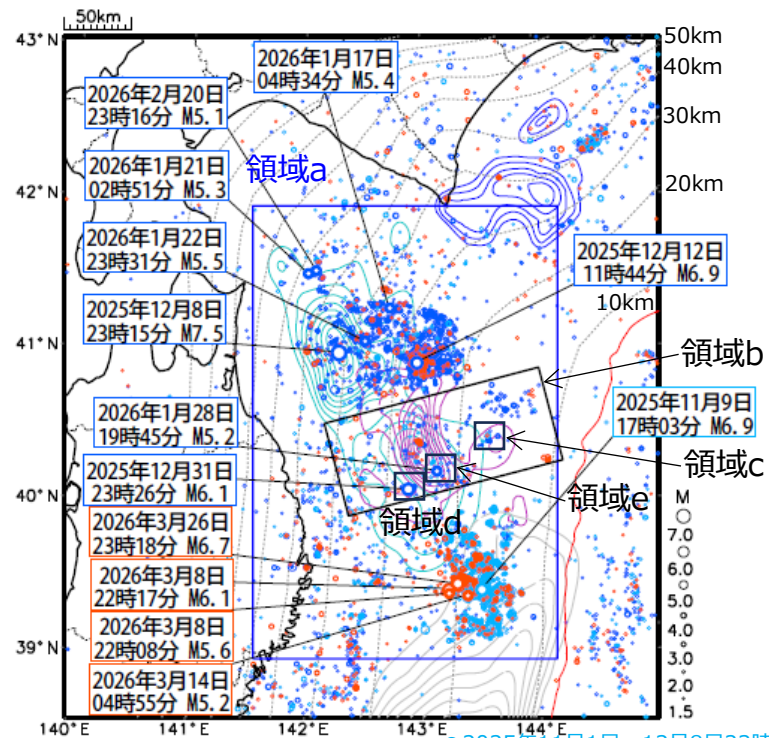
宇津徳治(1985):日本付近のM6.0以上の地震および被害地震の表:1885年～1980年(訂正と追加),震研彙報,60,639-642.

茅野一郎・宇津徳治(2001):日本の主な地震の表,「地震の事典」第2版,朝倉書店,657pp.

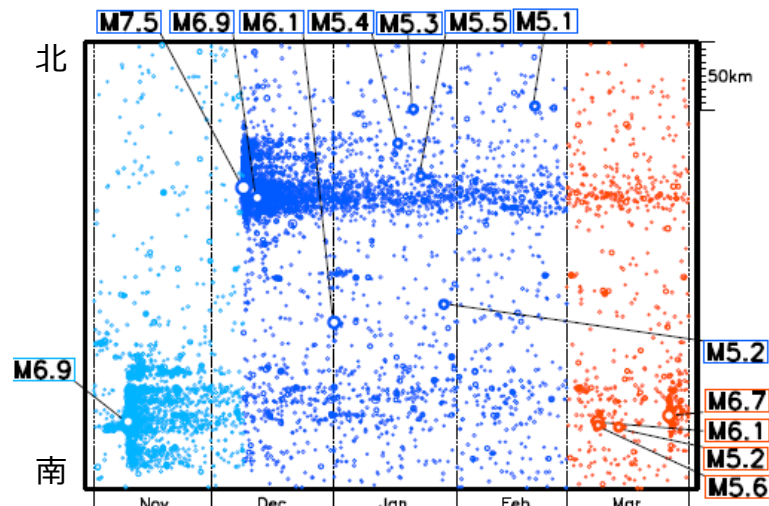
3月8日・26日 三陸沖の地震（青森県東方沖・岩手県沖・三陸沖 周辺の地震活動）

震央分布図

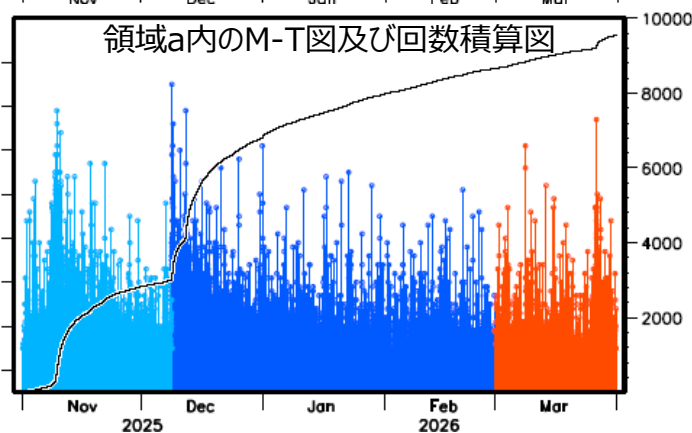
2025年11月1日～2026年3月31日、深さ0～100km、M \geq 1.5



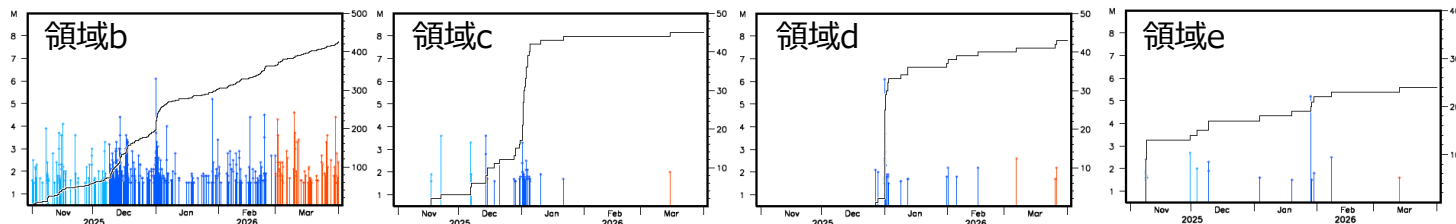
領域a内の時空間分布図 (南北投影)



領域a内のM-T図及び回数積算図



領域b-e内のM-T図及び回数積算図



色付きのコンターは主な地震のすべり分布

青色：2003年十勝沖地震 (Yamanaka and Kikuchi, 2003)

水色：1968年十勝沖地震 (永井・他, 2001)

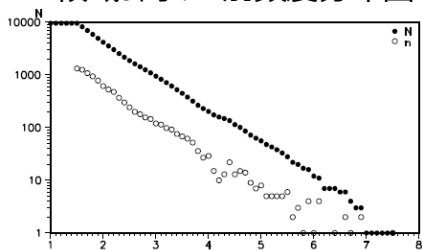
紫色：1994年三陸はるか沖地震 (永井・他, 2001)

灰色：2011年東北地方太平洋沖地震 (Yoshida et al., 2011)

黒色破線は太平洋プレート上面のおよその深さ

Kita et al. (2010)及びNakajima and Hasegawa (2006)

領域a内のM別頻度分布図

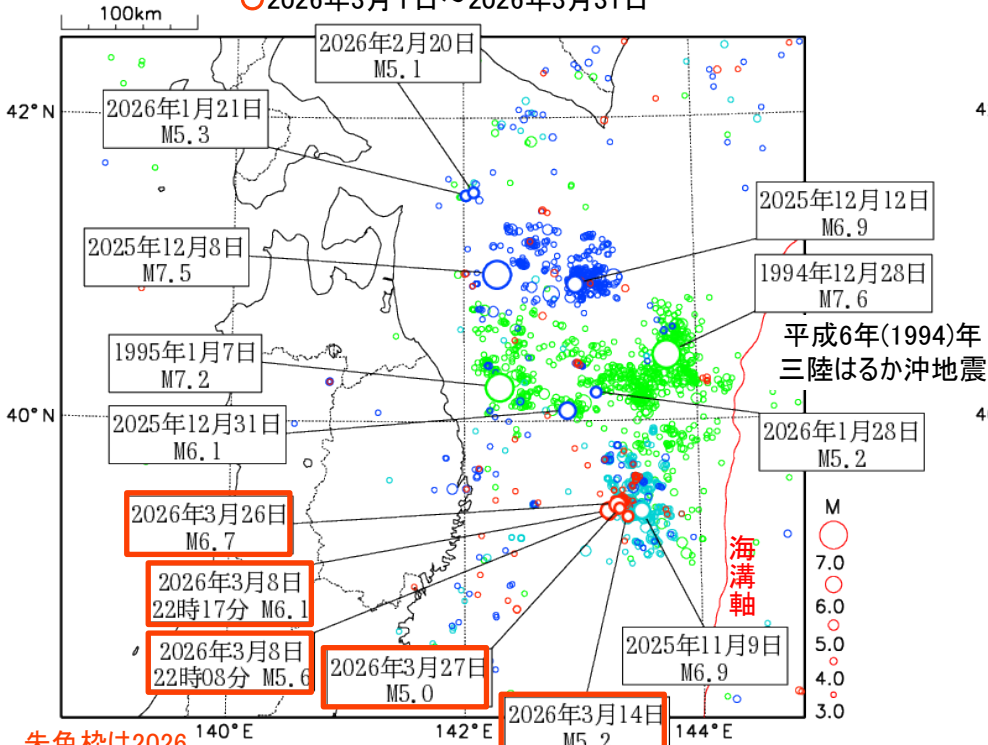


青森県東方沖等の地震活動域比較

震央分布図

(1994年及び2025年の活動、深さ0~90km、M \geq 3.0)

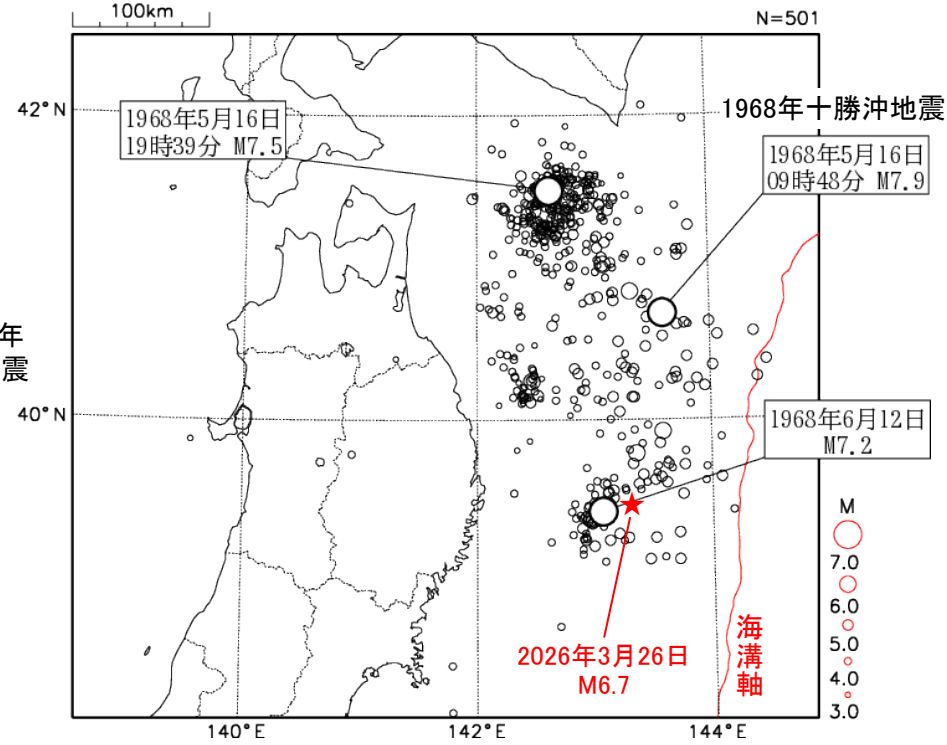
- 1994年12月28日~1995年1月31日
- 2025年11月1日~2025年12月8日23時14分
- 2025年12月8日23時15分~2026年2月28日
- 2026年3月1日~2026年3月31日



朱色枠は2026年3月の地震

震央分布図

(1968年5月16日~1968年6月15日、深さ0~90km、M \geq 3.0)

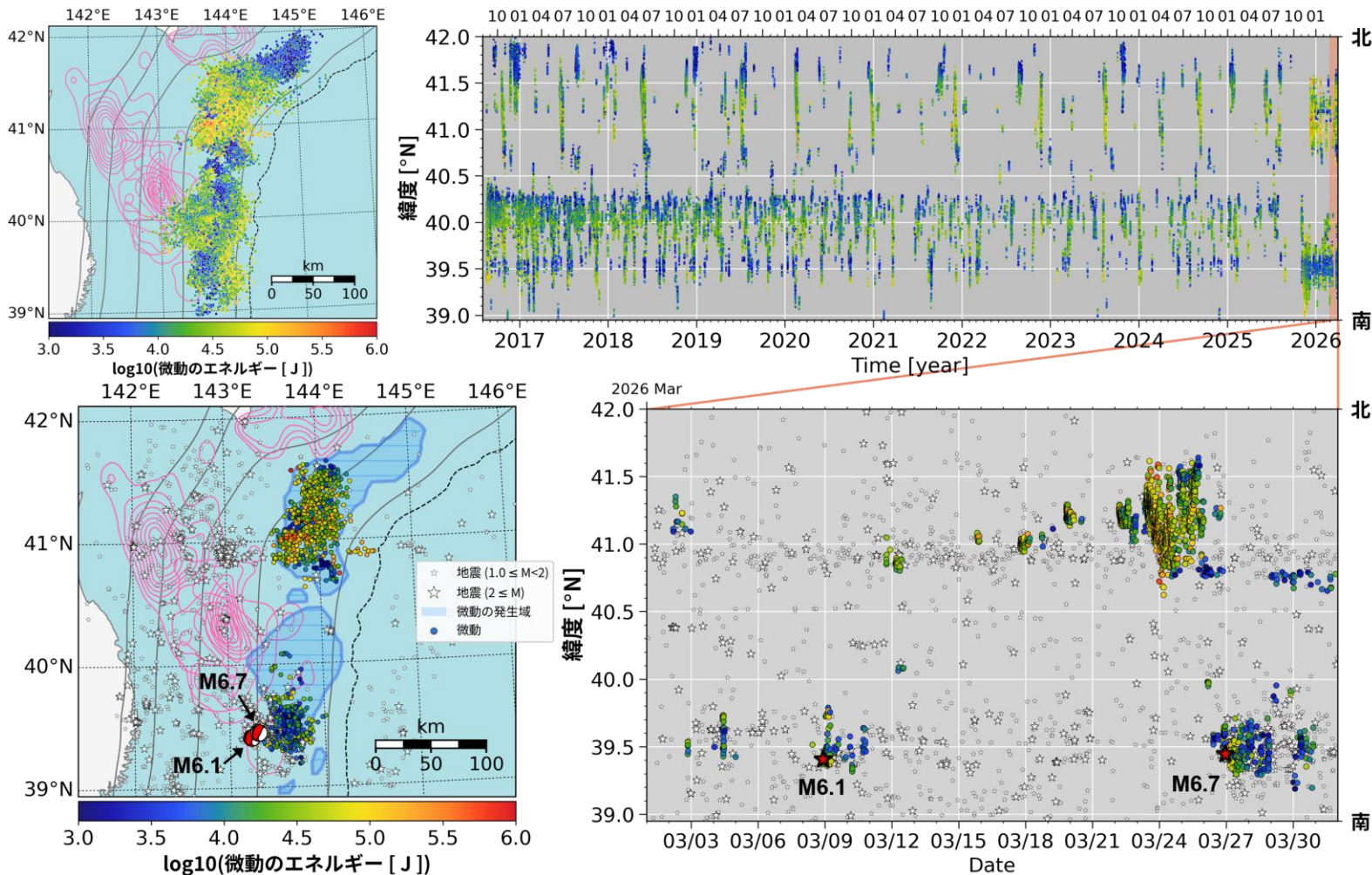


左図には、1994年三陸はるか沖地震、2025年11月の三陸沖の地震、12月の青森県東方沖の地震、右図には、1968年十勝沖地震のそれぞれ約1か月分の地震活動域を示している。

- ・ 1994年三陸はるか沖地震、2025年11月の三陸沖の地震、12月の青森県東方沖の地震の活動域は、すみ分けていているように見える。
- ・ 2025年12月の青森県東方沖の地震の活動域は、1994年三陸はるか沖地震の北側に隣接していて、1994年よりも範囲が狭い。
- ・ 1968年十勝沖地震の活動域は、上記三つを包含するように広がっている。(三陸沖では2025年11月の活動域より西側に見える。)
- ・ 1968年十勝沖地震の最大余震(M7.5)のあたりは、2025年には活動域となっていない。
- ・ 2025年12月31日のM6.1と2026年1月28日のM5.2は、1994年三陸はるか沖地震の活動域内(南端付近)で発生した。
- ・ 2026年1月21日のM5.3と2月20日のM5.1は、1968年十勝沖地震の最大余震のやや西側で発生した。
- ・ 2026年3月8日のM6.1と3月26日のM6.7は、2025年11月の活動域の西端付近で発生した。

2026年3月の日本海溝北部における微動活動

- 2025年末から断続的に継続する微動活動を青森沖・三陸沖で観測
- 青森沖では、3月22日から26日にかけて活発な微動活動を観測
- 三陸沖では、3月8日のM6.1と3月26日のM6.7の地震前後で微動活動を観測



(上図) 2016/08/15から2026/03/31までの微動分布
 (下図) 2026/03/01から2026/03/31までの微動分布
 ※ Sagae et al. (2025) の手法で解析した

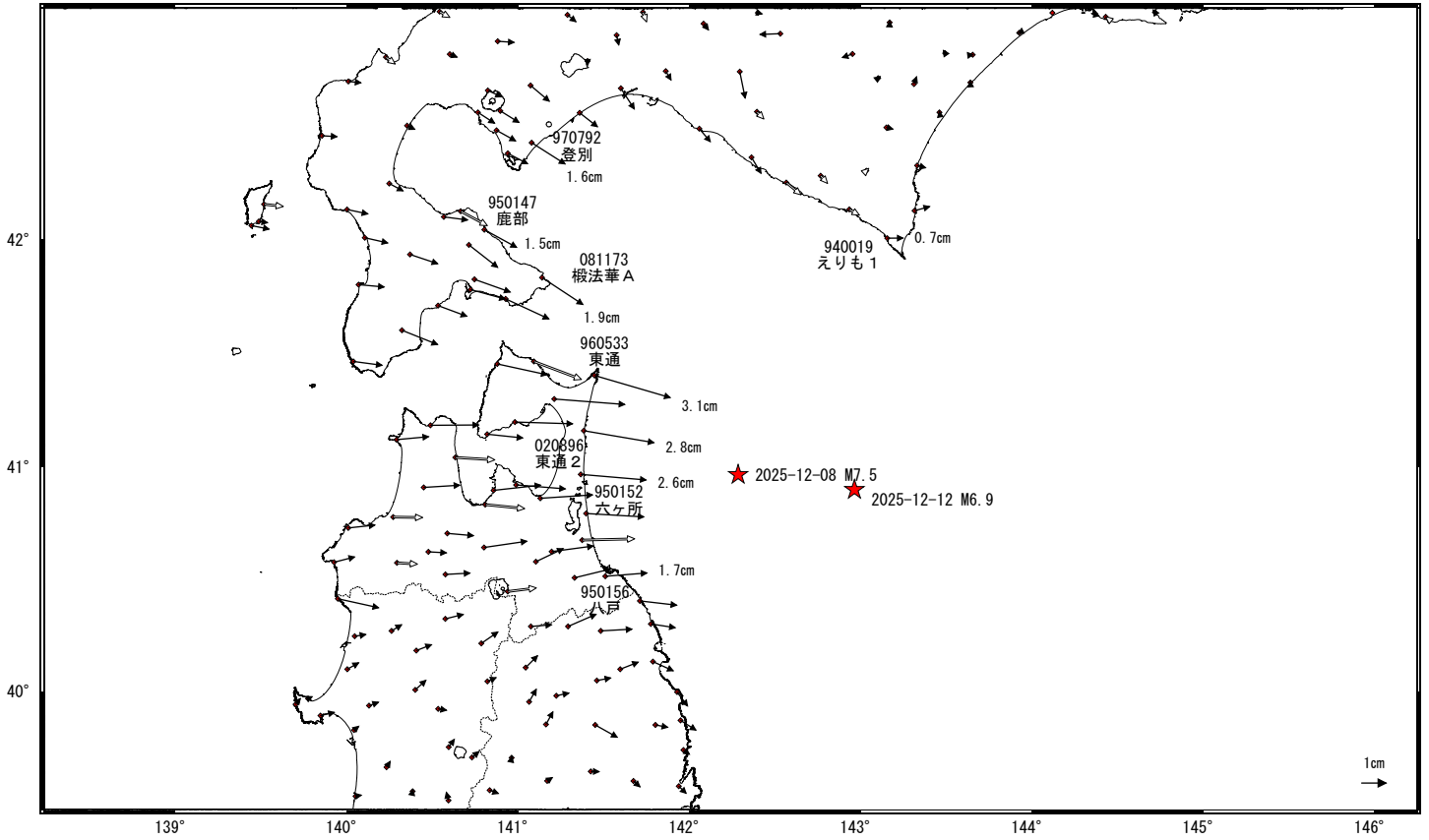
謝辞: 2026/03/01-2026/03/31 までの気象庁一元化震源カタログを使用しました。防災科学技術研究所S-netの地震波形データ、F-net Project による広帯域地震波形を用いたメカニズム解析結果を使用しました。記して感謝申し上げます。

青森県東方沖の地震(12月8日 M7.5)後の観測データ(暫定)

青森県を中心に余効変動が観測されている。
地殻変動(水平)

基準期間: 2025-12-09~2025-12-09 [F5.1: 最終解]
比較期間: 2026-03-30~2026-04-01 [R5.1: 速報解]

計算期間: 2023-01-01~2025-01-01

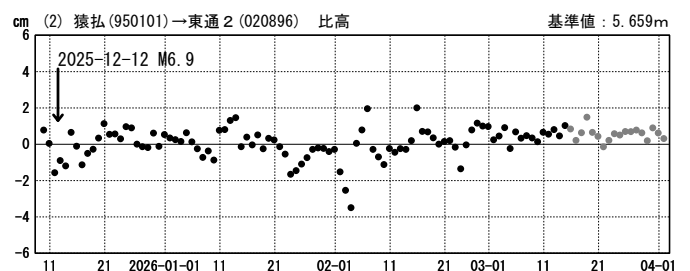
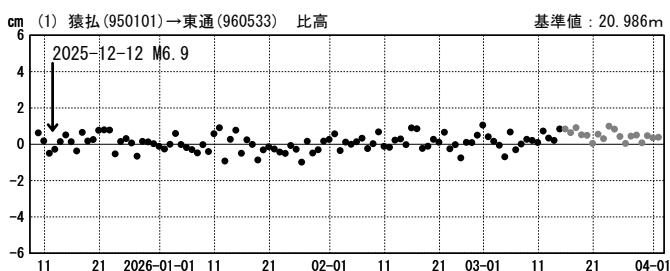
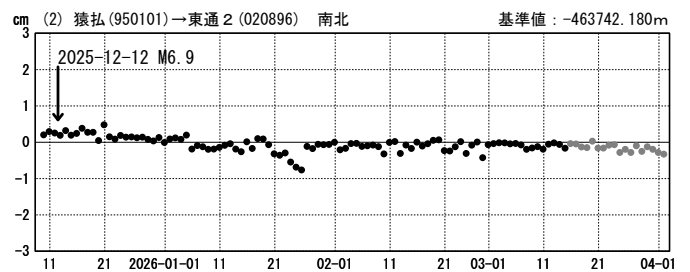
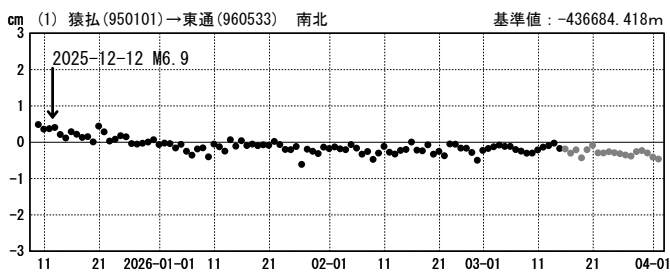
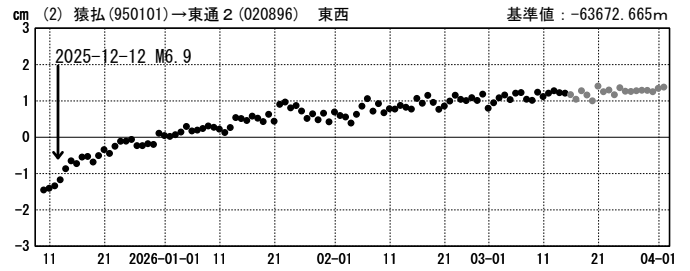
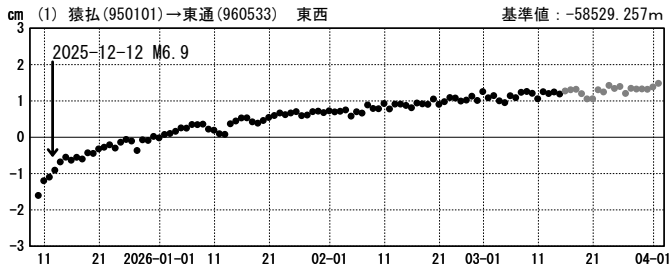


1次トレンド除去後グラフ

計算期間: 2023-01-01~2025-01-01

期間: 2025-12-09~2026-04-01 JST

期間: 2025-12-09~2026-04-01 JST



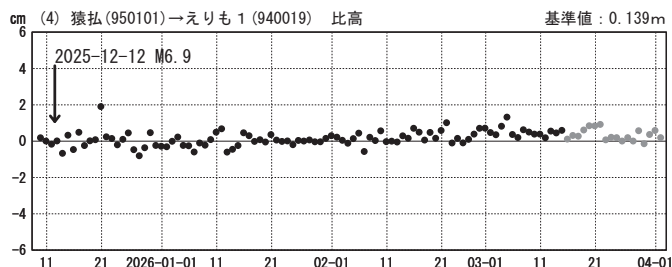
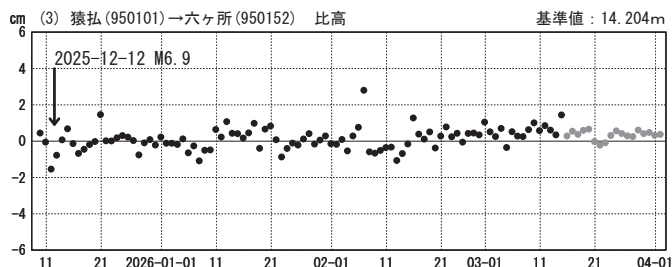
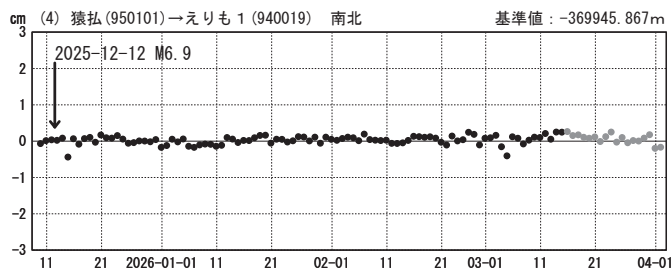
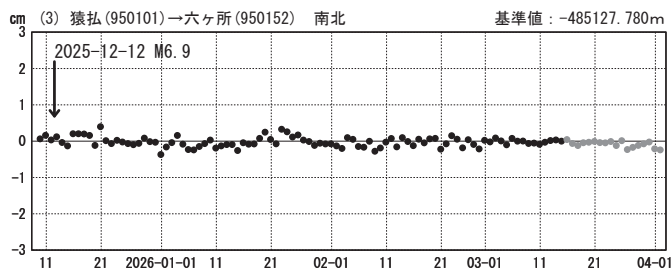
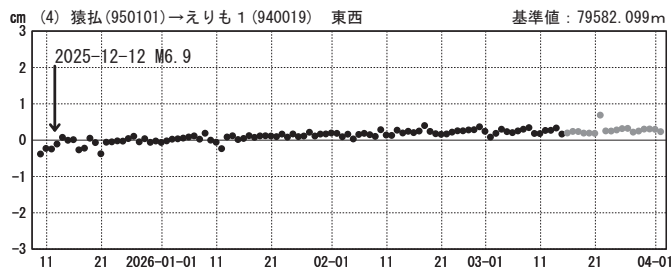
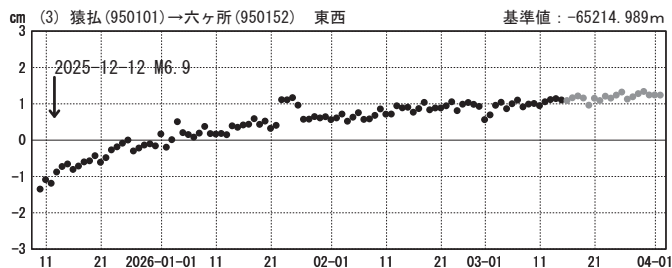
●---[F5.1: 最終解] ●---[R5.1: 速報解]

1次トレンド除去後グラフ

計算期間：2023-01-01~2025-01-01

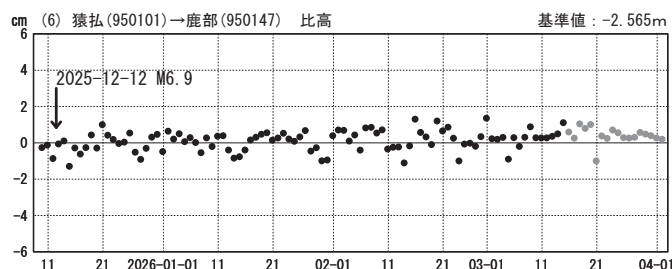
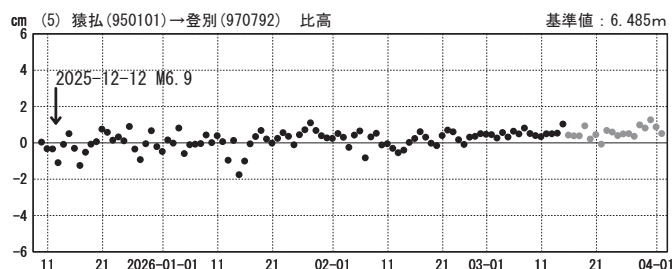
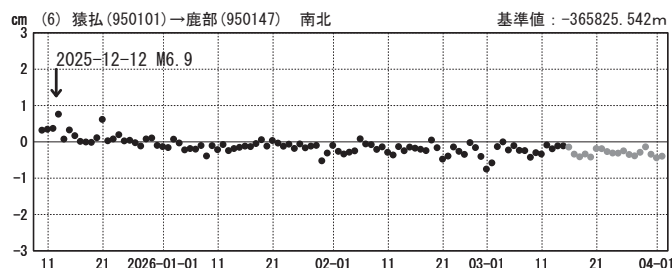
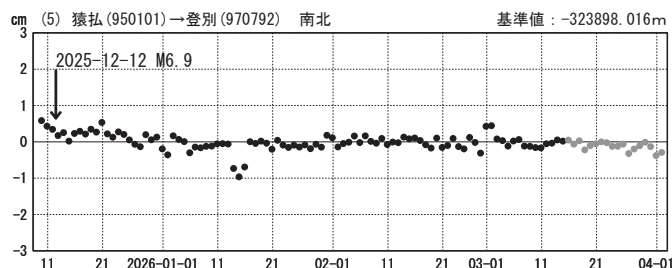
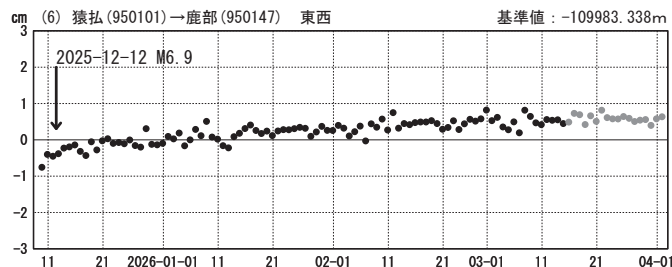
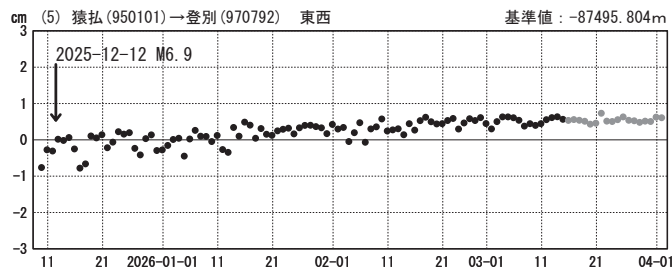
期間：2025-12-09~2026-04-01 JST

期間：2025-12-09~2026-04-01 JST



期間：2025-12-09~2026-04-01 JST

期間：2025-12-09~2026-04-01 JST



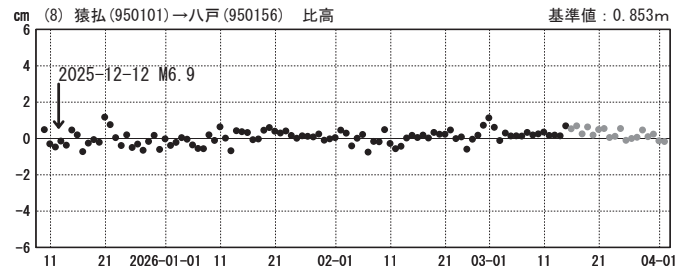
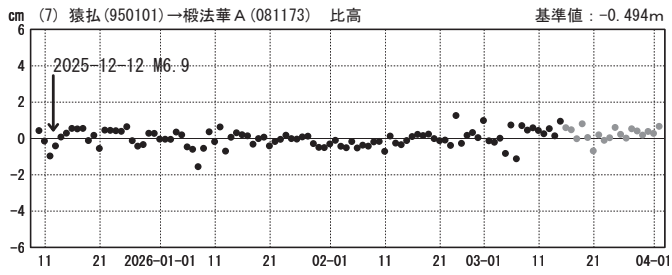
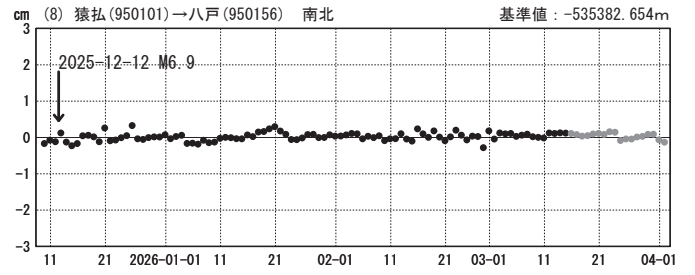
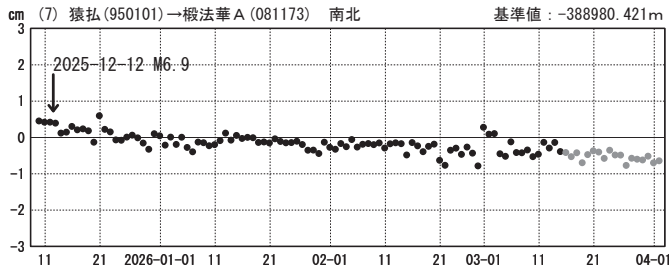
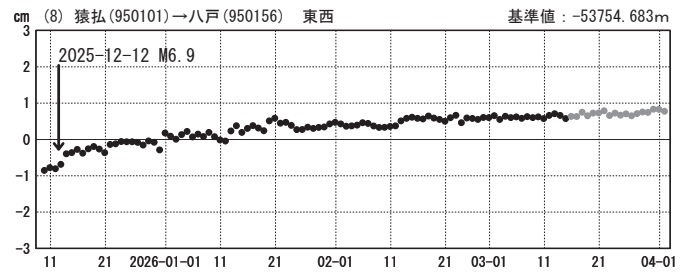
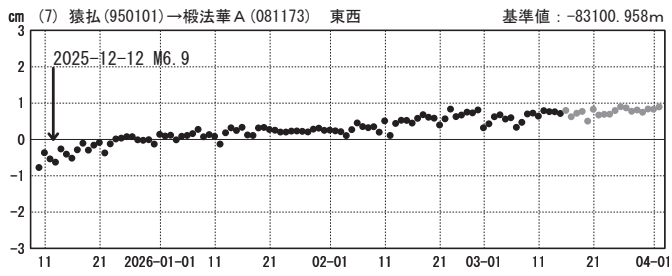
●---[F5.1:最終解] ●---[R5.1:速報解]

1次トレンド除去後グラフ

計算期間：2023-01-01~2025-01-01

期間：2025-12-09~2026-04-01 JST

期間：2025-12-09~2026-04-01 JST

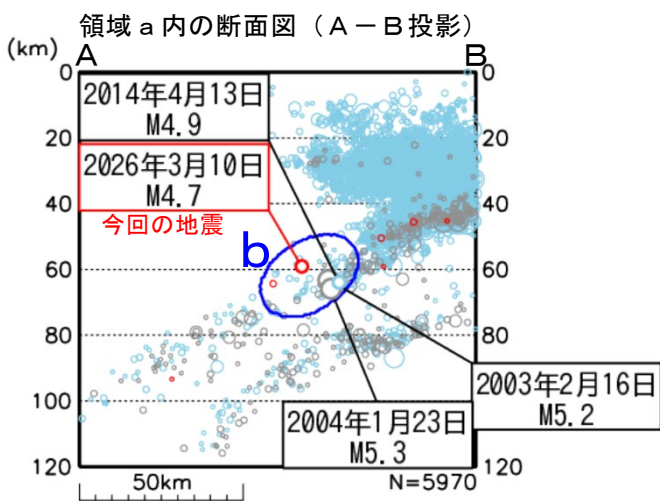
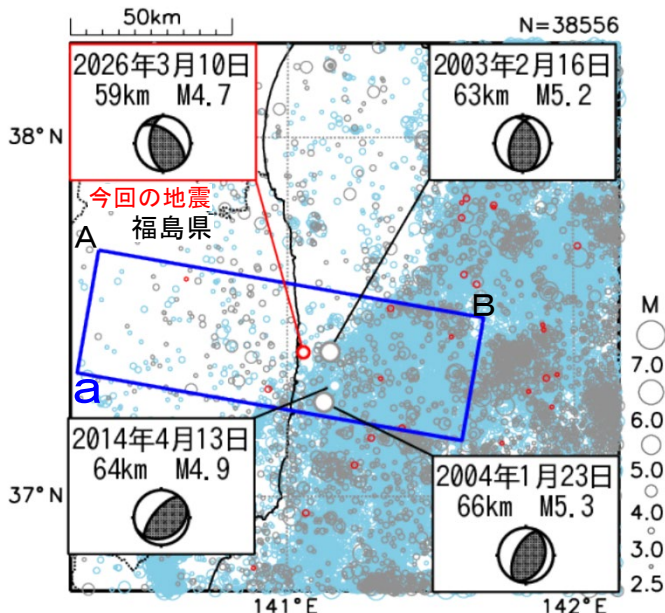


●---[F5.1:最終解] ●---[R5.1:速報解]

3月10日 福島県沖の地震

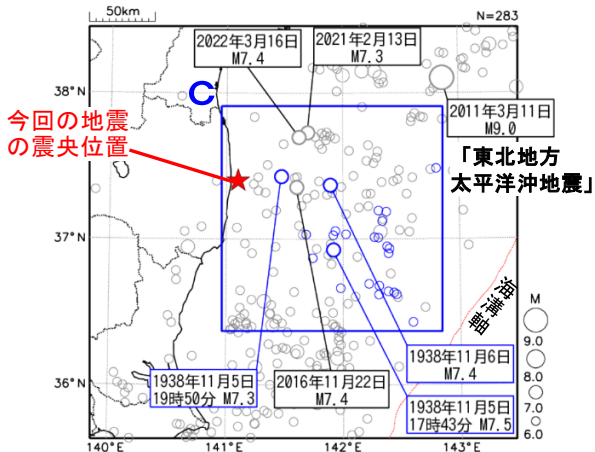
震央分布図
(1997年10月1日～2026年3月31日、
深さ0～120km、M≥2.5)

○1997年10月1日～2011年2月28日
○2011年3月1日～2026年2月28日 ○2026年3月1日以降
図中の発震機構はCMT解を示す



震央分布図
(1919年1月1日～2026年3月31日、
深さ0～100km、M≥6.0)

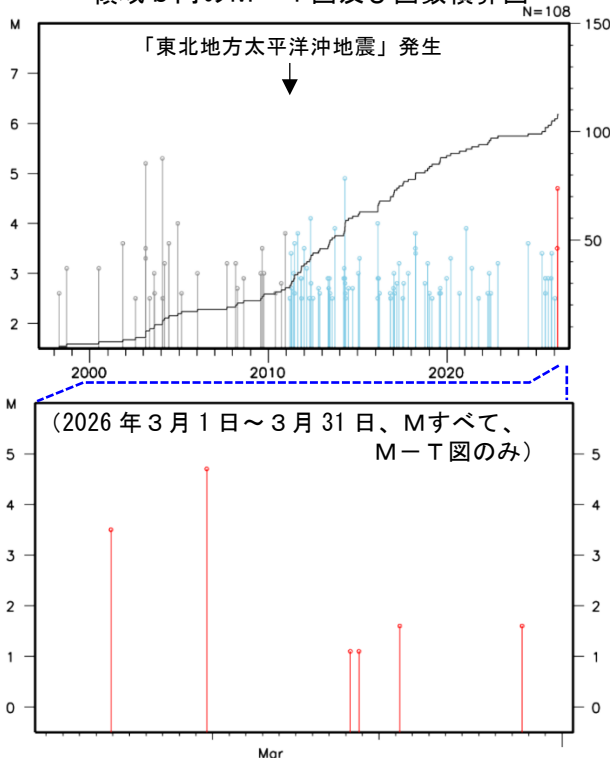
○1938年11月1日～1938年11月30日 ○左記以外の期間



2026年3月10日15時28分に福島県沖の深さ59kmでM4.7の地震(最大震度4)が発生した。この地震は、太平洋プレート内部で発生した。発震機構(CMT解)は東北東-西南西方向に圧力軸を持つ逆断層型である。

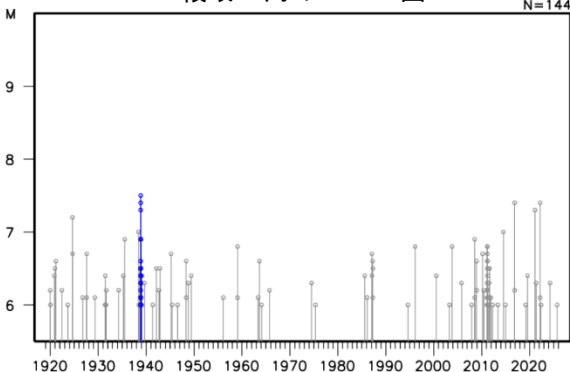
1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近(領域b)は「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」(以下、「東北地方太平洋沖地震」)以降、地震活動が活発となっており、M4.0以上の地震が時々発生している。

領域b内のM-T図及び回数積算図



1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺(領域c)ではM7.0以上の地震が時々発生している。1938年11月5日17時43分にはM7.5の地震(最大震度5)が発生し、宮城県花巻で113cm(全振幅)の津波を観測した。この地震後約1か月間にわたりM6.0以上の地震が増加するなど、地震活動が活発となった。これらの地震により、死者1人、負傷者9人、住家全壊4棟、半壊29棟などの被害が生じた(被害は「日本被害地震総覧」による)。

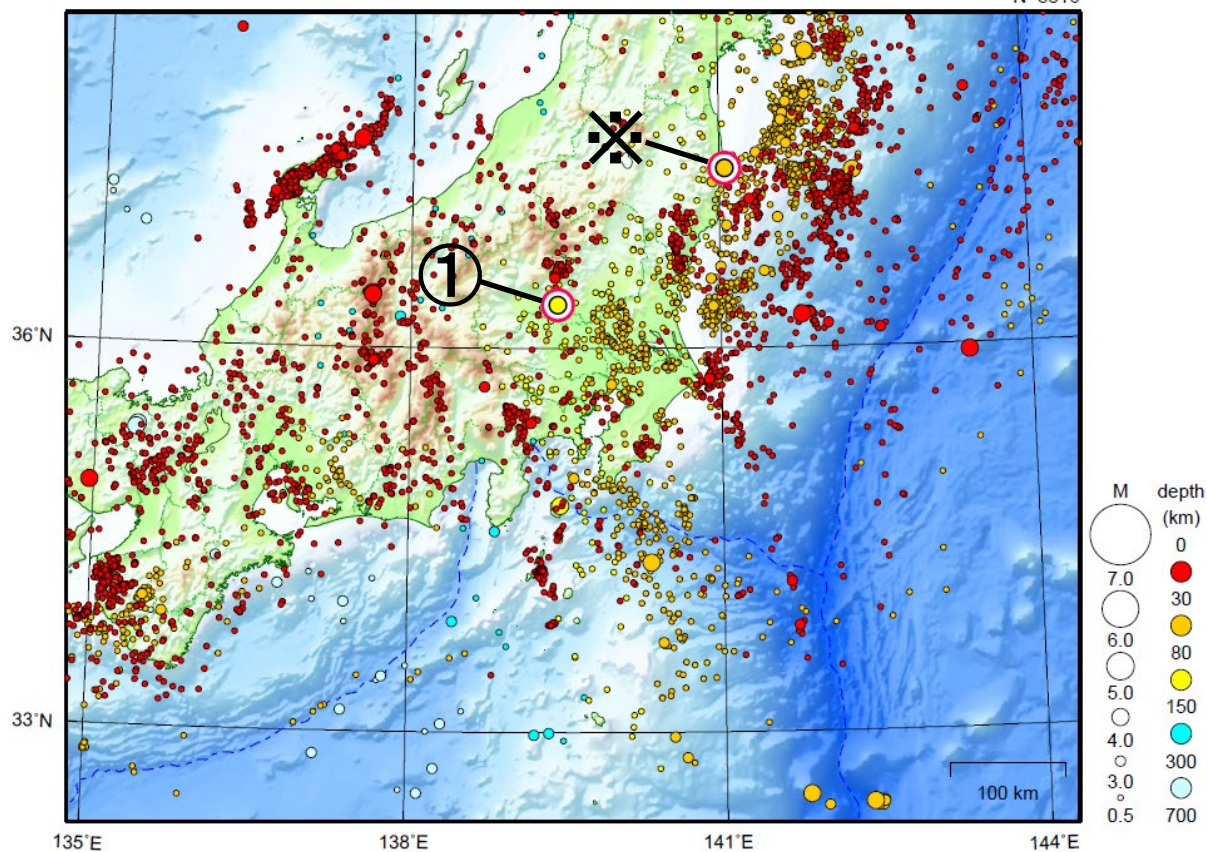
領域c内のM-T図



関東・中部地方

2026/03/01 00:00 ~ 2026/03/31 24:00

N=5816



地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOPO30 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

① 3月15日に群馬県南部でM4.5の地震(最大震度3)が発生した。

(図の範囲外)

3月2日に硫黄島近海でM6.2の地震(震度1以上を観測した地点はなし)が発生した。

(期間外)

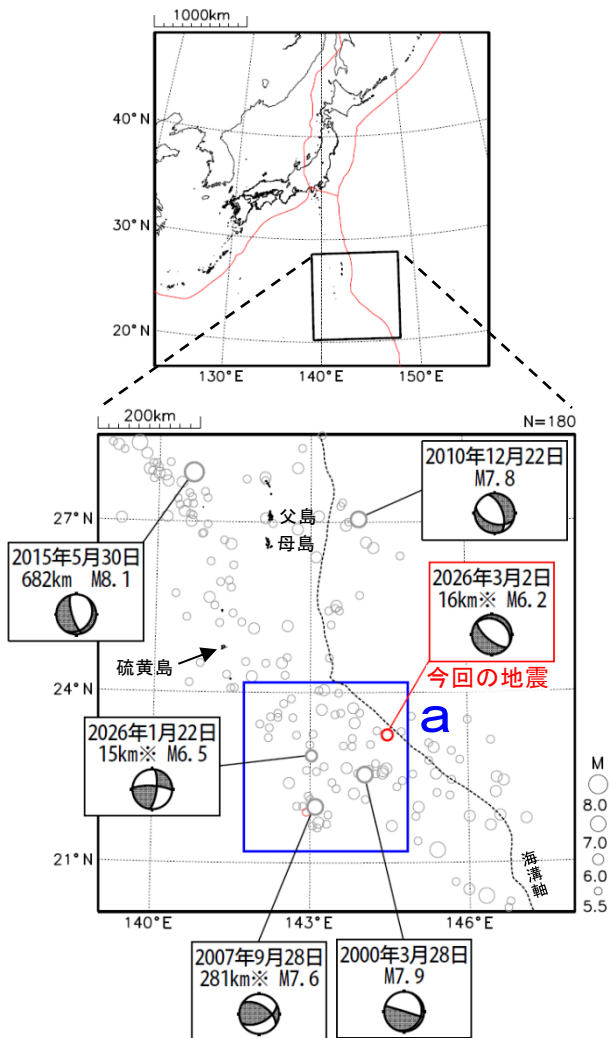
4月1日に茨城県南部でM5.0の地震(最大震度5弱)が発生した。

※で示した地震については東北地方の資料を参照。

[上述の地震はM6.0以上または最大震度4以上、陸域でM4.5以上かつ最大震度3以上、海域でM5.0以上かつ最大震度3以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

3月2日 硫黄島近海の地震

震央分布図
 (2000年1月1日～2026年3月31日、
 深さ0～700km、 $M \geq 5.5$)
 2026年3月の地震を赤色で表示
 図中の発震機構はCMT解
 深さに「※」を付したものは、CMT解による



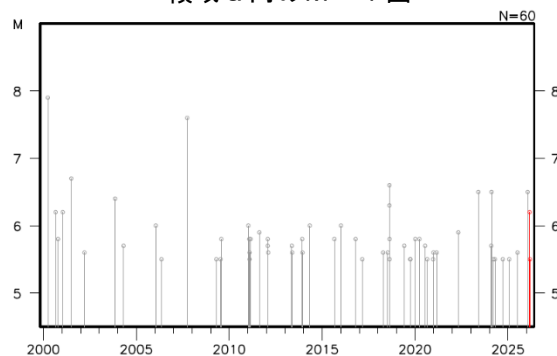
2026年3月2日12時55分に硫黄島近海の深さ16km (CMT解による) でM6.2の地震 (震度1以上を観測した地点はなし) が発生した。この地震の発震機構 (CMT解) は北東-南西方向に張力軸を持つ正断層型である。

2000年1月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近 (領域a) では、M6.0以上の地震が時々発生している。

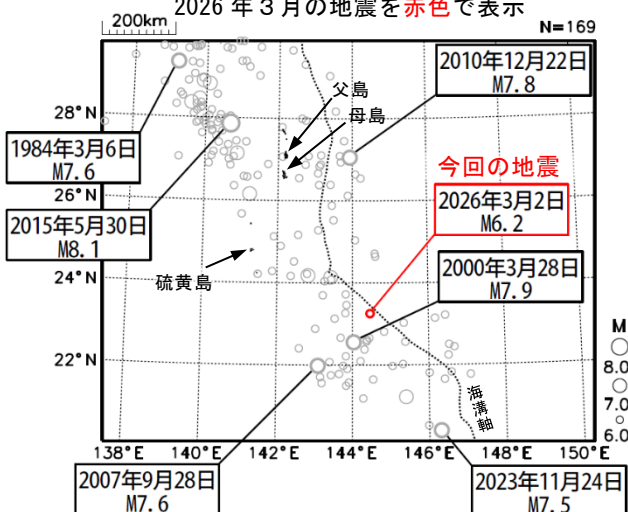
1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺では、M7.0以上の地震が時々発生している。2010年12月22日には父島近海でM7.8の地震 (最大震度4) が発生し、八丈島八重根で0.5m (注) の津波など、岩手県及び関東地方南部から沖縄地方にかけて津波を観測した。また、2015年5月30日には小笠原諸島西方沖の深さ682kmでM8.1の地震 (最大震度5強) が発生し、関東地方で軽傷者8人などの被害が生じた (被害は総務省消防庁による)。

(注) 巨大津波計の観測点により観測されたことを示す (観測単位は0.1m)。

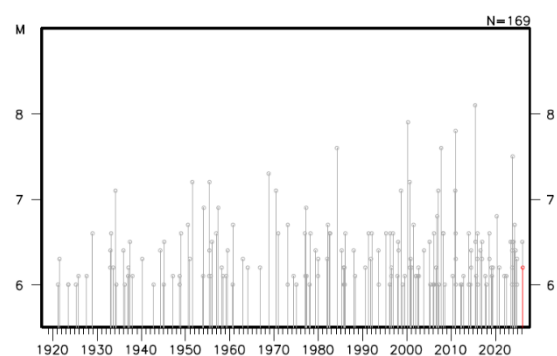
領域a内のM-T図



震央分布図
 (1919年1月1日～2026年3月31日、
 深さ0～700km、 $M \geq 6.0$)
 2026年3月の地震を赤色で表示



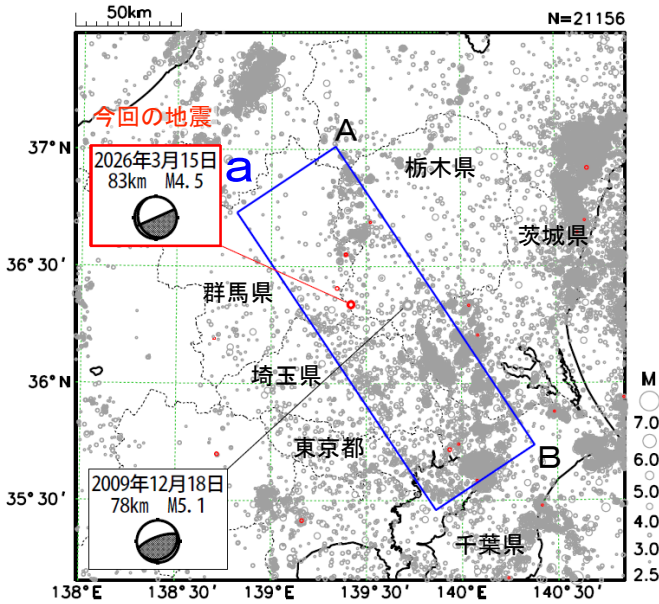
左図の領域内のM-T図



3月15日 群馬県南部の地震

震央分布図

(1997年10月1日～2026年3月31日、
深さ0～150km、 $M \geq 2.5$)
2026年3月の地震を赤色で表示



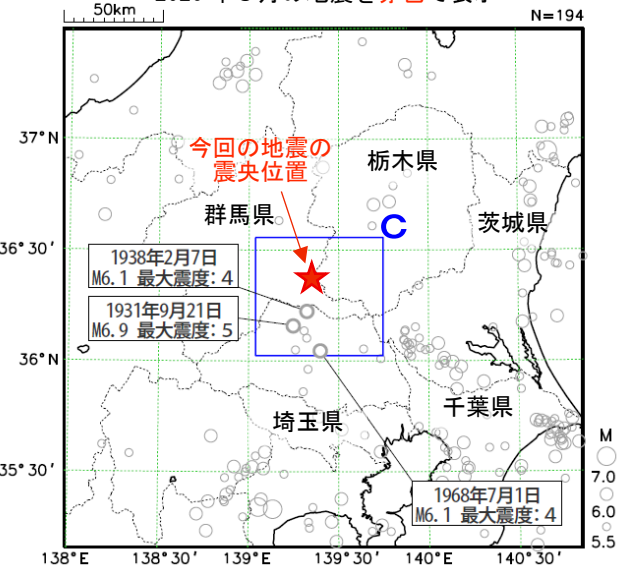
2026年3月15日14時06分に群馬県南部の深さ83kmでM4.5の地震 (最大震度3) が発生した。この地震の発震機構は、フィリピン海プレートの沈み込む方向に圧力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内部で発生した。

1997年10月以降の活動を見ると、今回の地震の震源付近 (領域b) ではM4.0以上の地震が時々発生している。2009年12月18日には深さ78kmでM5.1の地震 (最大震度4) が発生している。

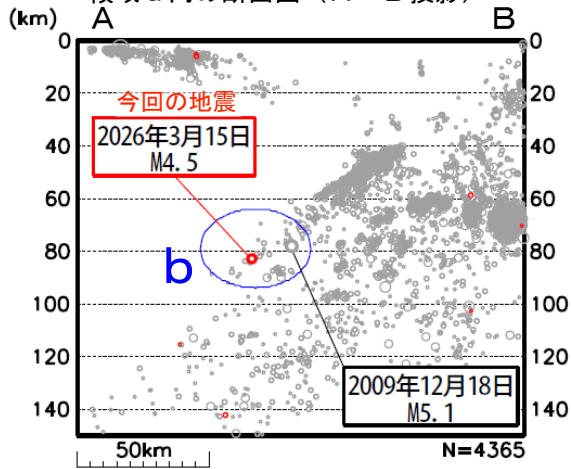
1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺 (領域c) では、M6.0以上の地震がまれに発生している。1931年9月21日にはM6.9の地震 (最大震度5) が発生し、死者16人、負傷者146人、住家全壊76棟、住家半壊124棟などの被害が生じた。(被害は「日本被害地震総覧」による。)

震央分布図

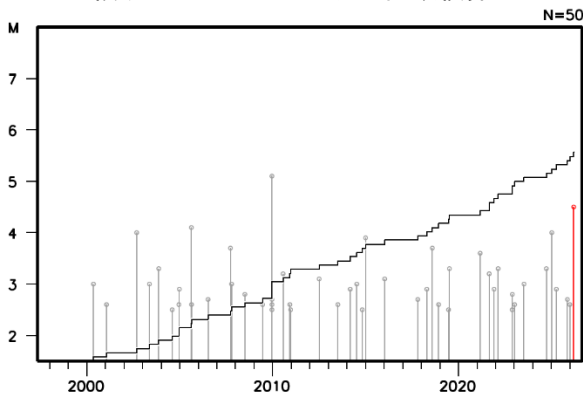
(1919年1月1日～2026年3月31日、
深さ0～150km、 $M \geq 5.5$)
2026年3月の地震を赤色で表示



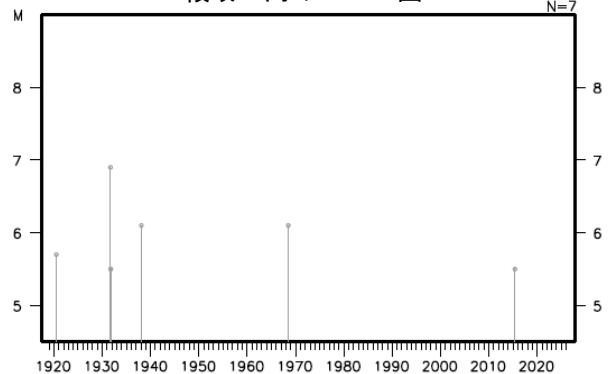
領域a内の断面図 (A-B投影)



領域b内のM-T図及び回数積算図

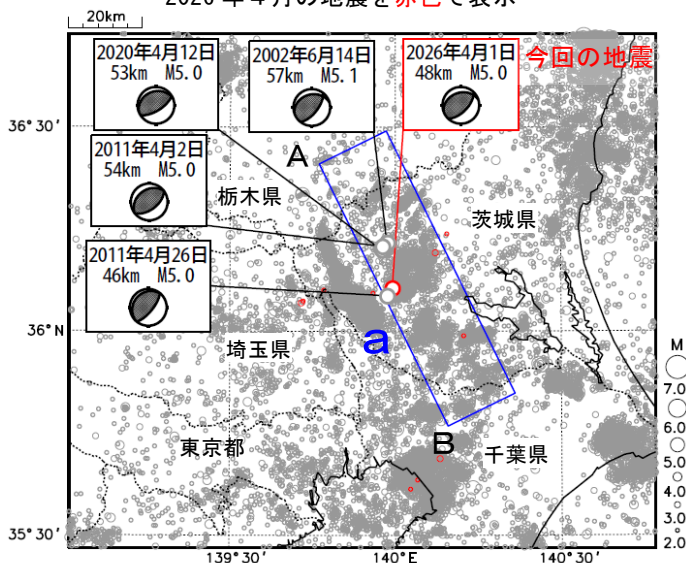


領域c内のM-T図



4月1日 茨城県南部の地震

震央分布図
(1997年10月1日～2026年4月5日、
深さ0～120km、 $M \geq 2.0$)
2026年4月の地震を赤色で表示

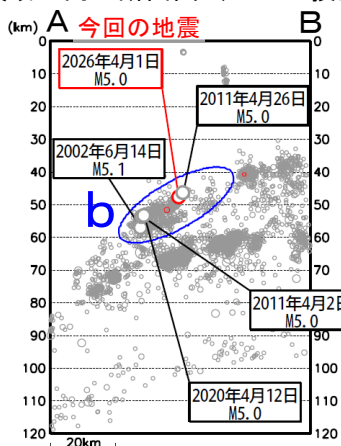


2026年4月1日10時06分に茨城県南部の深さ48kmでM5.0の地震(最大震度5弱)が発生した。この地震は、発震機構が北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した。

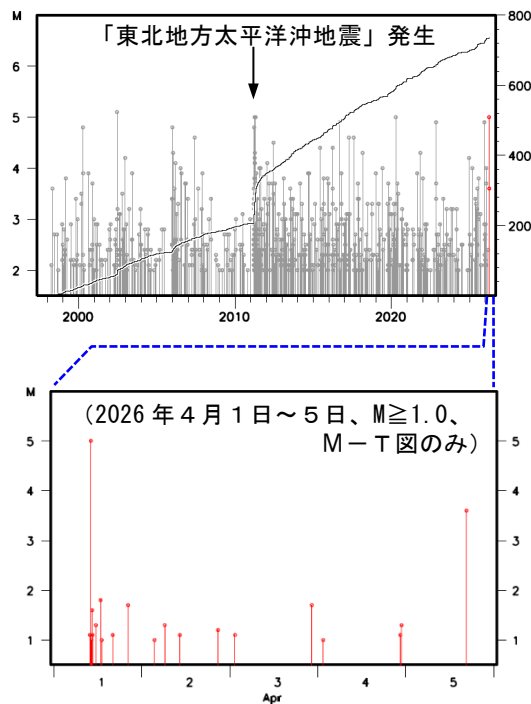
1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近(領域b)は地震活動が活発な領域で、「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」(以下、「東北地方太平洋沖地震」)発生以降、より活発になった。2002年6月14日にM5.1の地震(最大震度4)が発生し、負傷者1人などの被害が生じた(総務省消防庁による)。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺(領域c)では、M6.0以上の地震が時々発生している。

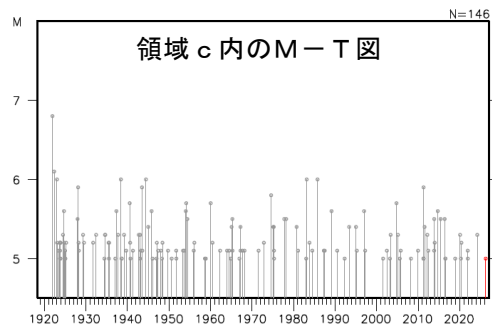
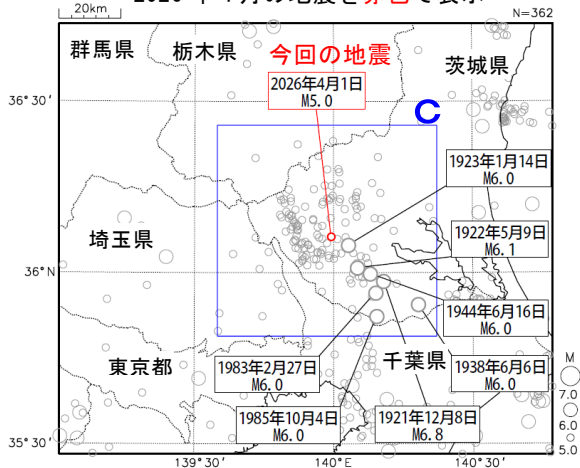
領域a内の断面図(A-B投影)



領域b内のM-T図及び回数積算図



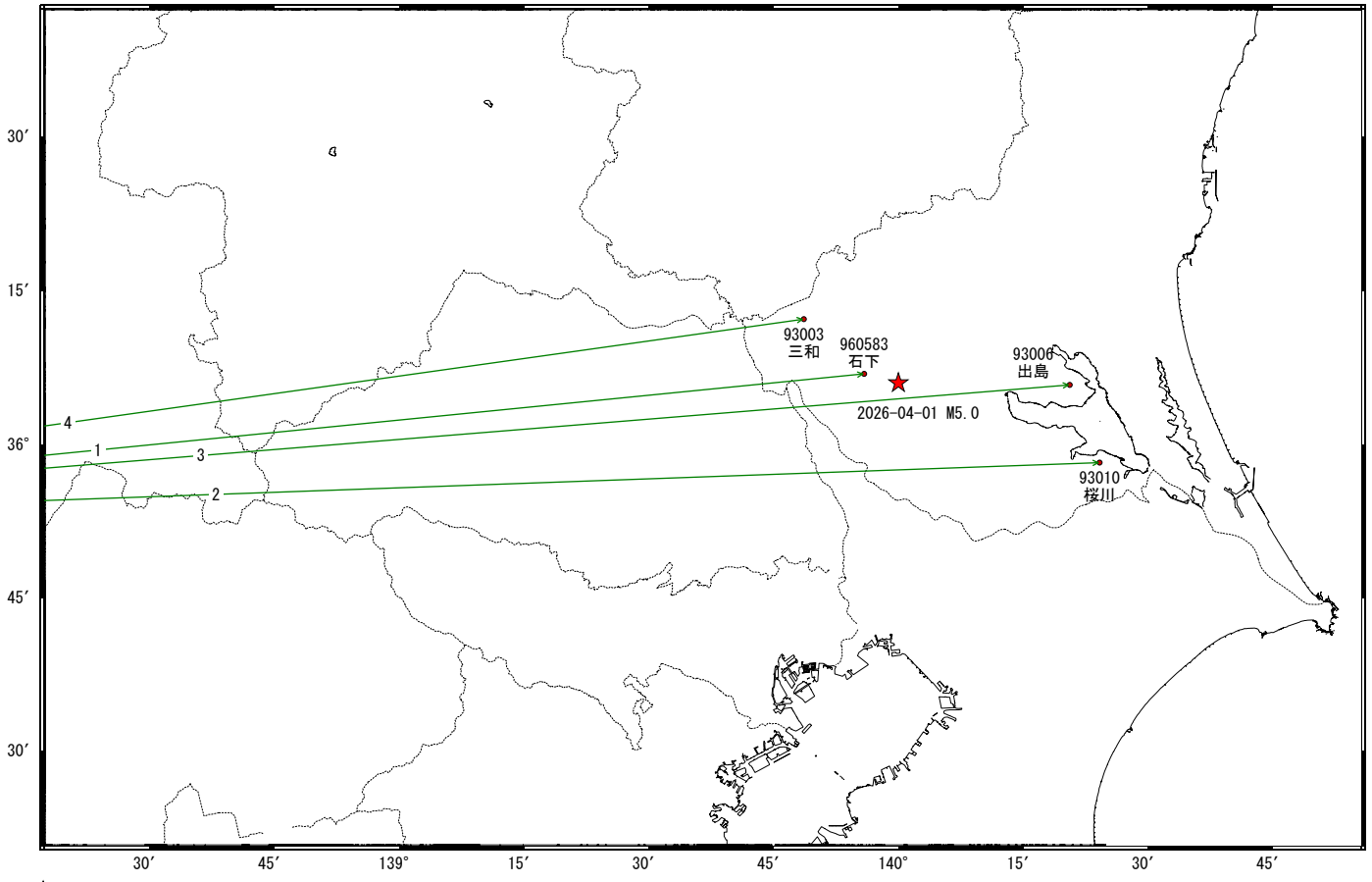
震央分布図
(1919年1月1日～2026年4月5日、
深さ0～120km、 $M \geq 5.0$)
2026年4月の地震を赤色で表示



茨城県南部の地震(4月1日 M5.0)前後の観測データ(暫定)

この地震に伴う顕著な地殻変動は見られない。

基線図

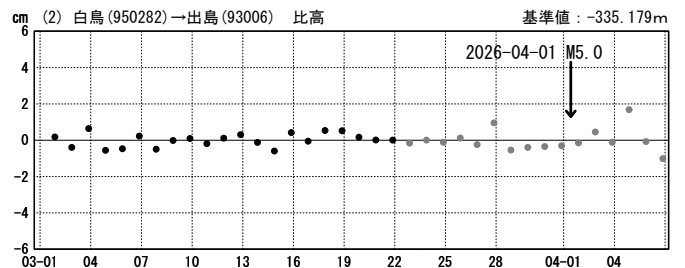
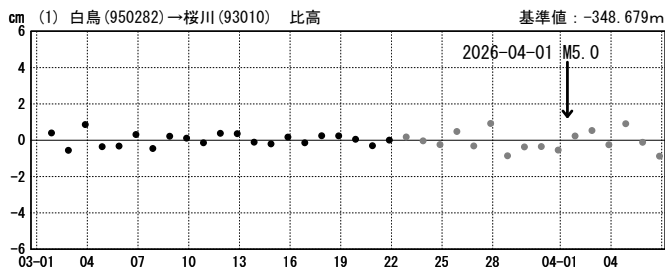
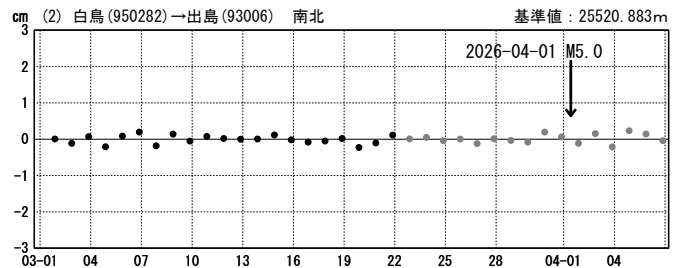
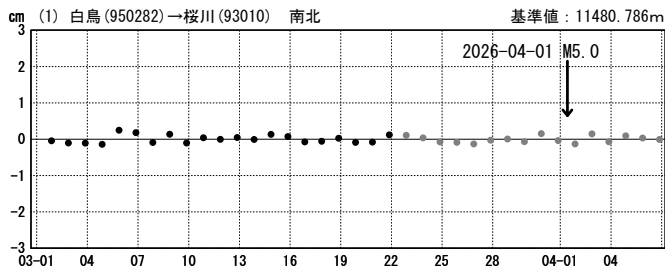
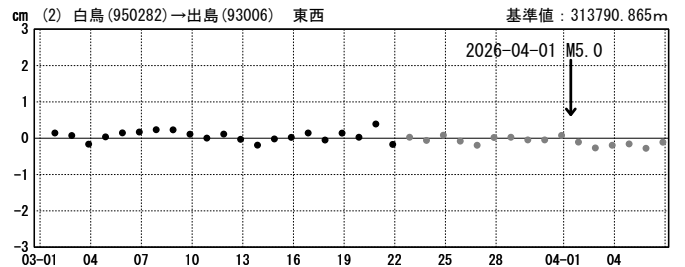
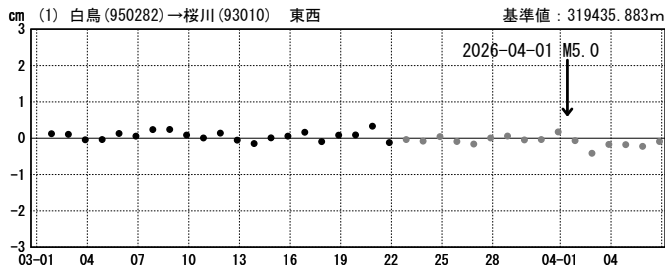


★震央

成分変化グラフ

期間: 2026-03-01~2026-04-06 JST

期間: 2026-03-01~2026-04-06 JST

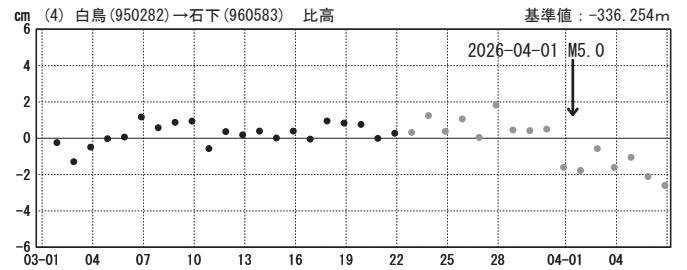
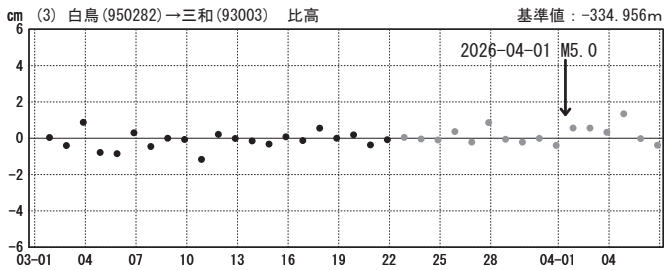
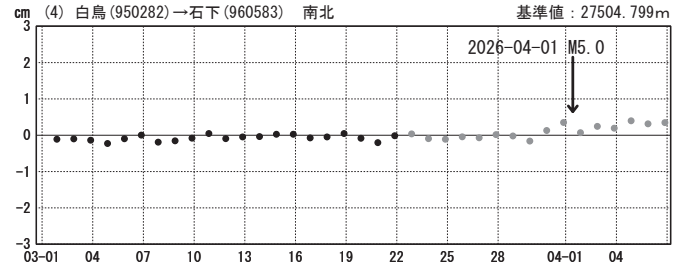
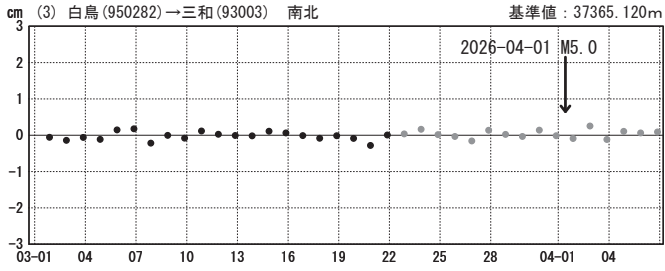
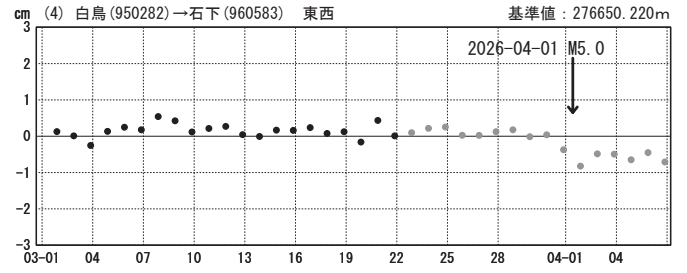
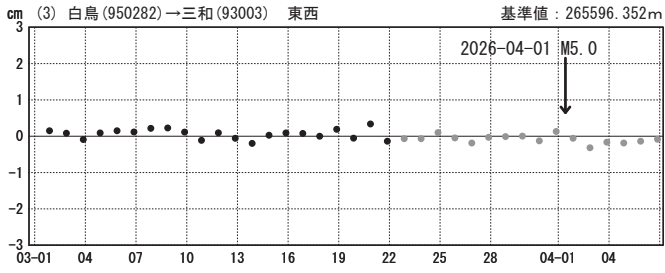


●---[F5.1:最終解] ●---[R5.1:速報解]

成分変化グラフ

期間：2026-03-01～2026-04-06 JST

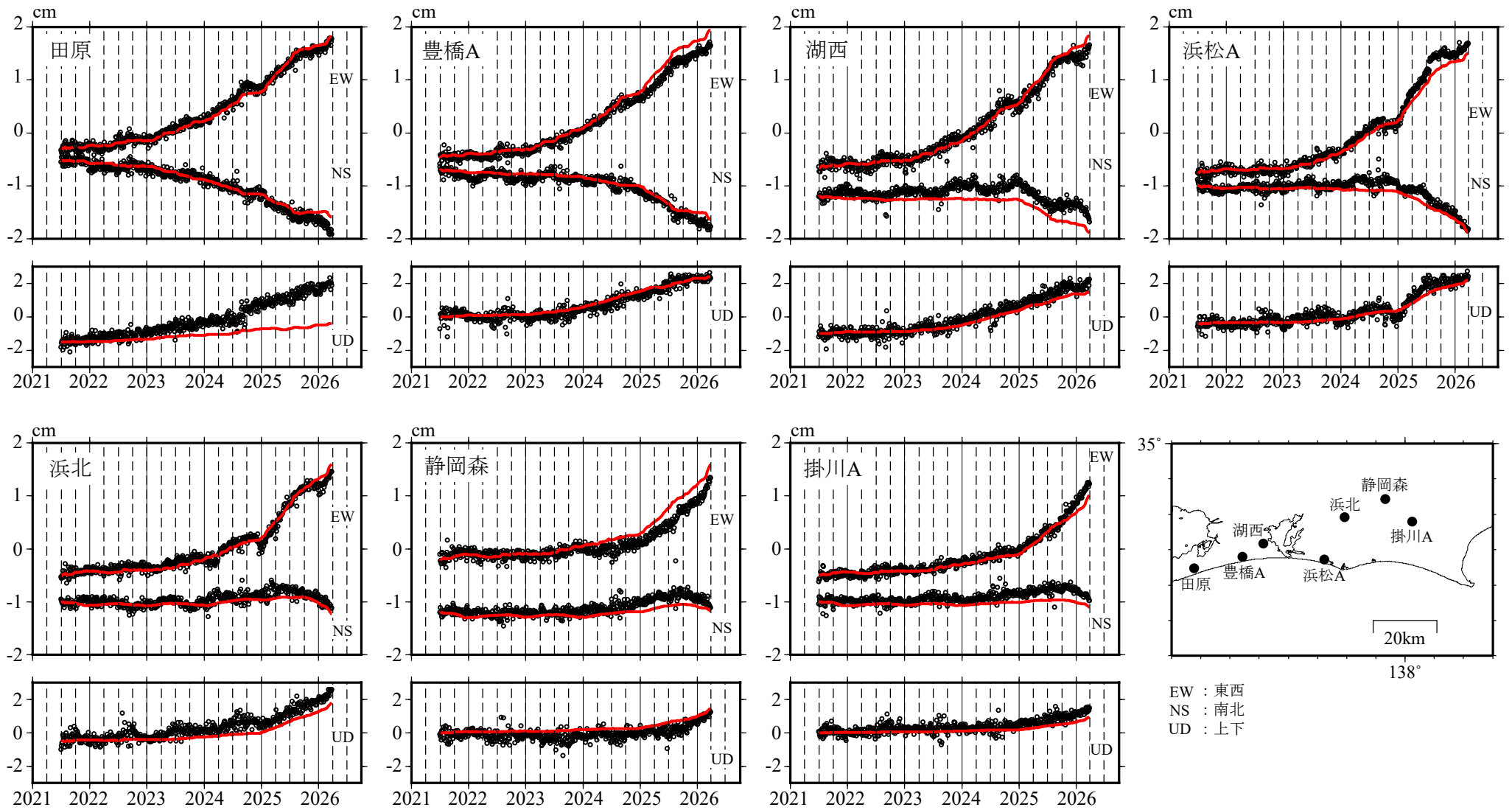
期間：2026-03-01～2026-04-06 JST



石下：地震に伴う局所的な変化があった可能性がある。

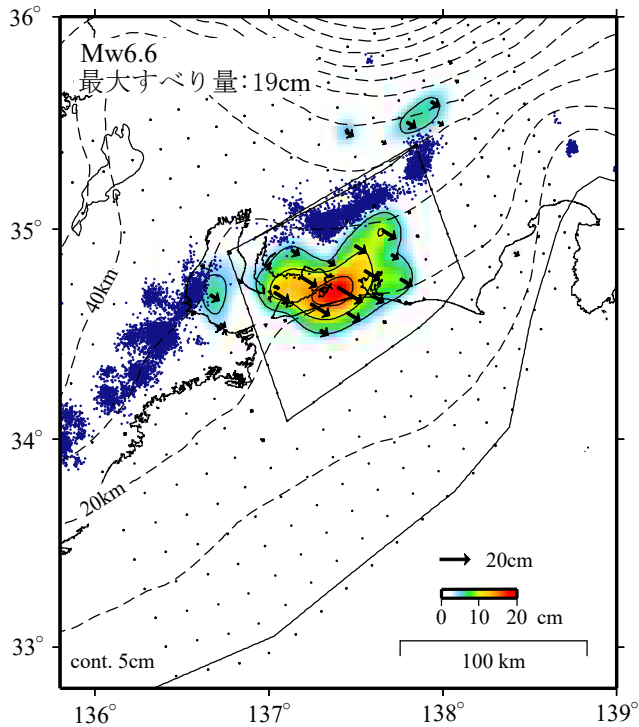
●—[F5.1:最終解] ●—[R5.1:速報解]

東海地域の観測点の座標時系列(黒丸)と計算値(赤線)
時間依存のインバージョン

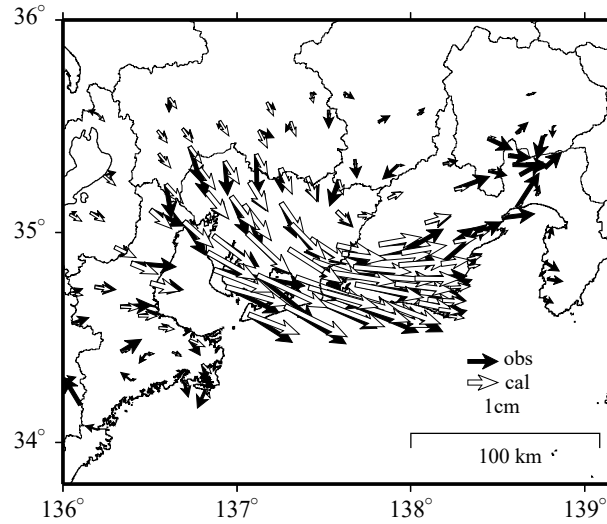


GNSSデータから推定された東海地域の長期的ゆっくりすべり (暫定)

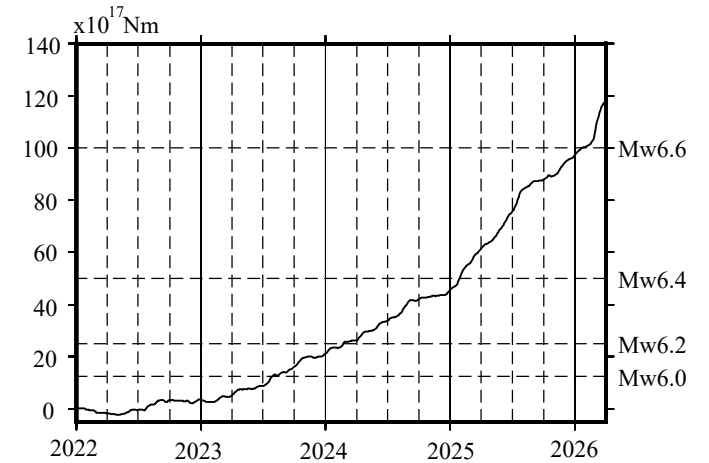
推定すべり分布
(2022-01-01/2026-03-26)



観測値(黒)と計算値(白)の比較
(2022-01-01/2026-03-26)



モーメント時系列(試算)



Mw及び最大すべり量はプレート面に沿って評価した値を記載している。
すべり量(カラー)及びすべりベクトルは水平面に投影したものを示している。
推定したすべり量が標準偏差(σ)の3倍以上のグリッドを黒色で示している。

使用データ：GEONETによる日々の座標値(F5.1解、R5.1解)
 ・F5.1解(2021-07-01/2026-02-28) + R5.1解(2026-03-01/2026-03-26)
 ・トレンド期間：2020-01-01/2022-01-01(年周・半年周成分は補正していない)
 モーメント計算範囲：左図の黒枠内側
 観測値：3日間の平均値をカルマンフィルターで平滑化した値
 黒破線：フィリピン海プレート上面の等深線(Hirose et al., 2008)
 すべり方向：プレートの沈み込み方向に拘束
 青丸：低周波地震(気象庁一元化震源)(期間：2022-01-01/2026-03-26)
 固定局：三隅

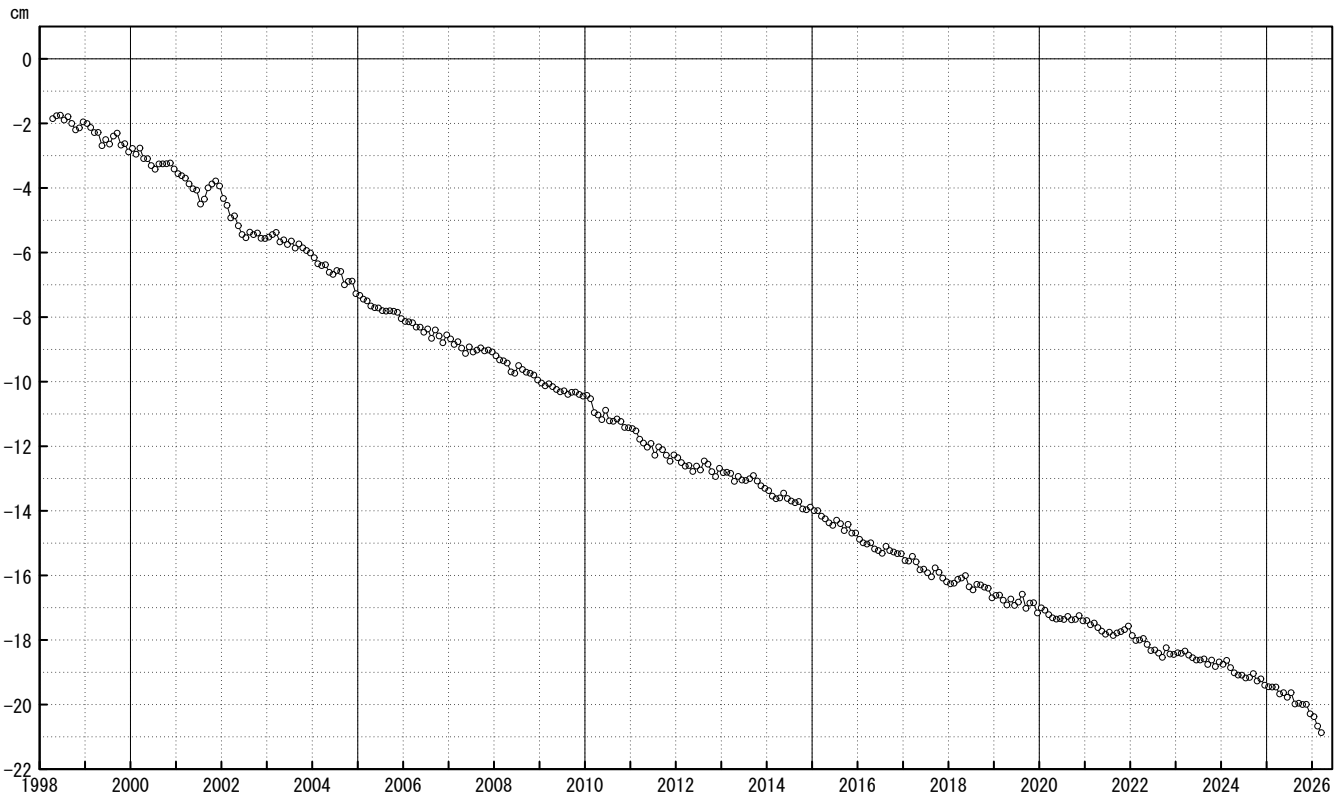
- *モーメント：断層運動のエネルギーの目安となる量。
- *電子基準点の保守等による変動は補正している。
- *気象庁カタログ(2017年以降)の短期的ゆっくりすべりを補正している。
- *共通誤差成分を推定している。
- *平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震の粘弾性変形は補正している(Suito, 2017)。
- *令和6年能登半島地震に伴う地殻変動は補正している。
- *令和6年能登半島地震の粘弾性変形は補正している(Suito, 2025)。

御前崎 電子基準点の上下変動

水準測量と GNSS 連続観測

掛川に対して、御前崎が沈降する長期的な傾向が続いている。

掛川 A (161216) - 御前崎 A (091178)



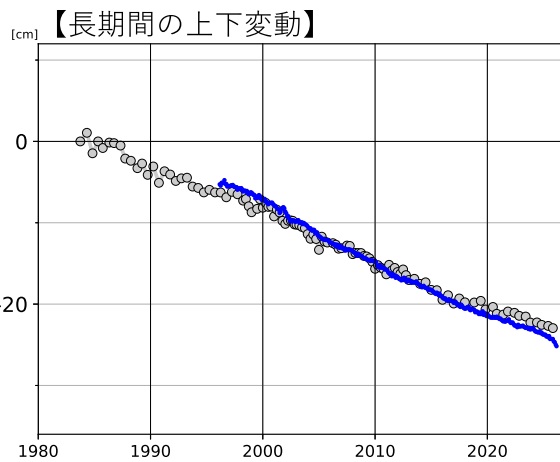
○ : GNSS 連続観測 (GEONET 月平均値)

・ GNSS 連続観測のプロット点は、GEONET による日々の座標値 (F5.1 : 最終解) から計算した値の月平均値。最新のプロット点は 3 月 1 日～3 月 7 日の平均。

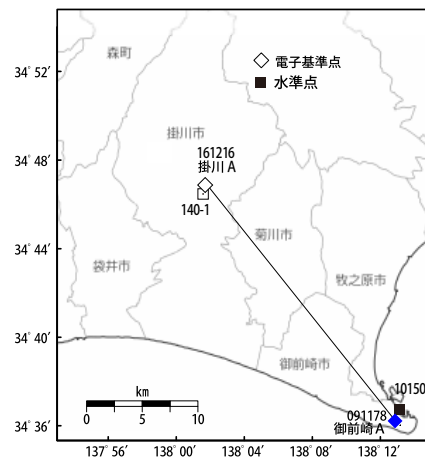
※ 1 2009 年 8 月 11 日の駿河湾の地震に伴う電子基準点「御前崎」の局所的な変動について、地震前後の水準測量で得られた「御前崎」周辺の水準点との比高の差を用いて補正を行った。

※ 2 電子基準点「御前崎 A」については、2010 年 3 月 23 日まで電子基準点「御前崎」のデータを使用。

※ 3 電子基準点「掛川 A」については、2017 年 1 月 29 日まで電子基準点「掛川」のデータを使用。



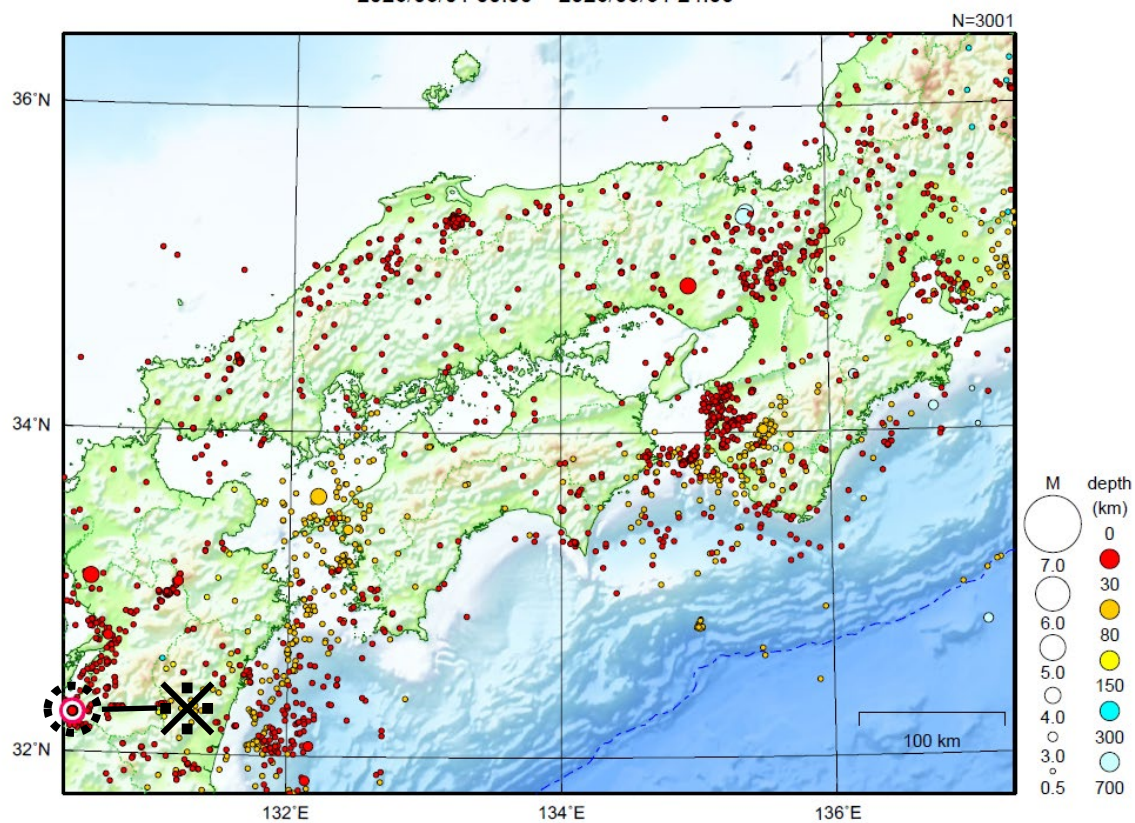
「固定局：掛川 A (161216)」



・ 青色のプロットは上記の GEONET による日々の座標値の月平均値。
・ 灰色のプロットは電子基準点の最寄りの水準点「10150」の水準測量結果を示している (固定：140-1)。

近畿・中国・四国地方

2026/03/01 00:00 ~ 2026/03/31 24:00



地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOP030 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

特に目立った地震活動はなかった。

※で示した地震については九州地方の資料を参照。

[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

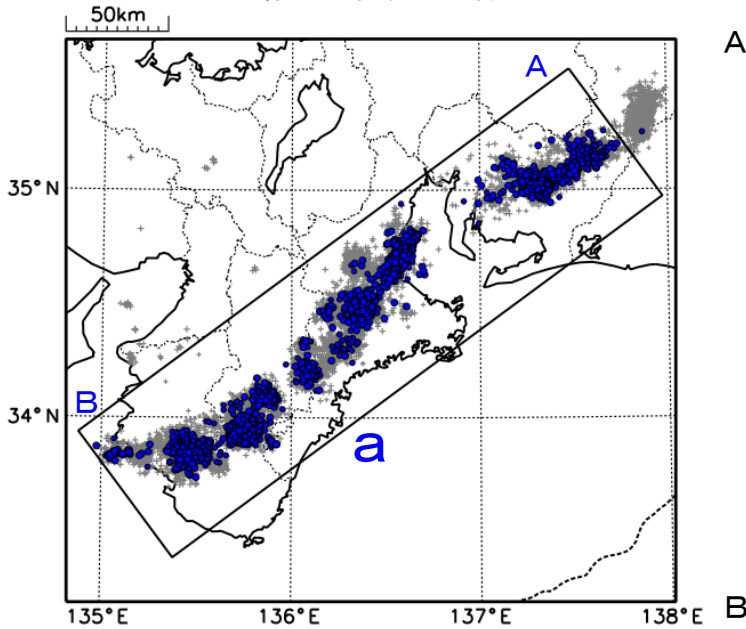
紀伊半島中部から東海の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

2月8日から24日、3月2日から7日、9日から10日及び12日から16日にかけて紀伊半島中部から東海にかけて深部低周波地震(微動)を観測した。

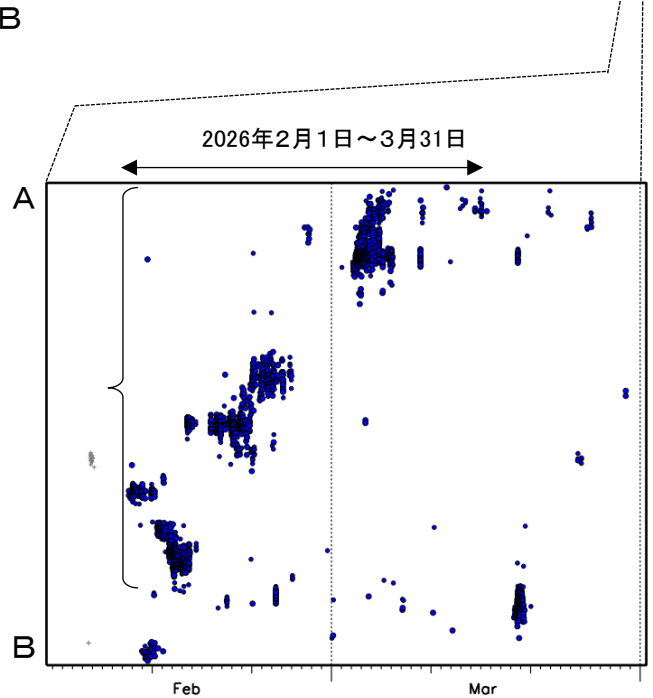
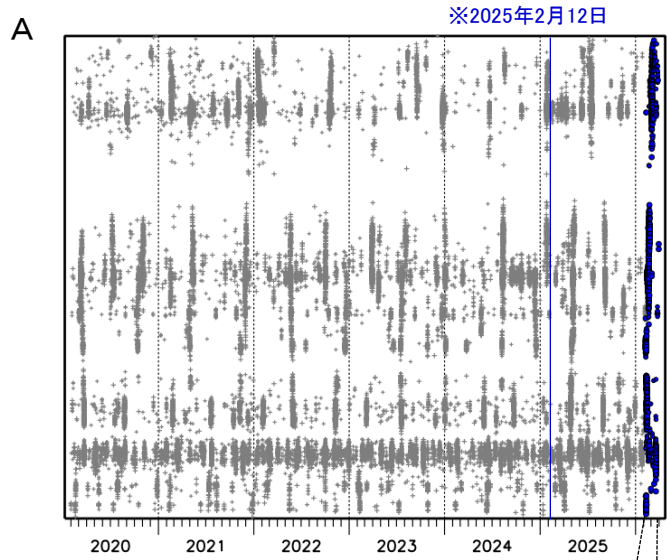
深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計・傾斜計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

深部低周波地震(微動)活動

震央分布図(2020年2月1日~2026年3月31日、
深さ0~60km、Mすべて)
灰:2020年2月1日~2026年2月7日、
青:2026年2月8日以降



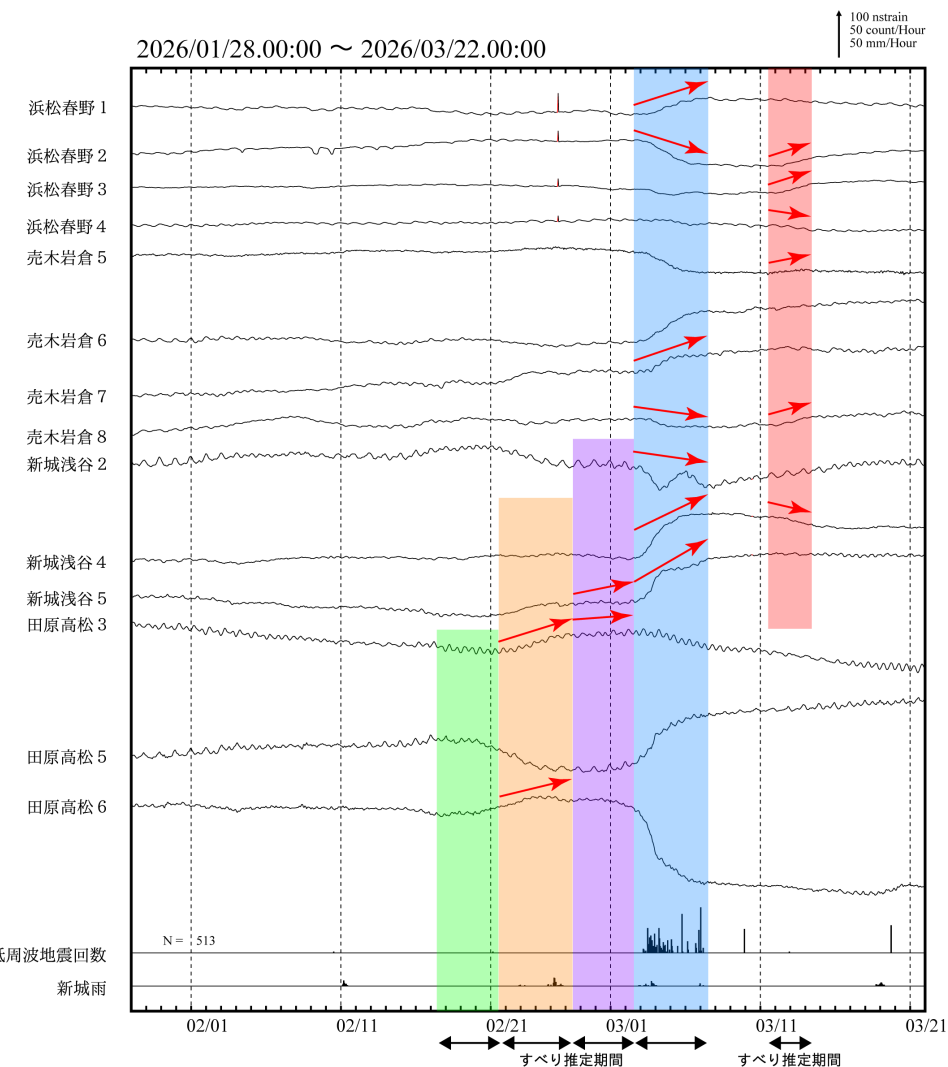
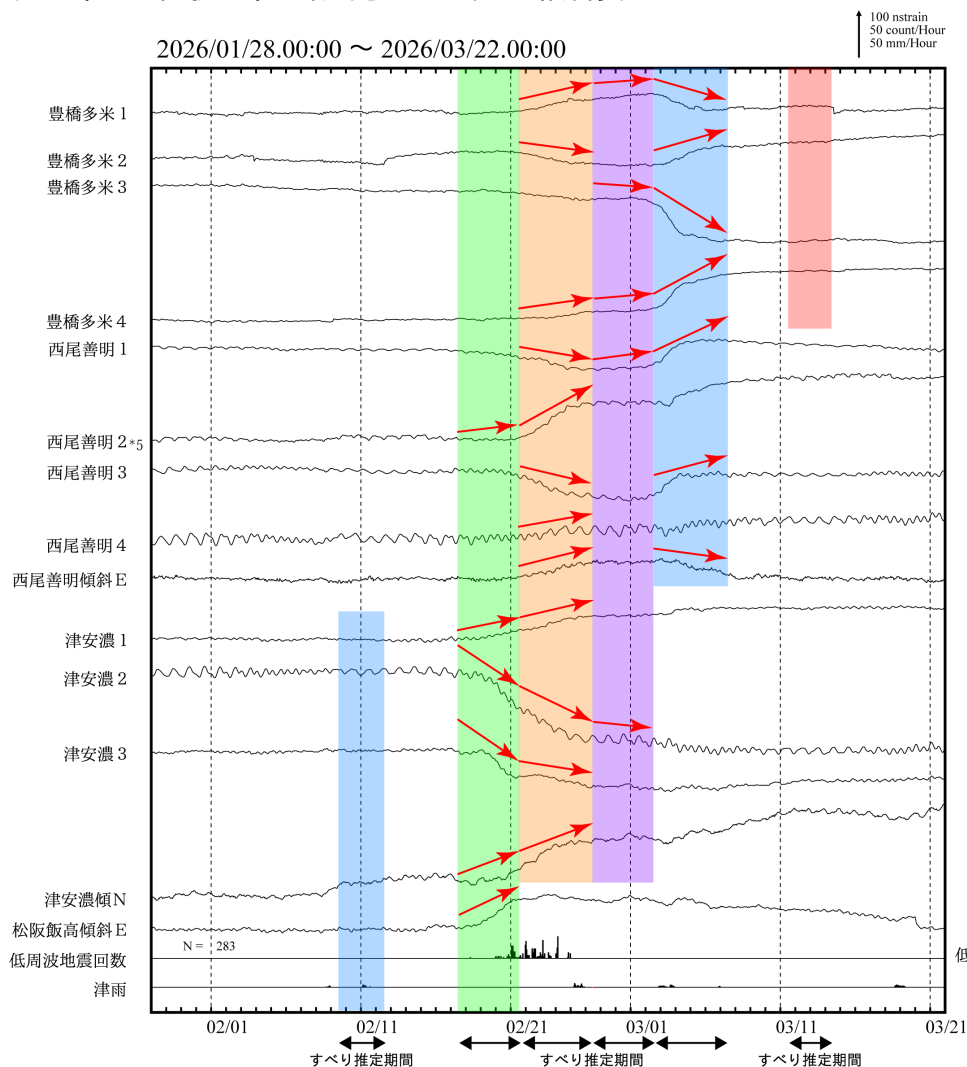
領域a内の時空間分布図(A-B投影)



※2025年2月12日から、深部低周波地震(微動)の検知手法の改善により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

紀伊半島中部から東海で観測した短期的ゆっくりすべり(2月9日～3月14日)

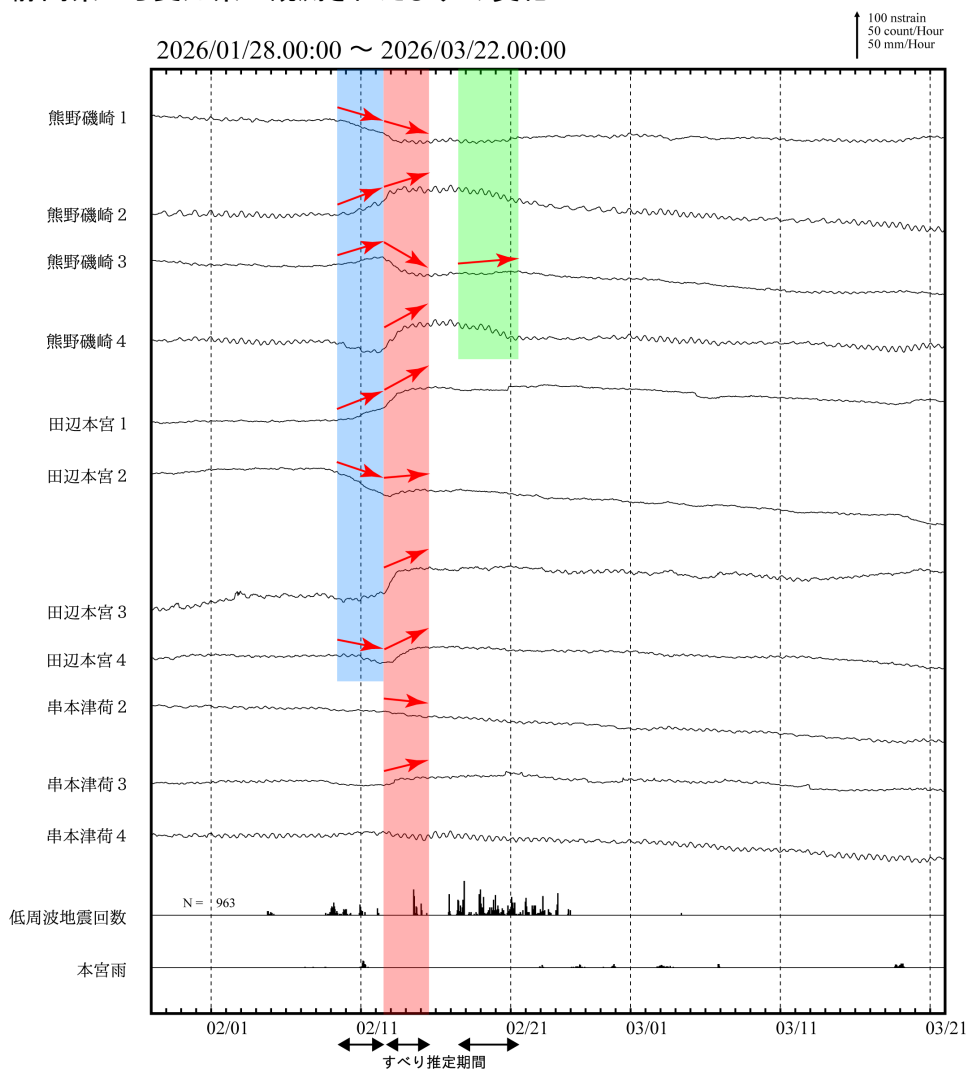
愛知県から和歌山県で観測されたひずみ・傾斜変化



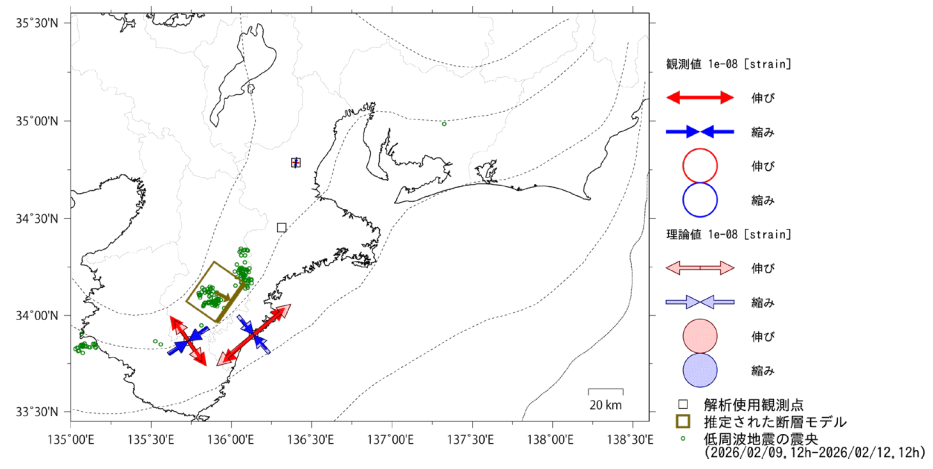
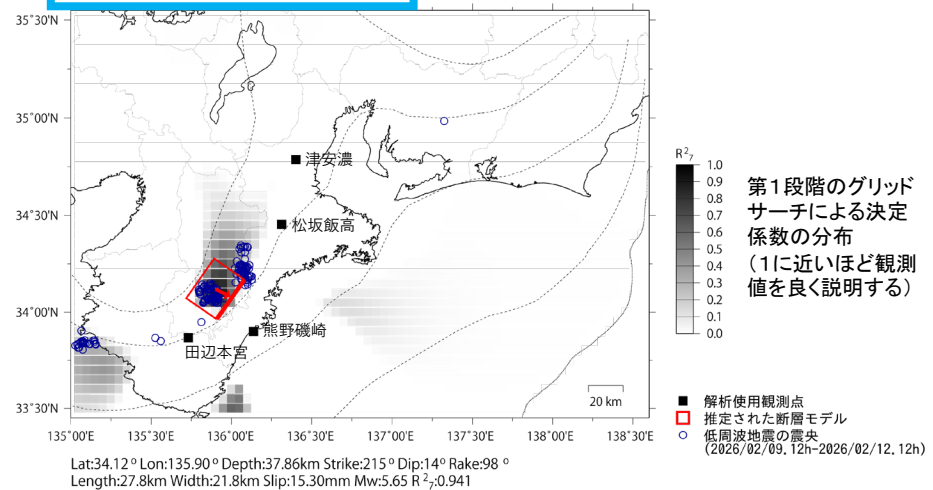
豊橋多米、西尾善明、津安濃、松坂飯高、熊野磯崎、田辺本宮及び串本津荷は産業技術総合研究所のひずみ・傾斜計である。
 解析に使用したチャンネルについては背景色を塗り、そのうち有意な変化が見られたチャンネルに赤矢印を描画している。
 低周波地震回数はゆっくりすべりを示す断層モデル周辺で発生したものを積算している。

紀伊半島中部から東海で観測した短期的ゆっくりすべり(2月9日～3月14日)

静岡県から愛知県で観測されたひずみ変化



2026年2月9日12時～12日12時 Mw5.6



解析に使用したチャンネルについては背景色を塗り、そのうち有意な変化が見られたチャンネルに赤矢印を描画している。

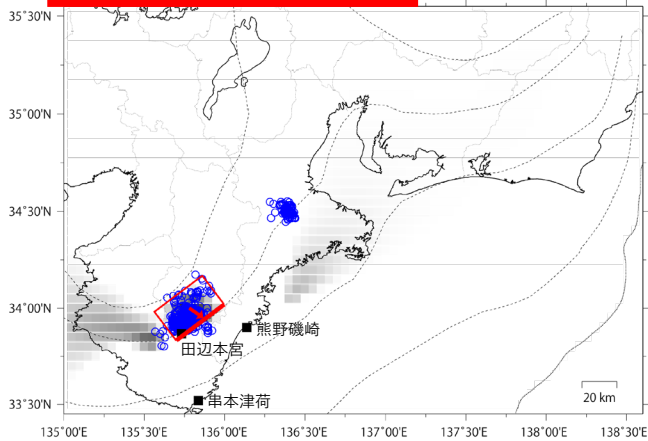
低周波地震回数はゆっくりすべりを示す断層モデル周辺で発生したものを積算している。

前頁に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
 ・断層サイズを20km×20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
 ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

紀伊半島中部から東海で観測した短期的ゆっくりすべり(2月9日～3月14日)

2026年2月12日12時～15日12時 Mw5.7



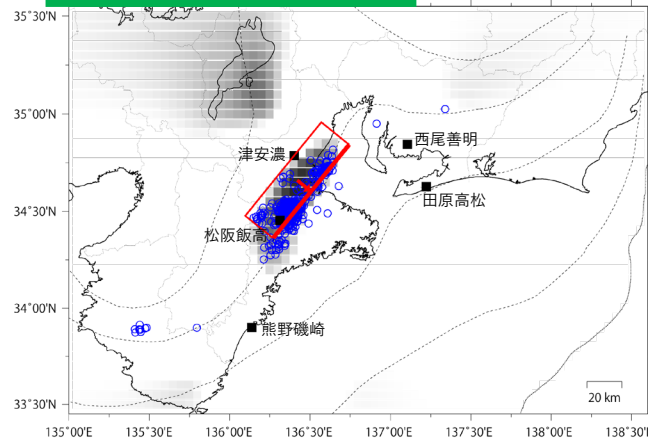
Lat:34.00° Lon:135.78° Depth:34.96km Strike:233° Dip:18° Rake:109°
Length:34.5km Width:21.9km Slip:14.70mm Mw:5.70 R²:0.924

R²
1.0
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
0.3
0.2
0.1
0.0

第1段階のグリッド
サーチによる決定
係数の分布
(1に近いほど観測
値を良く説明する)

■ 解析使用観測点
■ 推定された断層モデル
○ 低周波地震の震央
(2026/02/12, 12h-2026/02/15, 12h)

2026年2月17日12時～21日12時 Mw5.8



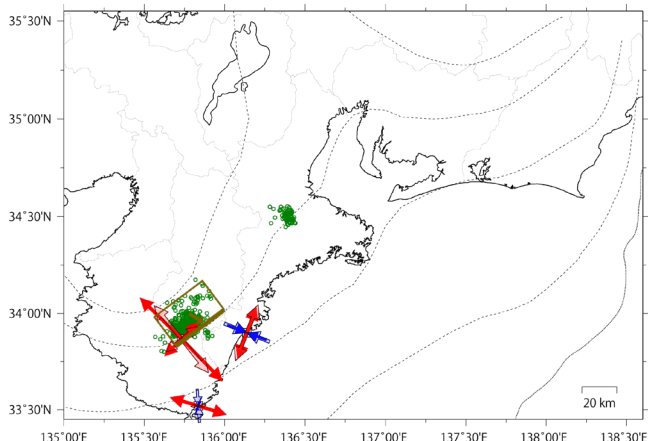
Lat:34.66° Lon:136.42° Depth:26.89km Strike:219° Dip:8° Rake:90°
Length:68.7km Width:20.5km Slip:9.40mm Mw:5.75 R²:0.880

R²
1.0
0.9
0.8
0.7
0.6
0.5
0.4
0.3
0.2
0.1
0.0

第1段階のグリッド
サーチによる決定
係数の分布
(1に近いほど観測
値を良く説明する)

■ 解析使用観測点
■ 推定された断層モデル
○ 低周波地震の震央
(2026/02/17, 12h-2026/02/21, 12h)

参考



観測値 2e-08 [strain]

伸び

縮み

伸び

縮み

理論値 2e-08 [strain]

伸び

縮み

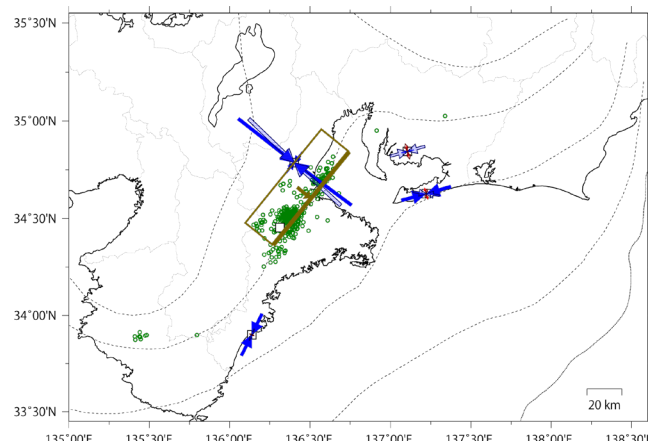
伸び

縮み

■ 解析使用観測点

■ 推定された断層モデル

○ 低周波地震の震央
(2026/02/12, 12h-2026/02/15, 12h)



観測値 2e-08 [strain]

伸び

縮み

伸び

縮み

理論値 2e-08 [strain]

伸び

縮み

伸び

縮み

■ 解析使用観測点

■ 推定された断層モデル

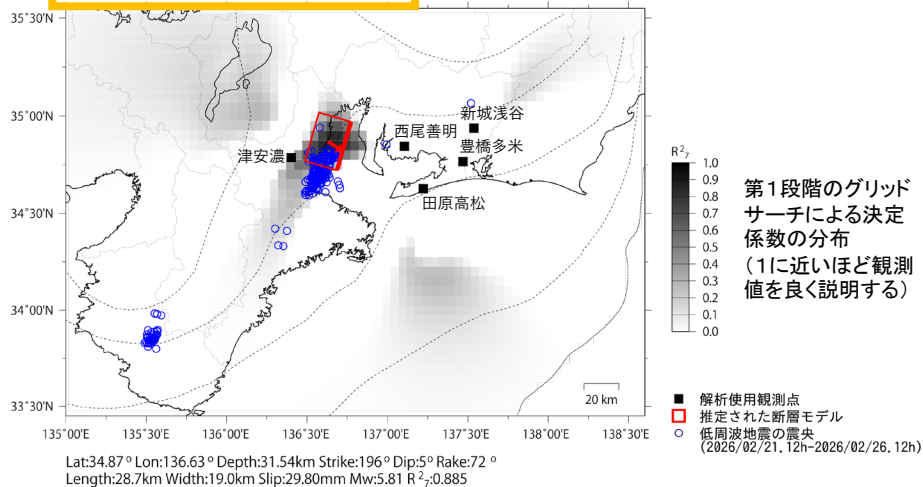
○ 低周波地震の震央
(2026/02/17, 12h-2026/02/21, 12h)

前々頁～前頁に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

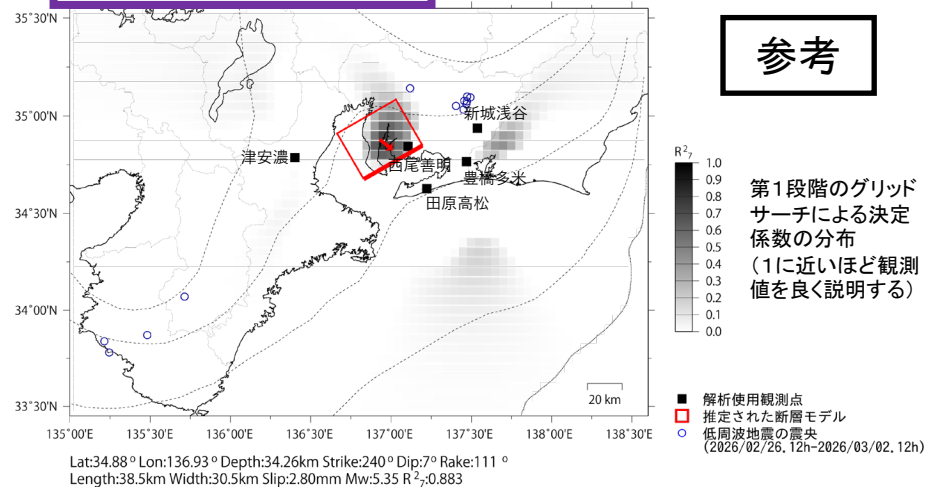
断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
・断層サイズを20km×20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

紀伊半島中部から東海で観測した短期的ゆっくりすべり(2月9日～3月14日)

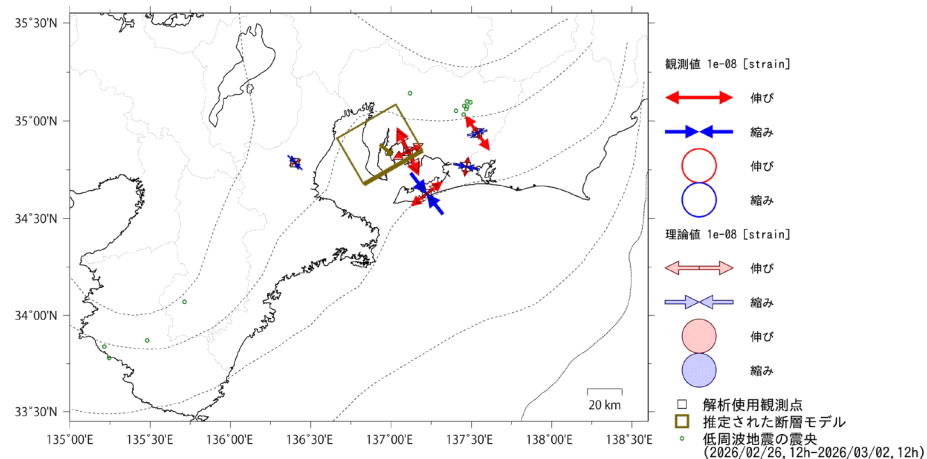
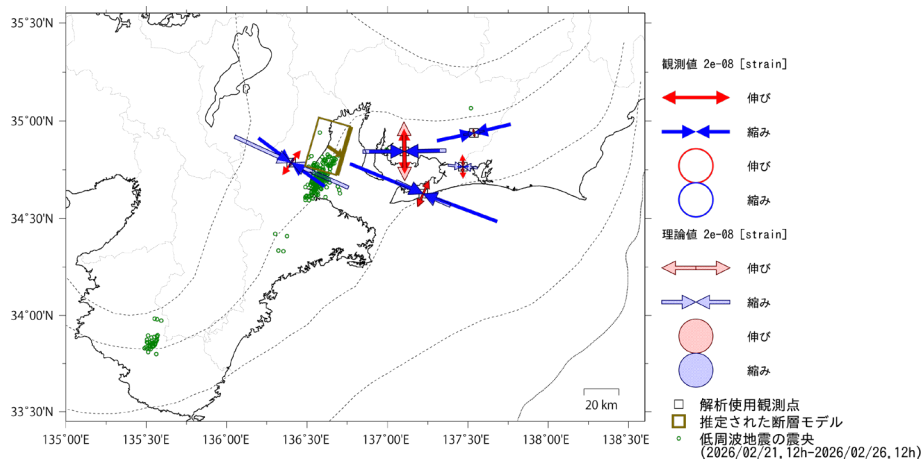
2026年2月21日12時～26日12時 Mw5.8



2026年2月26日12時～3月2日12時 Mw5.3



参考

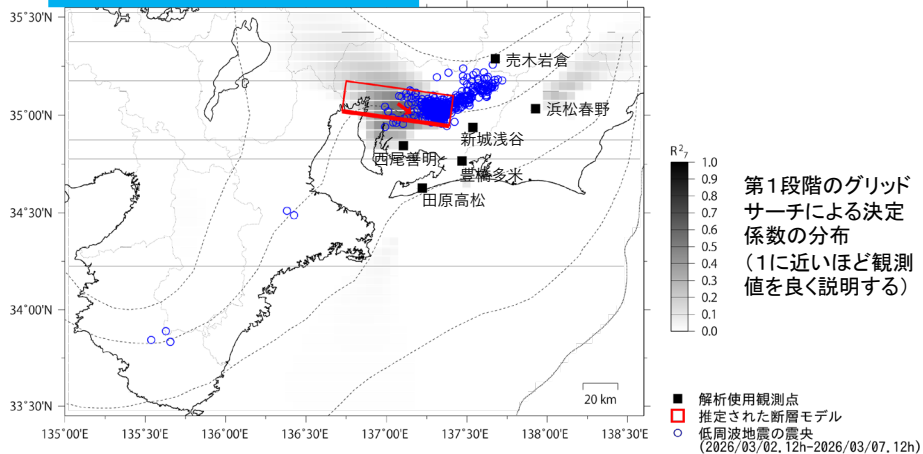


前々々頁～前々頁に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
 ・断層サイズを20km×20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
 ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

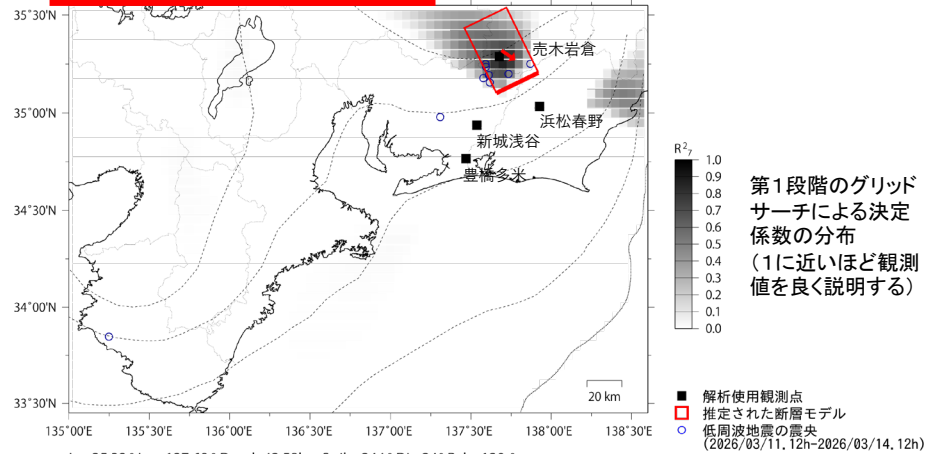
紀伊半島中部から東海で観測した短期的ゆっくりすべり(2月9日～3月14日)

2026年3月2日12時～7日12時 Mw6.1

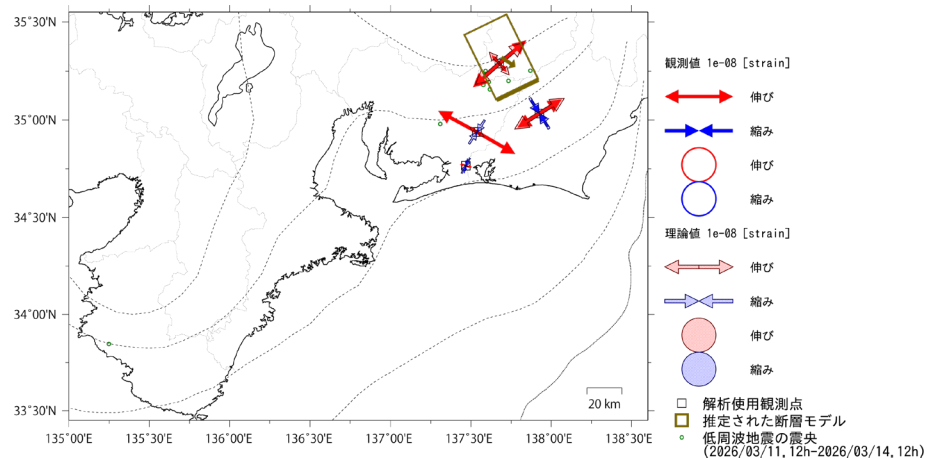
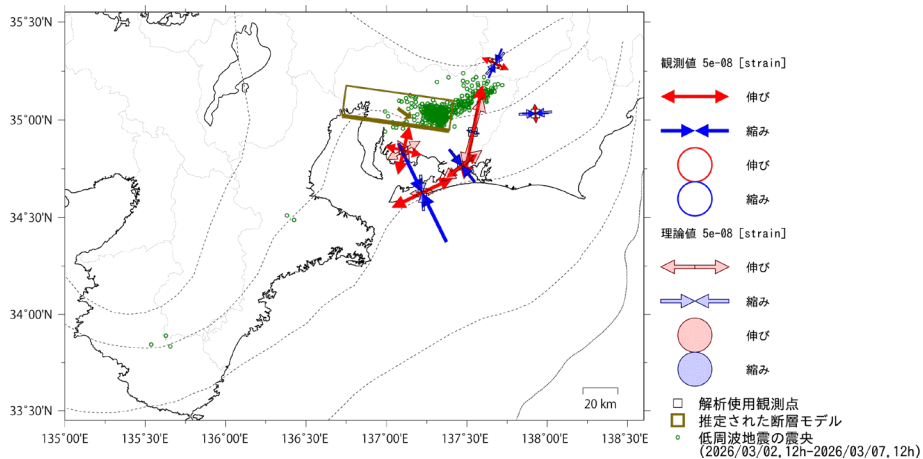


Lat:35.06° Lon:137.07° Depth:38.70km Strike:278° Dip:9° Rake:152°
 Length:61.2km Width:17.5km Slip:41.00mm Mw:6.10 R²:0.797

2026年3月11日12時～14日12時 Mw5.6



Lat:35.32° Lon:137.69° Depth:42.58km Strike:244° Dip:24° Rake:120°
 Length:26.4km Width:45.0km Slip:6.20mm Mw:5.58 R²:0.893



前々々々頁～前々々頁に示す観測点での変化量をもとにすべり推定を行ったところ、図の場所にゆっくりすべりを示す断層モデルが求まった。

断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
 ・断層サイズを20km×20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
 ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

(2026年3月)

● 3月1～7日頃に東海地方において、活発な微動活動。

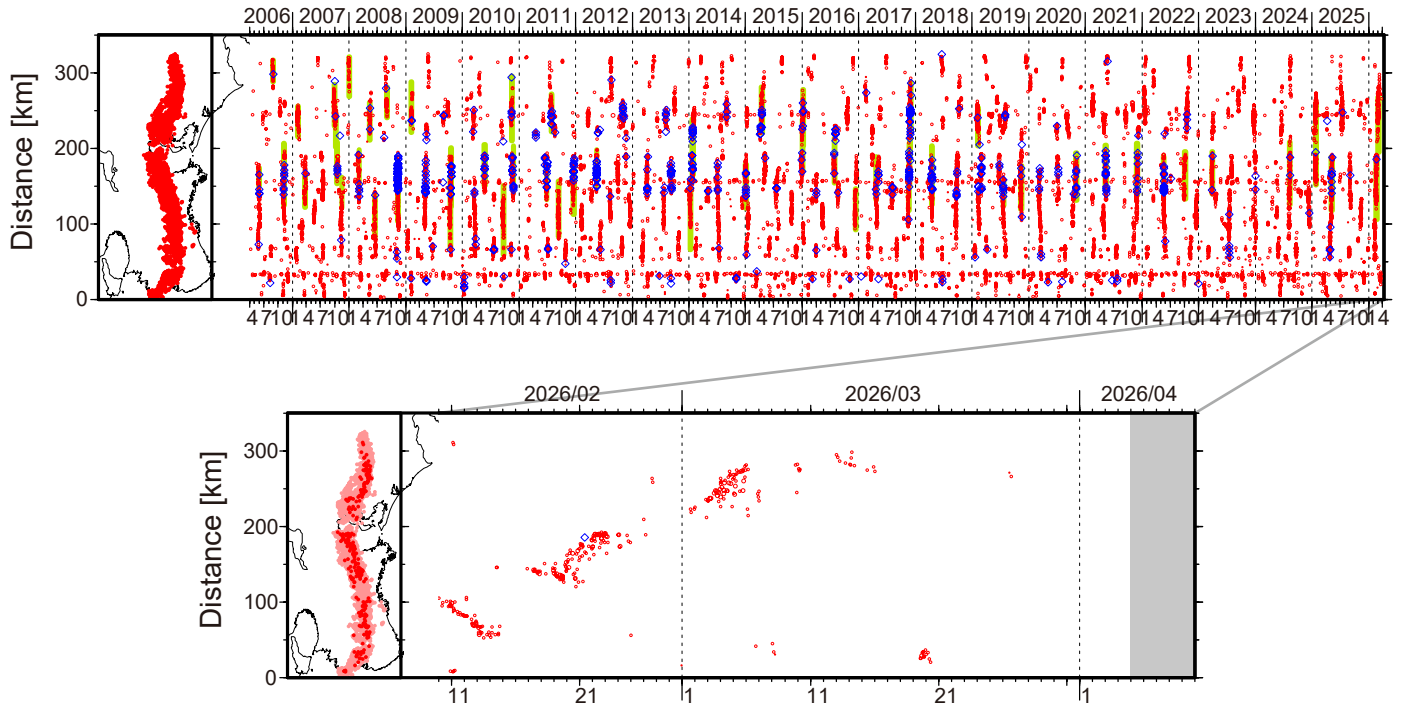


図1. 紀伊半島・東海地域における2006年4月～2026年4月4日までの深部低周波微動の時空間分布(上図). 赤丸はエンベロープ相関・振幅ハイブリッド法(Maeda and Obara, 2009)およびクラスタ処理(Obara et al., 2010)によって1時間毎に自動処理された微動分布の重心である. 青菱形は周期20秒に卓越する超低周波地震(Ito et al., 2007)である. 黄緑色の太線はこれまでに検出された短期的スロースリップイベント(SSE)を示す. 下図は2026年3月を中心とした期間の拡大図である. 3月1～7日頃に愛知県西部から愛知・長野県境付近において、活発な活動がみられた. この活動は愛知県西部から開始し、東方向への活動域の拡大がみられた. この活動に際し、傾斜変動から短期的SSEの断層モデルも推定されている. その後愛知・長野県境付近において、3月9～10日頃および3月13～16日頃に、それぞれごく小規模および小規模な活動がみられた. 後者の活動ではやや南西方向への活動域の移動がみられた. 和歌山県中部では、3月8日頃および3月19～20日頃に、それぞれごく小規模な活動がみられた.

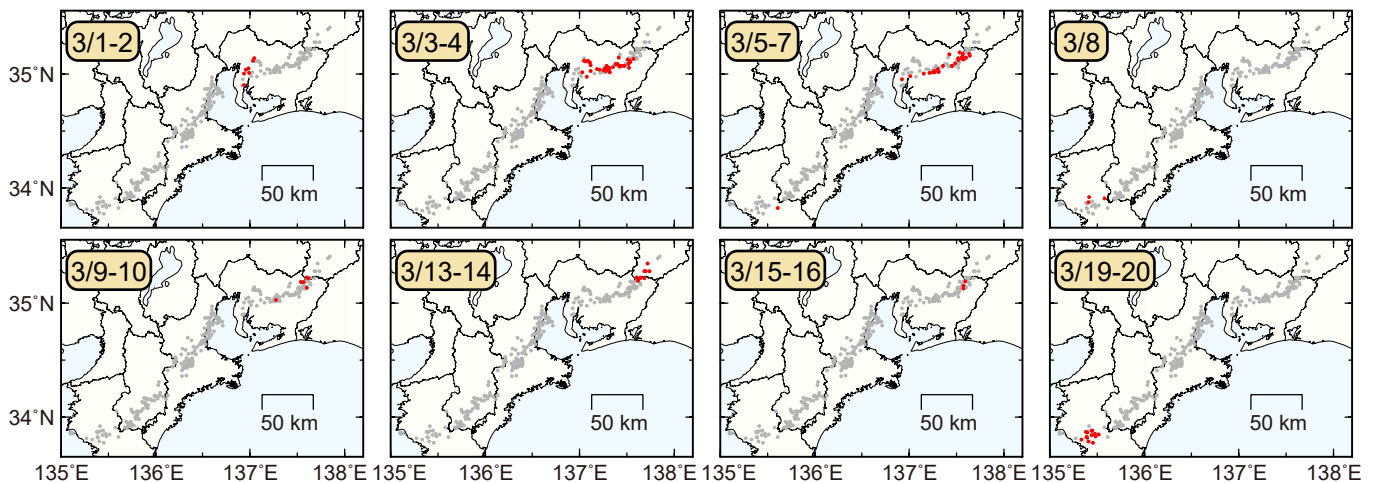


図2. 各期間に発生した微動(赤丸)および深部超低周波地震(青菱形). 灰丸は、図1の拡大図で示した期間における微動分布を示す.

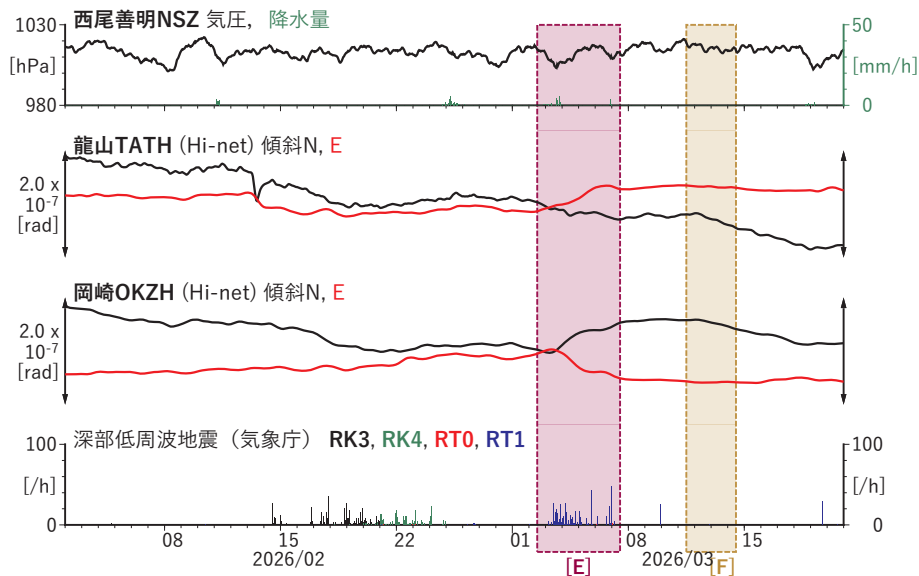
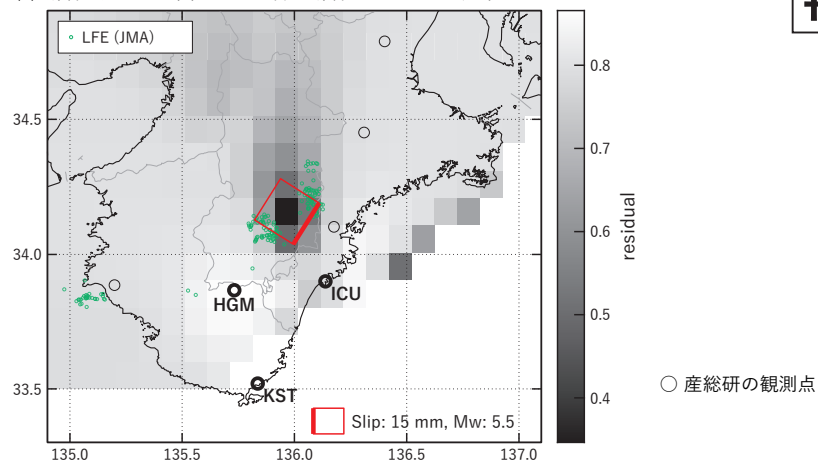


図2 歪・傾斜の時間変化(4) (2026/02/02 00:00–2026/03/20 00:00 (JST))

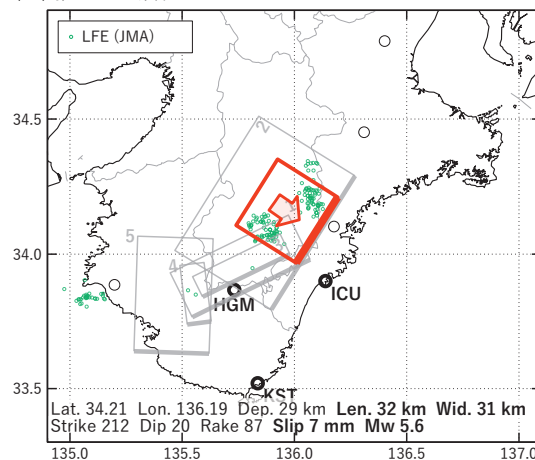
[A] 2026/02/09–12AM

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



再掲

(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

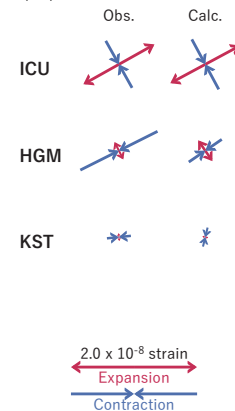


図3 2026/02/09–12AMの歪変化(図2[A])を説明する断層モデル。

(a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

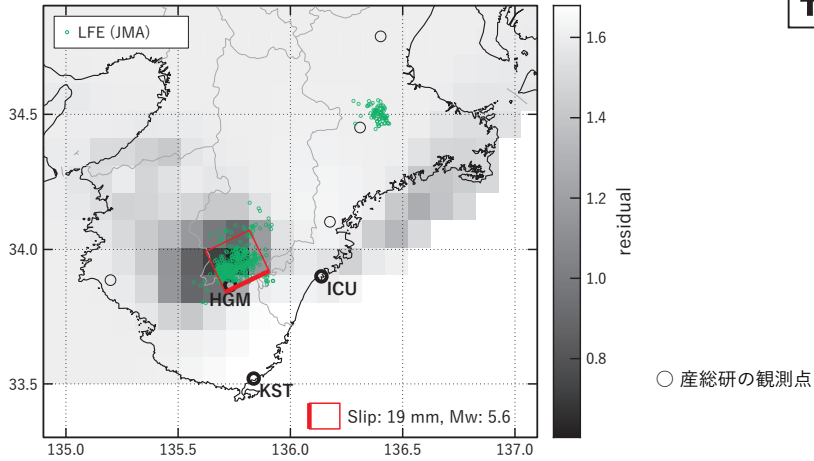
(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。

1: 2025/04/27–28 (Mw 5.8), 2: 2025/04/29–30AM (Mw 5.8), 3: 2025/08/29–31AM (Mw 5.5), 4: 2025/12/01–02 (Mw 5.2), 5: 2026/01/26–31 (Mw 5.4)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

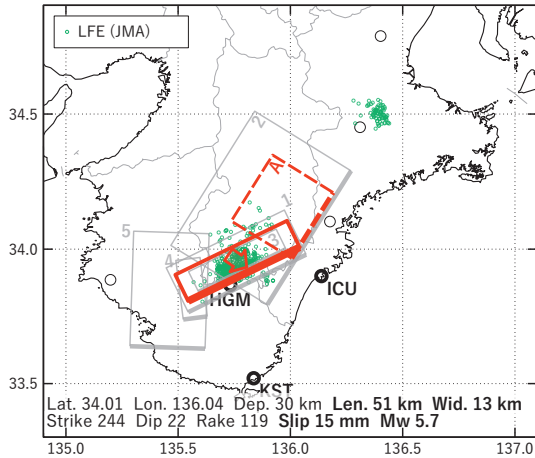
[B] 2026/02/12AM-15AM

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



再掲

(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪



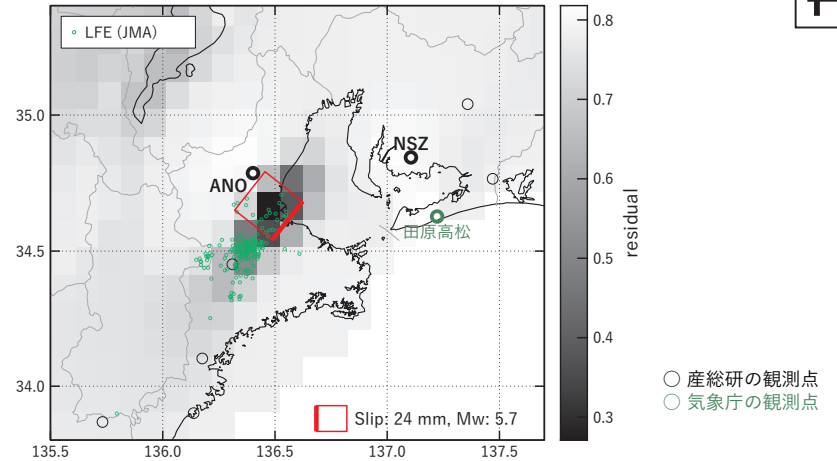
図4 2026/02/12PM-15AMの歪変化 (図2[B]) を説明する断層モデル。

- (a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。
 (b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面 (赤色矩形) と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。赤色破線矩形は今回の一連のイベント。
 1: 2025/04/27-28 (Mw 5.8), 2: 2025/04/29-30AM (Mw 5.8), 3: 2025/08/29-31AM (Mw 5.5), 4: 2025/12/01-02 (Mw 5.2),
 5: 2026/01/26-31 (Mw 5.4), A: 2026/02/09PM-12AM (Mw 5.6)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

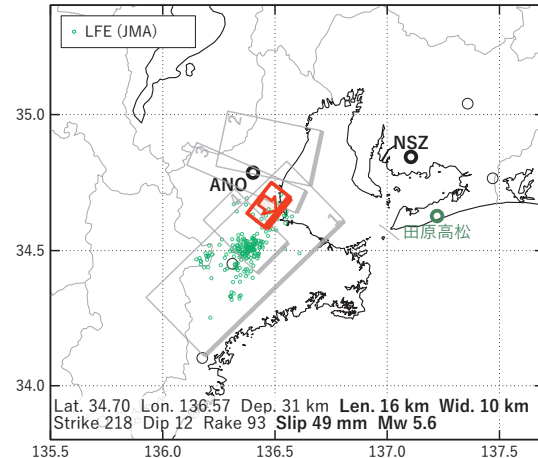
[C] 2026/02/19-20

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



再掲

(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

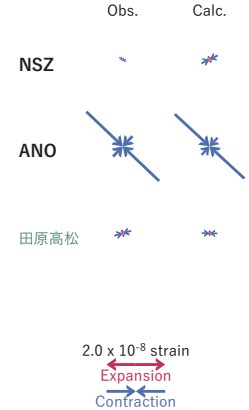


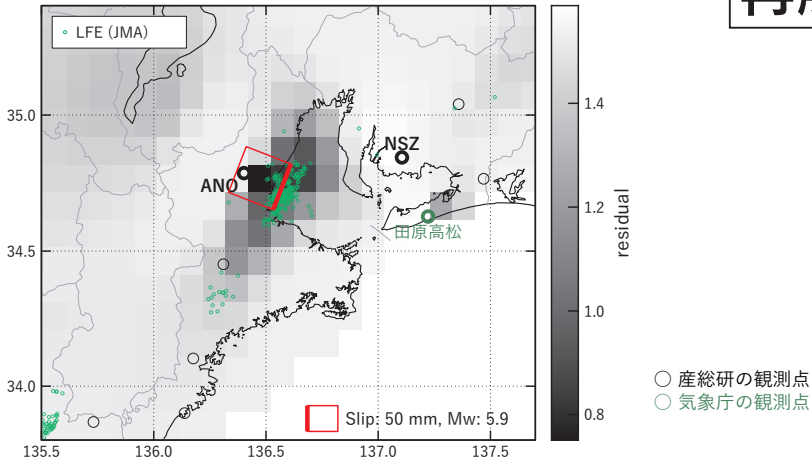
図5 2026/02/19-20の歪変化 (図2[C]) を説明する断層モデル。

- (a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。
 (b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面 (赤色矩形) と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。
 1: 2025/05/05PM-09AM (Mw 5.9), 2: 2025/09/01PM-03AM (Mw 5.4), 3: 2025/09/03PM-04 (Mw 5.6),
 4: 2025/09/05-07 (Mw 5.6)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

[D] 2026/02/21-26

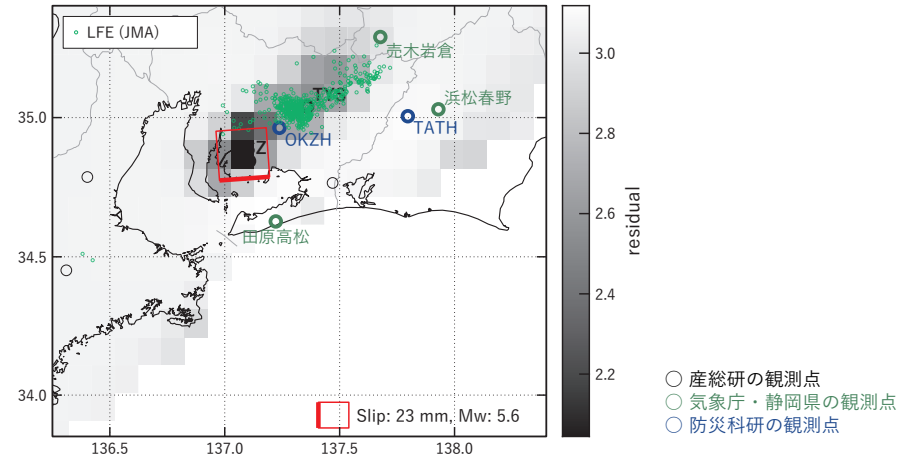
(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



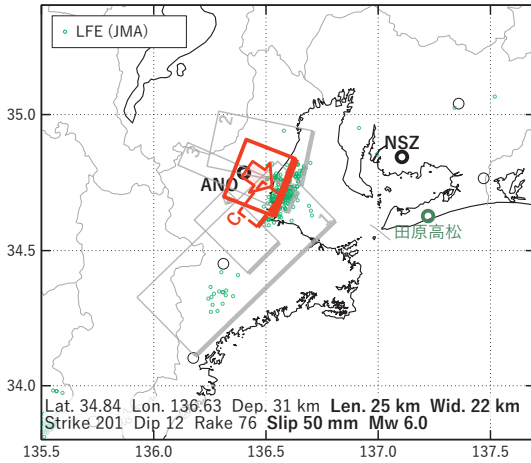
再解析

[E] 2026/03/02PM-07AM

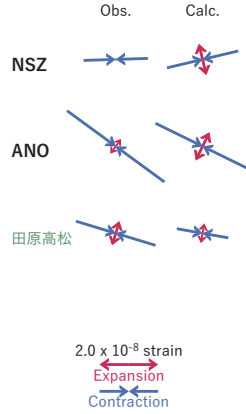
(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



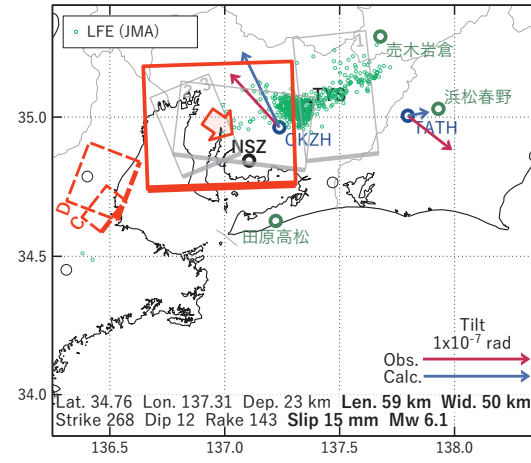
(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

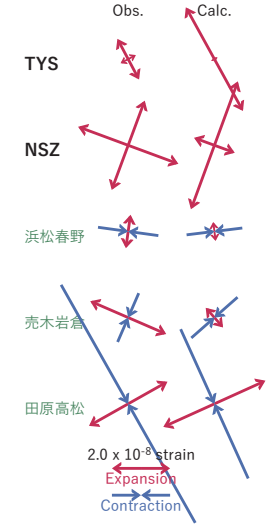


図6 2026/02/21-26の歪変化 (図2[D]) を説明する断層モデル。

図7 2026/03/02PM-07AMの歪・傾斜変化 (図2[E]) を説明する断層モデル。

(a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面 (赤色矩形) と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。赤色破線矩形は今回の一連のイベント。

1: 2025/05/05PM-09AM (Mw 5.9), 2: 2025/09/01PM-03AM (Mw 5.4), 3: 2025/09/03PM-04 (Mw 5.6), 4: 2025/09/05-07 (Mw 5.6), C: 2026/02/19-20 (Mw 5.6)

(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

(a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。

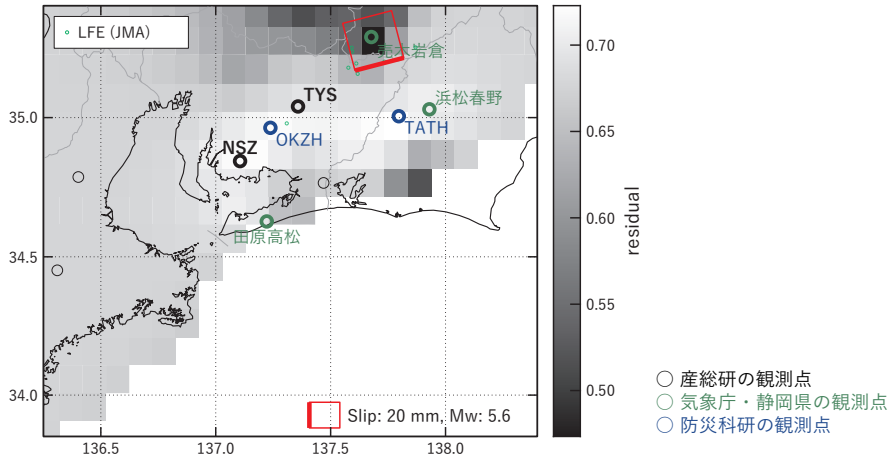
(b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面 (赤色矩形) と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。赤色破線矩形は今回の一連のイベント。

1: 2025/07/07-10 (Mw 5.7), 2: 2025/09/15PM-18 (Mw 5.6), 3: 2025/12/12-13 (Mw 5.3), C: 2026/02/19-20 (Mw 5.6), D: 2026/02/21-26AM (Mw 6.0)

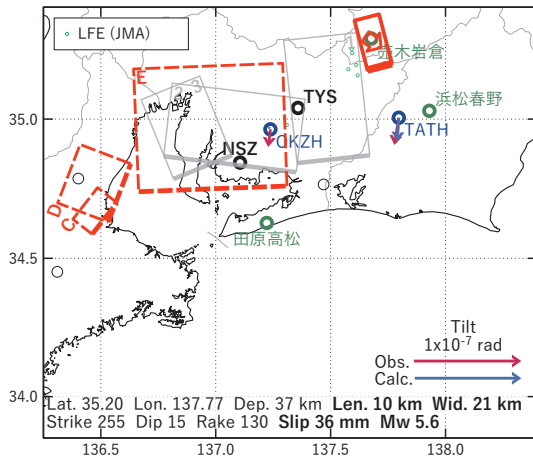
(b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

[F] 2026/03/11PM-14AM

(a) 断層の大きさを固定した場合の断層モデルと残差分布



(b1) 推定した断層モデル



(b2) 主歪

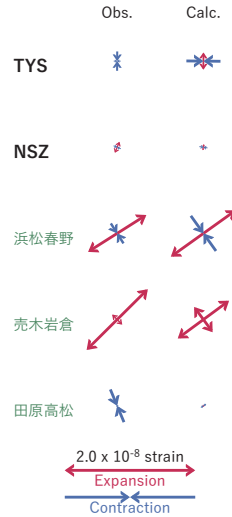


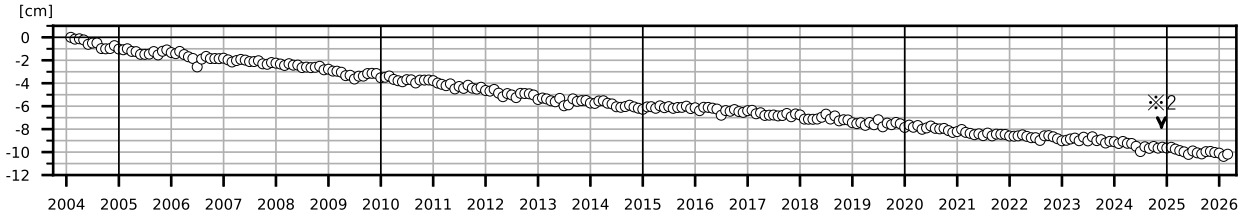
図8 2026/03/11PM-14AMの歪・傾斜変化(図2[F])を説明する断層モデル。

- (a) プレート境界面に沿って20 x 20 kmの矩形断層面を移動させ、各位置で残差の総和を最小にするすべり量を選んだときの残差の総和の分布。赤色矩形が残差の総和が最小となる断層面の位置。
- (b1) (a)の位置付近をグリッドサーチして推定した断層面(赤色矩形)と断層パラメータ。灰色矩形は最近周辺で発生したイベントの推定断層面。赤色破線矩形は今回の一連のイベント。
 1: 2025/07/07-10 (Mw 5.7), 2: 2025/09/15PM-18 (Mw 5.6), 3: 2025/12/12-13 (Mw 5.3),
 C: 2026/02/19-20 (Mw 5.6), D: 2026/02/21-26AM (Mw 6.0), E: 2026/03/02PM-07AM (Mw 6.1)
- (b2) 主歪の観測値と(b1)に示した断層モデルから求めた計算値との比較。

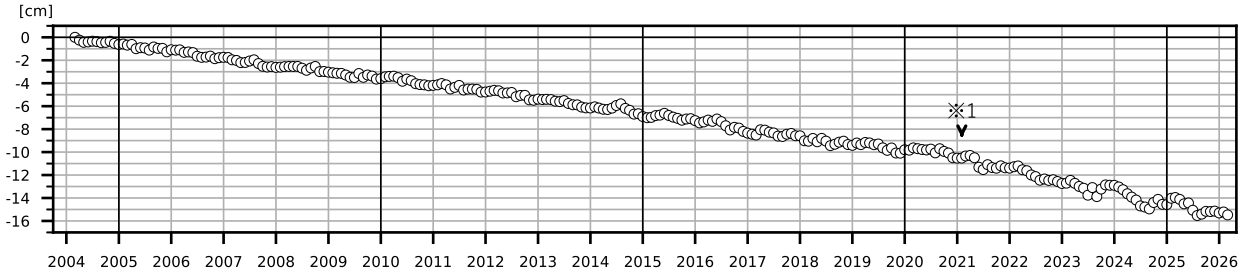
紀伊半島及び室戸岬周辺 電子基準点の上下変動

潮岬周辺及び室戸岬周辺の長期的な沈降傾向が続いている。

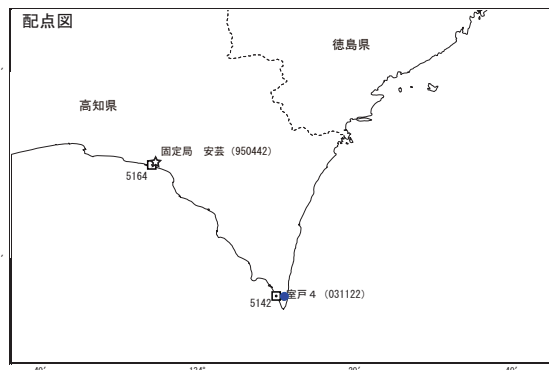
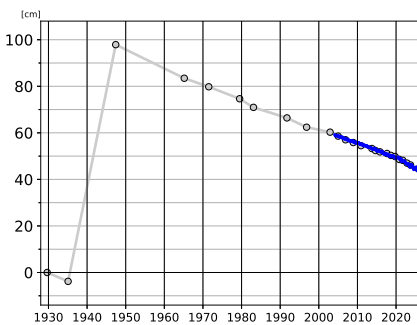
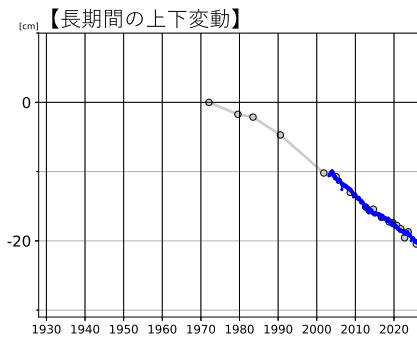
鵜殿 (950316) - P串本 (02P208)



安芸 (950442) - 室戸 4 (031122)



○ : GNSS 連続観測 (GEONET 月平均値)



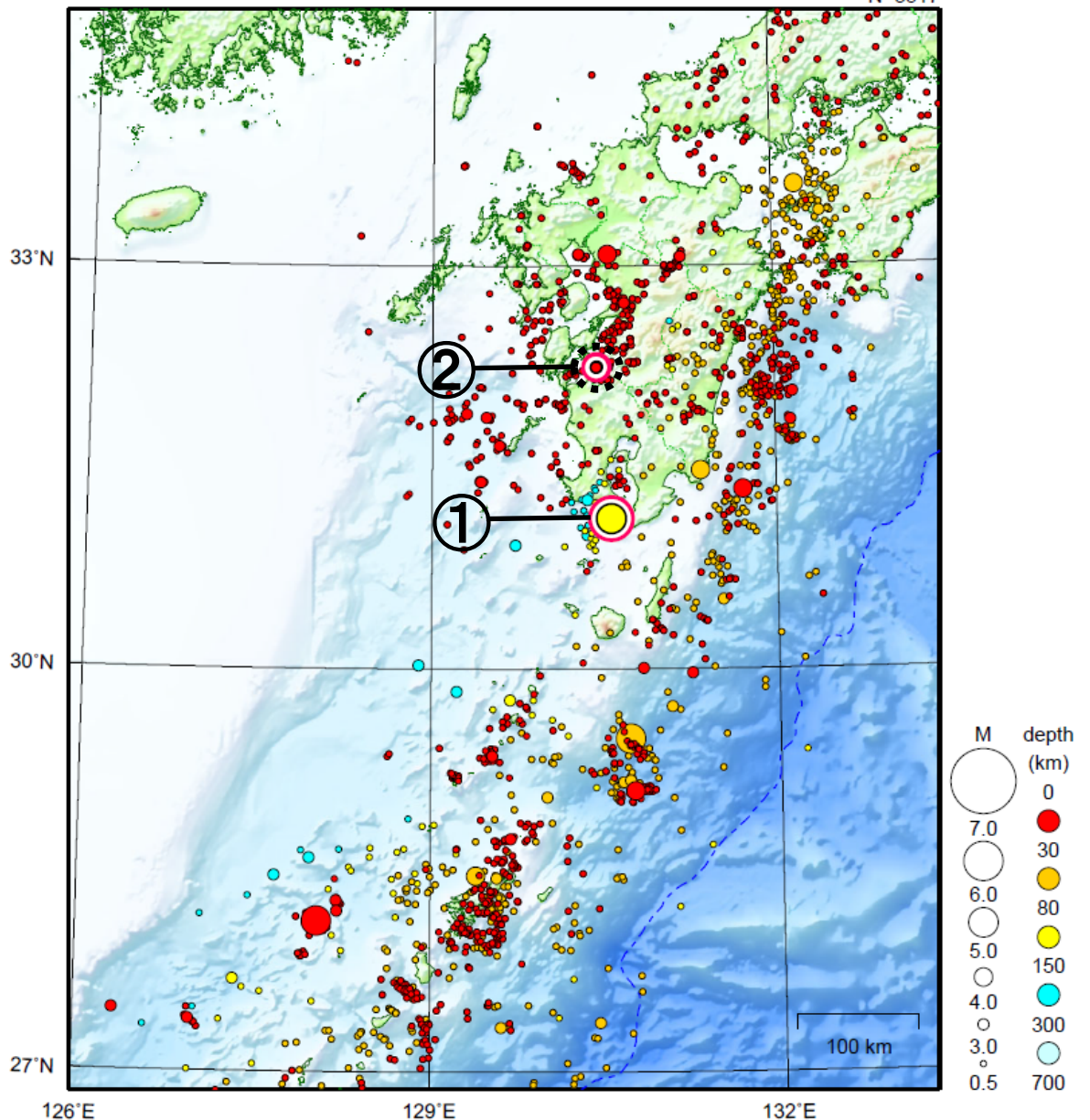
- GNSS 連続観測のプロット点は、GEONET による日々の座標値 (F5.1 : 最終解) から計算した値の月平均値である。(最新のプロット点 : 3月1日~3月7日の平均値)
- 灰色のプロットは電子基準点の最寄りの水準点の水準測量結果を示している (固定 : J4810、5164)。

- ※ 1 2021年2月2日に電子基準点「安芸」のアンテナ更新及びレドーム交換を実施した。
- ※ 2 2024年11月25日に電子基準点「鵜殿」のアンテナ更新を実施した。

九州地方

2026/03/01 00:00 ~ 2026/03/31 24:00

N=3517



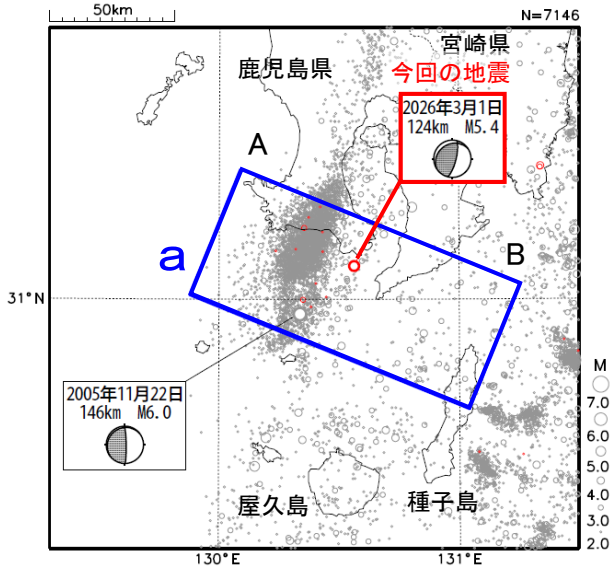
地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOPO30 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

- ① 3月1日に薩摩半島西方沖で M5.4 の地震(最大震度3)が発生した。
- ② 熊本県天草・芦北地方では、3月15日に M3.9 の地震(最大震度4)、3月21日に M3.5 の地震(最大震度4)が発生した。3月中に震度1以上を観測した地震は51回(震度4：2回、震度3：3回、震度2：10回、震度1：36回)発生した。

[上述の地震は M6.0 以上または最大震度4以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度3以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度3以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

3月1日 薩摩半島西方沖の地震

震央分布図
 (1997年10月1日～2026年3月31日、
 深さ30～200km、 $M \geq 2.0$)
 2026年3月に発生した地震を赤色○で表示
 図中の発震機構はCMT解

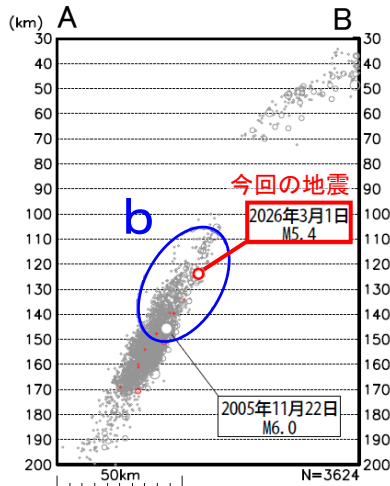


2026年3月1日18時00分に薩摩半島西方沖の深さ124kmでM5.4の地震 (最大震度3) が発生した。この地震はフィリピン海プレート内部で発生した。この地震の発震機構 (CMT解) は、フィリピン海プレートの沈み込む方向に張力軸を持つ型である。

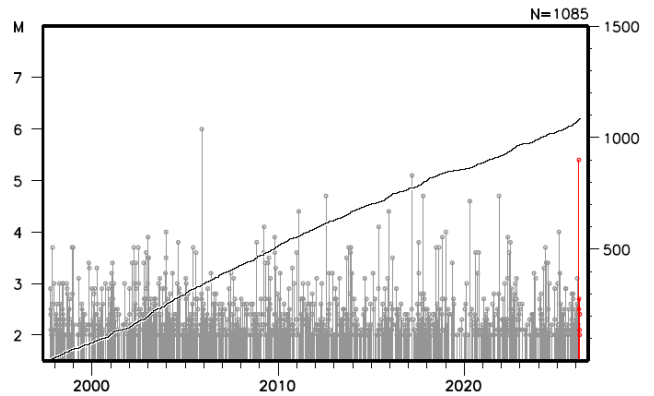
1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近 (領域b) では、M5.0以上の地震が今回の地震を含め3回発生している。2005年11月22日にはM6.0の地震 (深さ146km、最大震度3) が発生している。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺 (領域c) では、M6.0以上の地震が4回発生している。1978年5月23日にM6.4の地震 (最大震度4) が発生している。

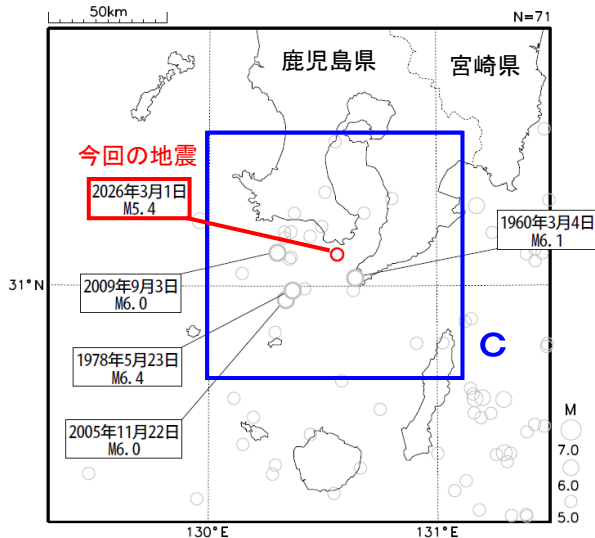
領域a内の断面図 (A-B投影)



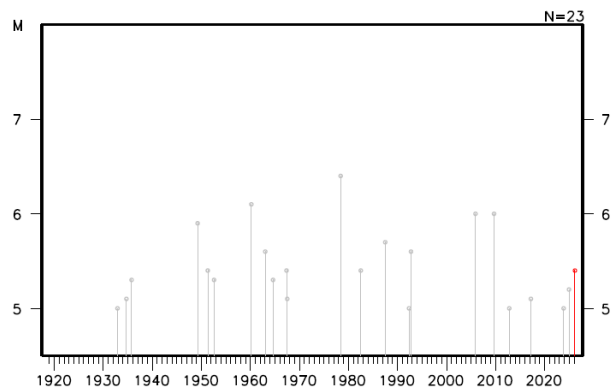
領域b内のM-T図及び回数積算図



震央分布図
 (1919年1月1日～2026年3月31日、
 深さ30～200km、 $M \geq 5.0$)



領域c内のM-T図

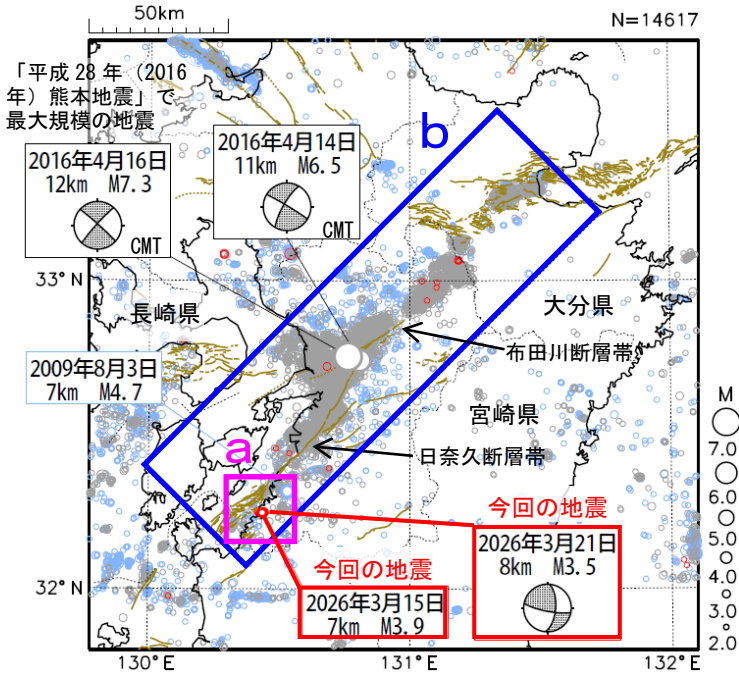


3月15日からの熊本県天草・芦北地方の地震活動

震央分布図

(2000年10月1日～2026年3月31日、
深さ0～20km、 $M \geq 2.0$)

2016年4月14日21時より前に発生した地震を薄青色○、
2016年4月14日21時以降に発生した地震を灰色○、
2026年3月に発生した地震を赤色○で表示



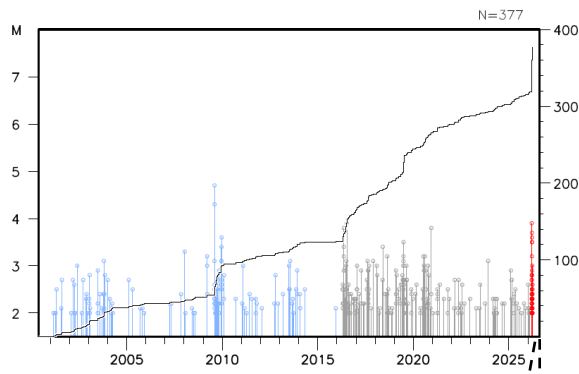
図中の茶色の線は地震調査研究推進本部の
長期評価による活断層を示す

2026年3月15日23時10分に熊本県天草・芦北地方の深さ7kmでM3.9の地震（最大震度4）が発生した。また、21日20時42分にほぼ同じ場所の深さ8kmでM3.5の地震（最大震度4）が発生した。これらの地震は地殻内で発生した。21日の地震の発震機構は北西－南東方向に張力軸を持つ横ずれ断層型である。これらの地震の震央付近では、3月15日23時頃から地震活動が活発になり、31日までに震度1以上を観測した地震が51回（震度4：2回、震度3：3回、震度2：10回、震度1：36回）発生した。

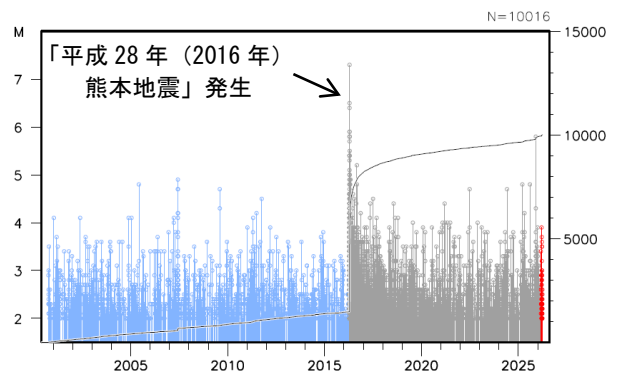
2000年10月以降の活動をみると、今回の地震の震央付近（領域a）ではM3.0以上の地震がしばしば発生している。2009年8月3日にM4.7の地震（深さ7km、最大震度4）が発生している。

また、領域bでは「平成28年（2016年）熊本地震」が発生し、この地震により熊本県で死者275人、大分県で死者3人などの被害が生じた（熊本県の被害は2025年4月11日現在、熊本県による、その他は2019年4月12日現在、総務省消防庁による）。

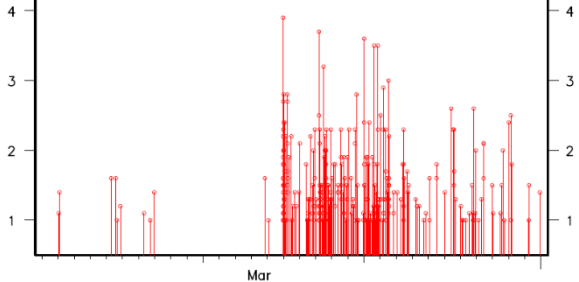
領域 a 内のM-T図及び回数積算図



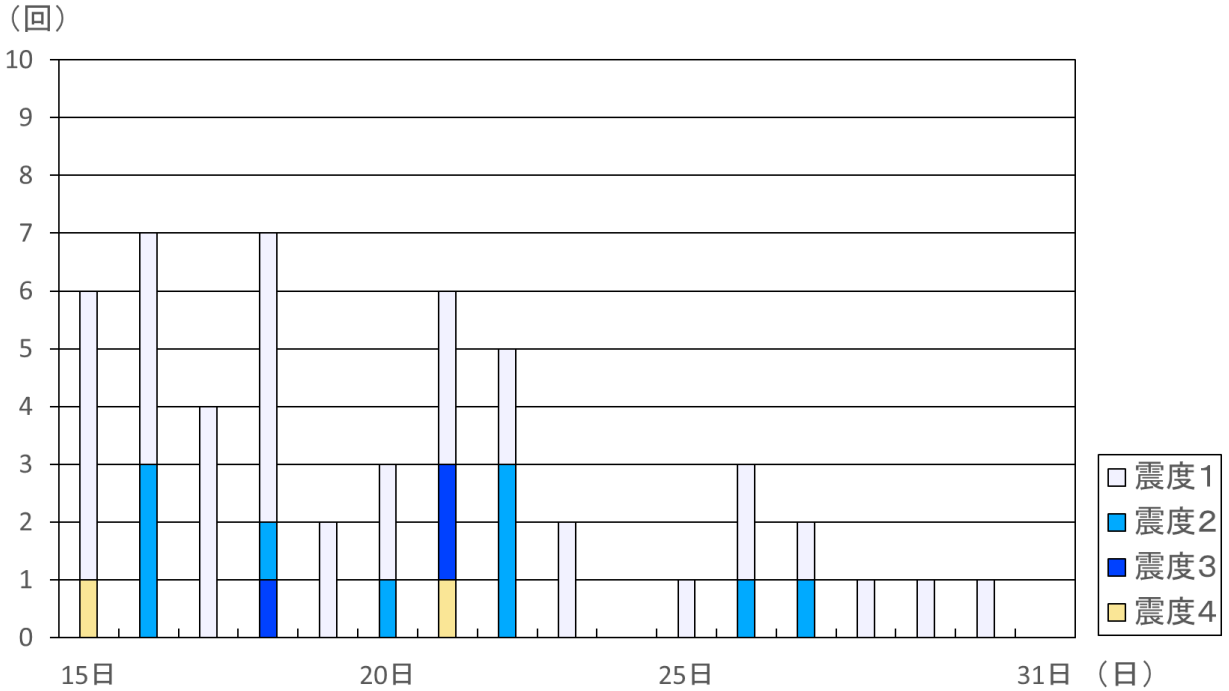
領域 b 内のM-T図及び回数積算図



(2026年3月1日～3月31日、
 $M \geq 1.0$ 、M-T図のみ)

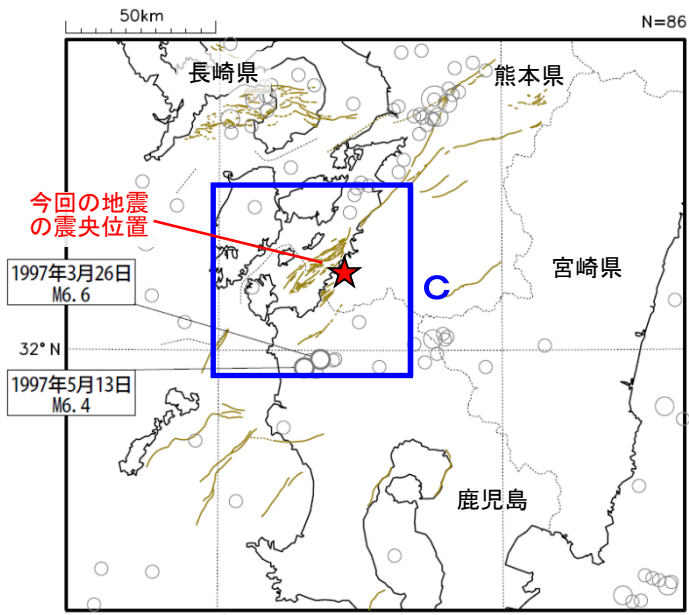


最大震度別地震回数（日別）
 (2026年3月15日23時～3月31日24時、震度1以上の地震)



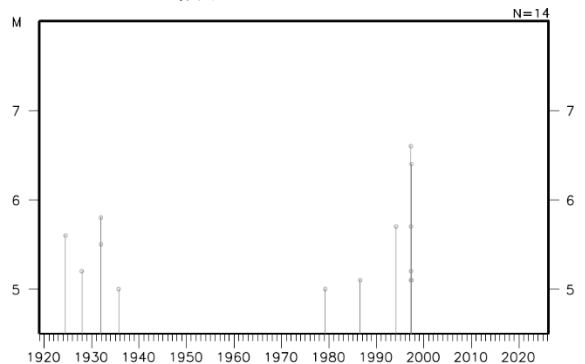
1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域c）では、M6.0以上の地震が2回発生している。1997年3月26日にはM6.6の地震（最大震度5強）が発生し、負傷者36人、住家全壊4棟などの被害が生じた。また、同年5月13日にはこの地震とほぼ同じ場所でM6.4の地震（最大震度6弱）が発生し、負傷者43人、住家全壊4棟などの被害が生じた（被害はいずれも「日本被害地震総覧」による）。

震央分布図
 (1919年1月1日～2026年3月31日、
 深さ0～50km、M≥5.0)



図中の茶色の線は地震調査研究推進本部の
 長期評価による活断層を示す

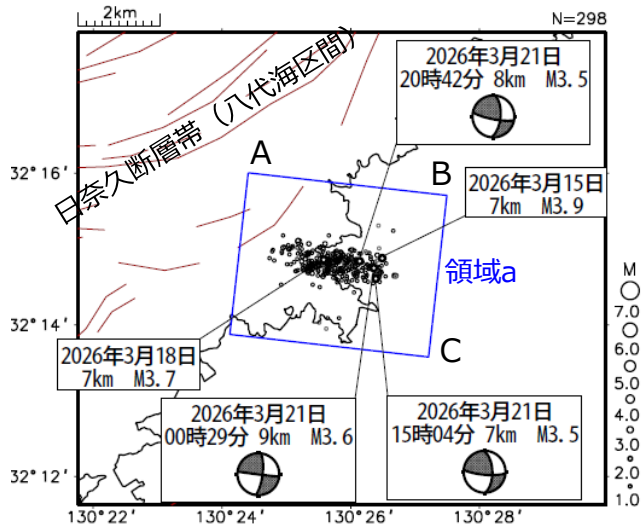
領域c内のM-T図



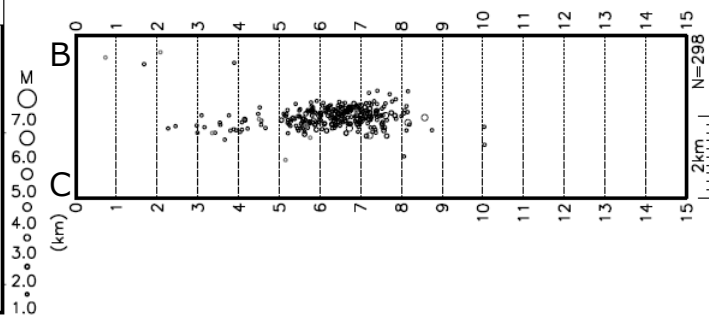
3月15日 熊本県天草・芦北地方（今回の地震活動）（3/1~4/8）

震央分布図

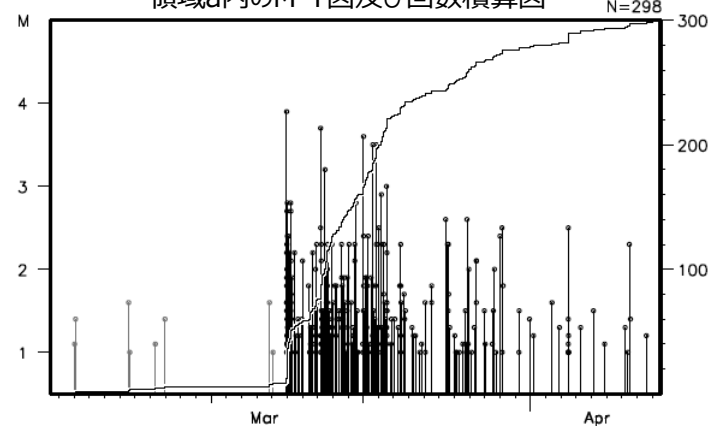
(2026年3月1日~4月8日、深さ0~15km、M \geq 1.0)



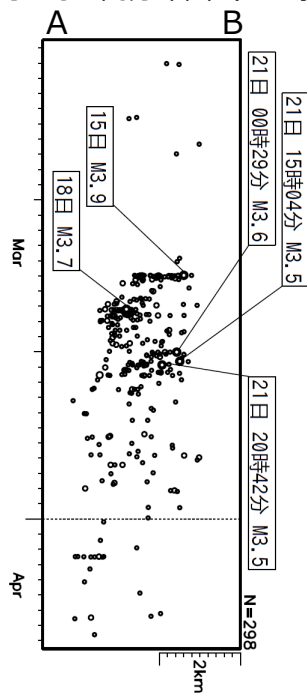
領域a内の断面図 (B-C投影)



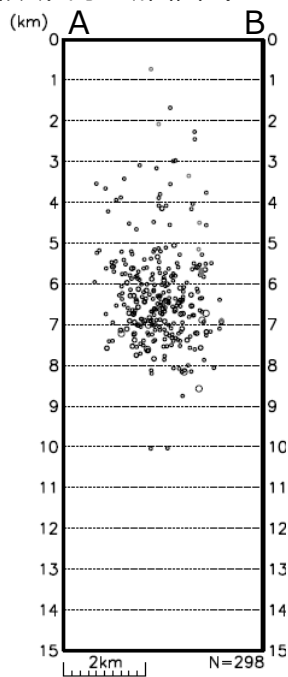
領域a内のM-T図及び回数積算図



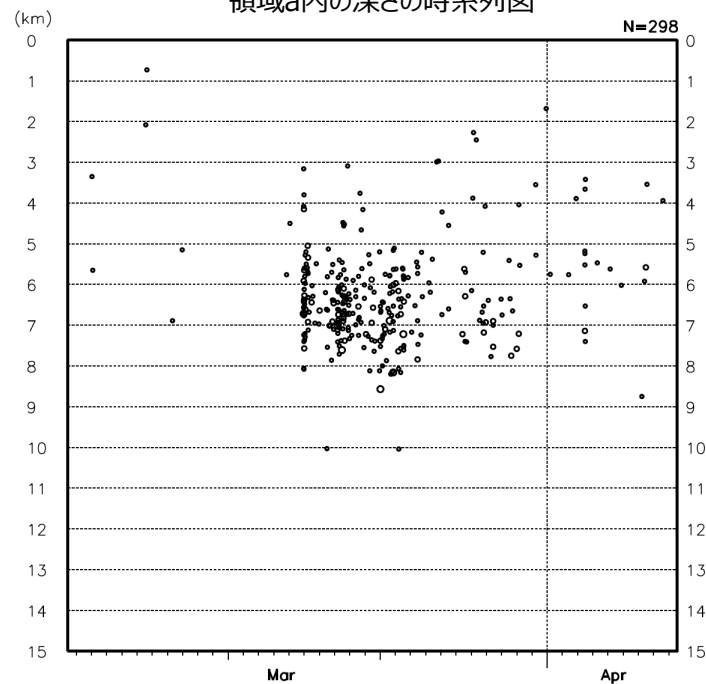
領域a内の時空間分布図 (A-B投影)



領域a内の断面図 (A-B投影)



領域a内の深さの時系列図

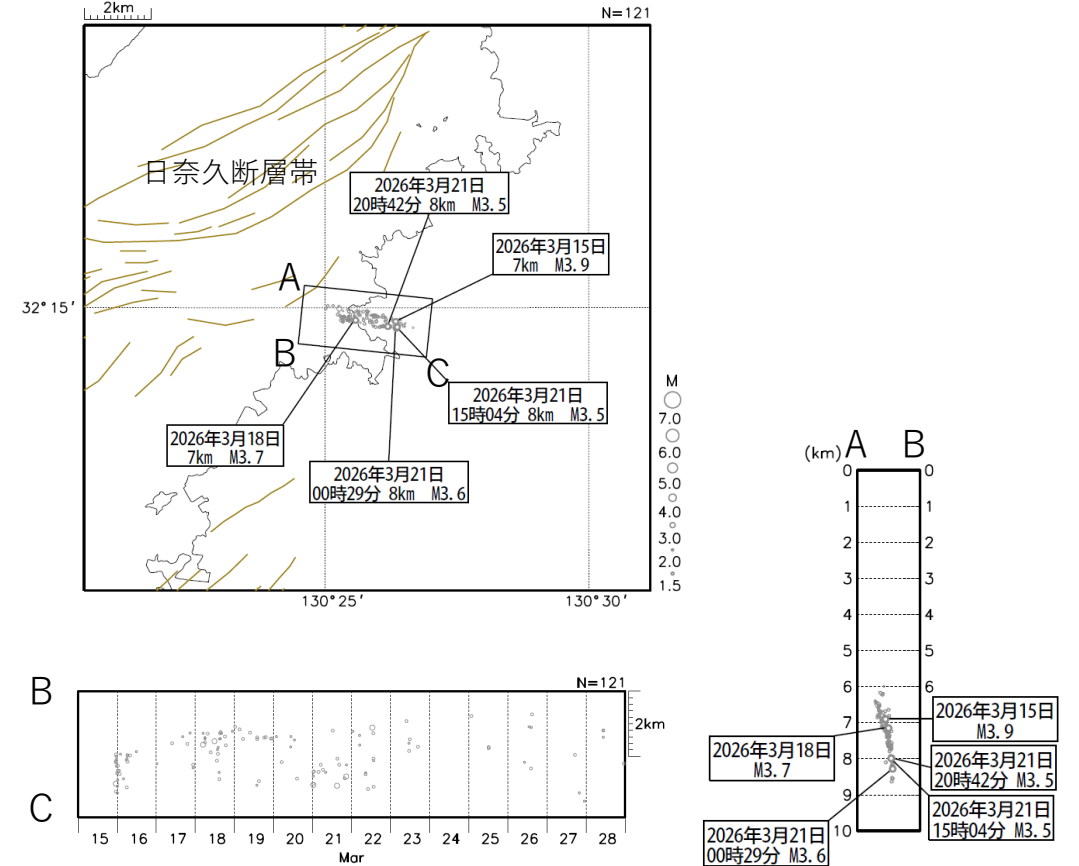
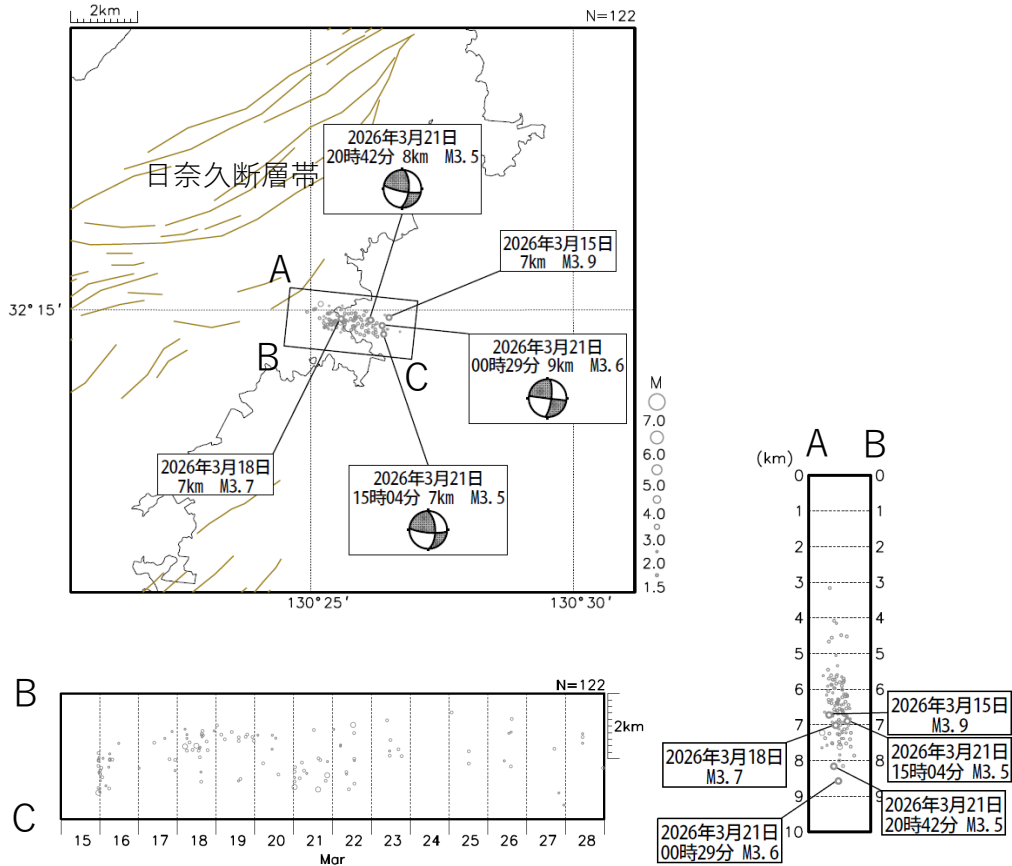


熊本県天草・芦北地方の地震活動

3月15日から28日までのデータを使用し波形相関を用いたDD(Double-Difference)法による震源再決定を行った。

上図：一元化震源の震央分布図(2026年3月15日～28日、 $M \geq 1.5$ 、深さ0-10km)
 下図：一元化震源の時空間分布図 (B-C投影)
 右図：一元化震源の断面図 (A-B投影)

上図：DD震源の震央分布図(2026年3月15日～28日、 $M \geq 1.5$ 、深さ0-10km)
 下図：DD震源の時空間分布図 (B-C投影)
 右図：DD震源の断面図 (A-B投影)



図の茶色の線は、地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す



図2 布田川断層帯・日奈久断層帯の活断層位置と調査地点

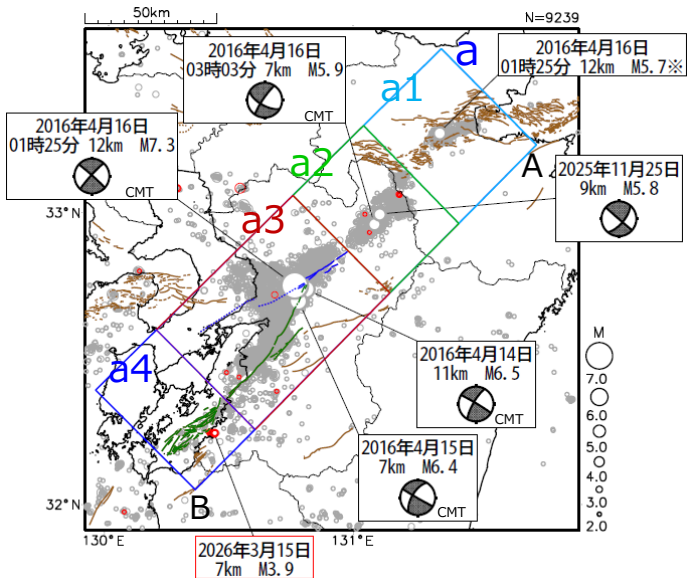
布田川断層帯・日奈久断層帯の評価（一部改訂）より抜粋、一部加筆

https://www.jishin.go.jp/main/chousa/katsudansou_pdf/93_futagawa_hinagu_2.pdf

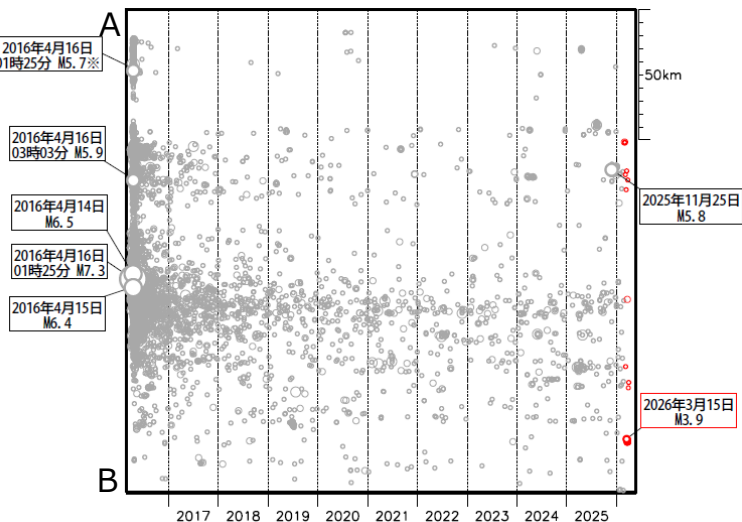
「平成28年（2016年）熊本地震」以降の地震活動

震央分布図

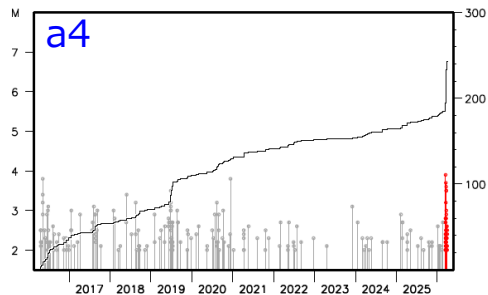
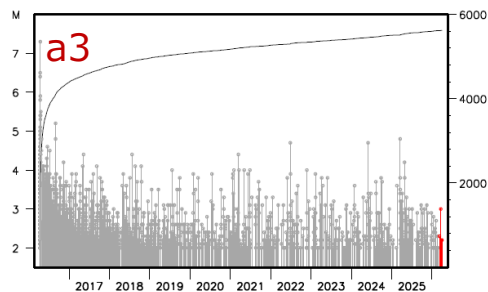
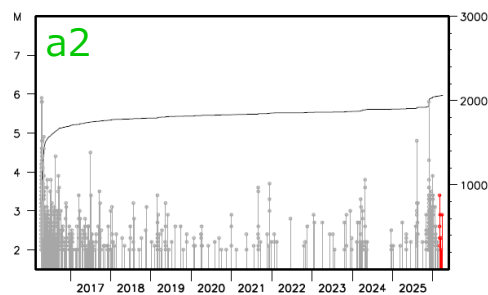
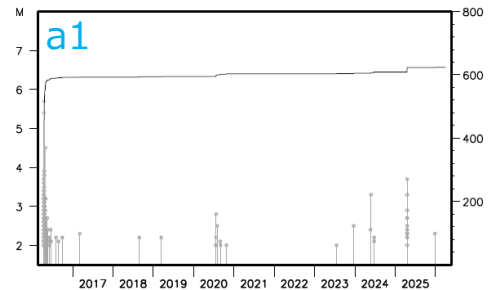
2016年4月14日21時00分～2026年3月31日24時00分、
深さ0～20km、M \geq 2.0



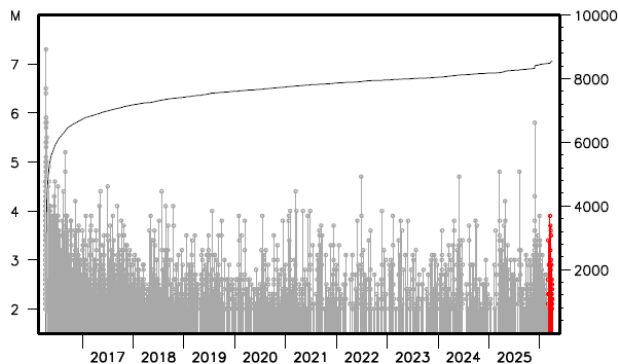
領域a内の時空間分布図 (A-B投影)



領域a1～a4内のM-T図及び回数積算図



領域a内のM-T図及び回数積算図



- 2026年3月の地震を赤色で表示
- 震央分布図中の茶色・青色 (布田川断層帯) ・緑色 (日奈久断層帯) の実線または破線は地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す

※ 2016年4月16日01時25分M7.3の地震の発生直後に発生した地震であり、Mの値は参考値

布田川断層帯・日奈久断層帯周辺の地震活動(大森・宇津式フィッティング)

震央分布図

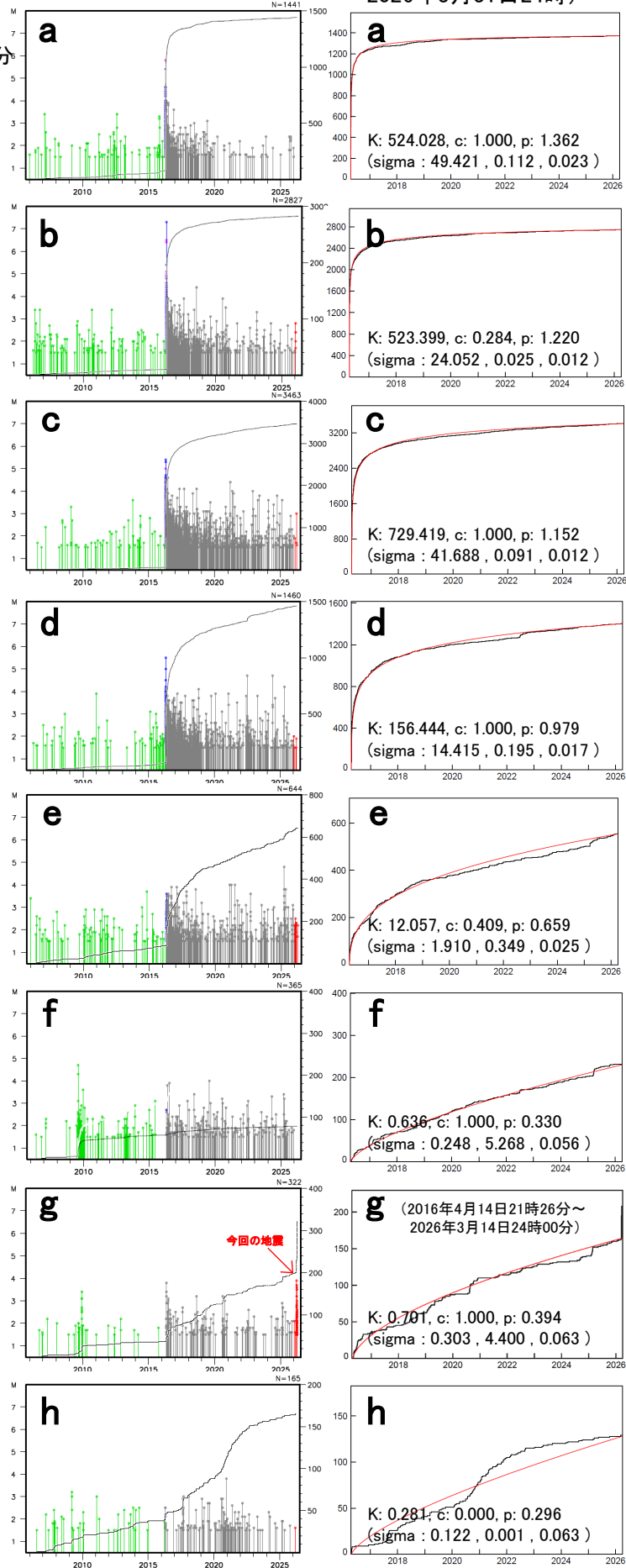
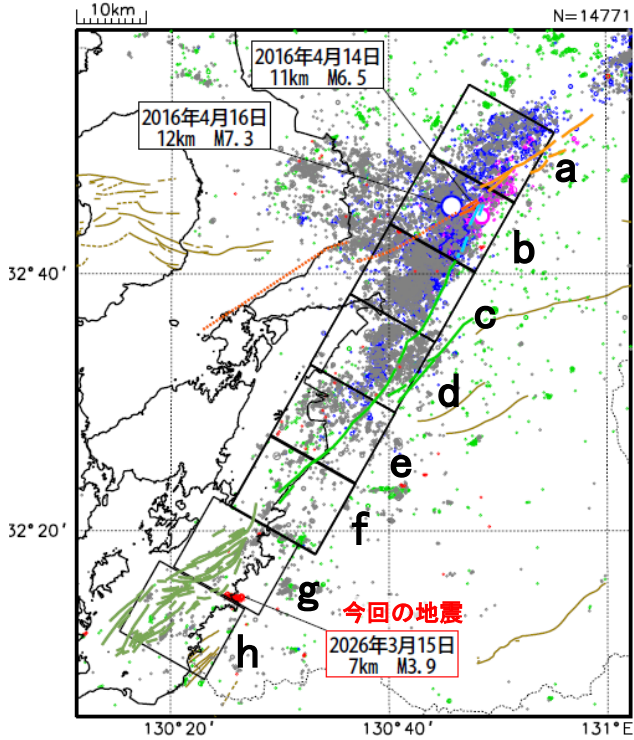
(2006年1月1日～2026年3月31日、
深さ0～20km、 $M \geq 1.5$)

M-T図及び回数積算図

(2006年1月1日
～2026年3月31日)

回数積算図(黒)及び大森・
宇津式フィッティング(赤)
(2016年4月14日21時26分～
2026年3月31日24時)

- 緑丸: 2006年1月1日～2016年4月14日21時25分
- 紫丸: 2016年4月14日21時26分($M6.5$)～2016年4月16日01時24分
- 青丸: 2016年4月16日01時25分($M7.3$)～2016年4月22日
- 灰丸: 2016年4月23日～2025年12月31日
- 赤丸: 2026年1月1日～2026年3月31日



震央分布図中のカラーの線は、地震調査研究推進本部の長期評価による活断層を示す。

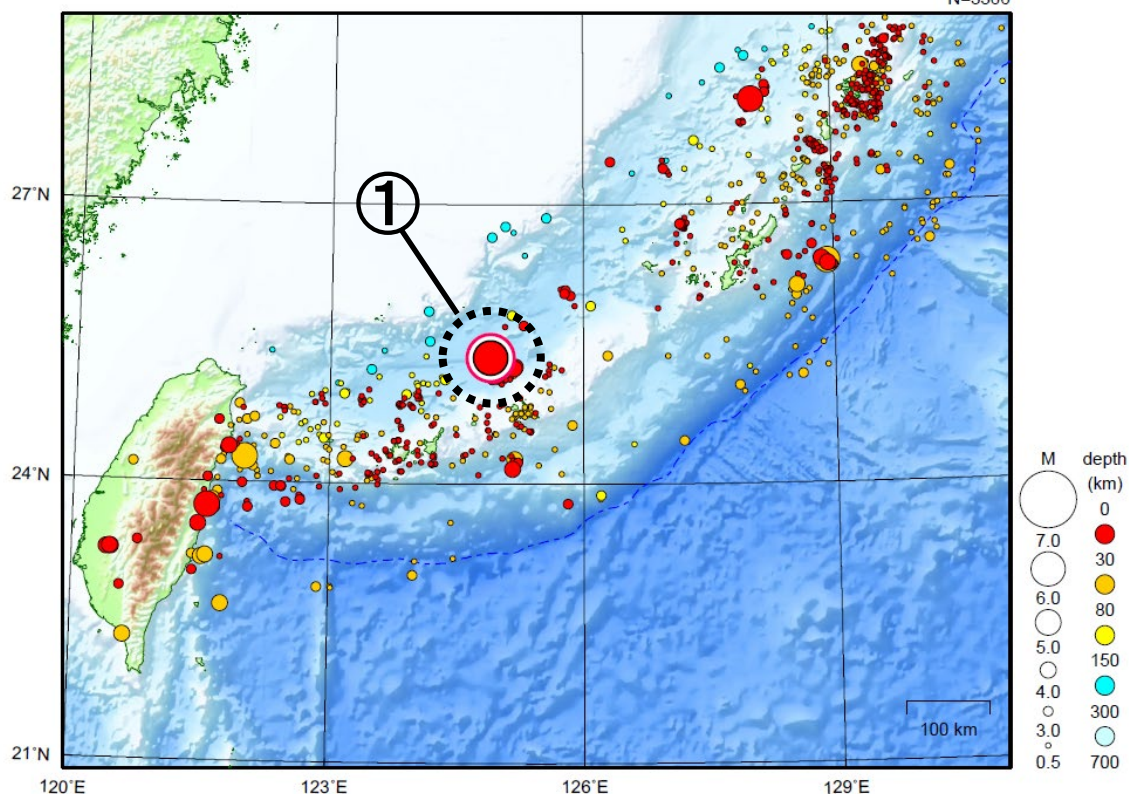
断層帯名 (起震断層/活動区間)	長期評価で 予想した 地震規模 (マグニチュード)	我が国の主な活断層における相対的評価 ^(注3)			地震後 経過率 ^(注2)	平均活動間隔		
		地震発生確率 ^(注1)				最新活動時期		
		30年以内	50年以内	100年以内				
糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注33) (中北部区間) ^(注5)	7.6程度	S*ランク		14%~30%	20%~50%	40%~70%	1.0-2.0	600-800年程度 約1,200年前以降、約800年前以前
糸魚川-静岡構造線断層帯 ^(注33) (北部区間)	7.7程度	S*ランク		0.01%~16%	0.02%~20%	0.06%~40%	0.4-1.3	1,000年-2,400年程度 約1,300年前以降、約1,000年前以前
日奈久断層帯 ^(注9) (八代海区間)	7.3程度	S*ランク		ほぼ0%~16%	ほぼ0%~30%	ほぼ0%~50%	0.1-1.6	1,100年-6,400年程度 約1,700年前以後、約900年前以前
日奈久断層帯 ^(注9) (日奈久区間)	7.5程度	S*ランク		ほぼ0%~6%	ほぼ0%~10%	ほぼ0%~20%	0.2-2.3	3,600年-11,000年程度 約8,400年前以後、約2,000年前以前

今までに公表した活断層及び海溝型地震の長期評価結果一覧より抜粋、一部加筆
<https://www.jishin.go.jp/main/choukihyoka/ichiran.pdf>

沖縄地方

2026/03/01 00:00 ~ 2026/03/31 24:00

N=3366



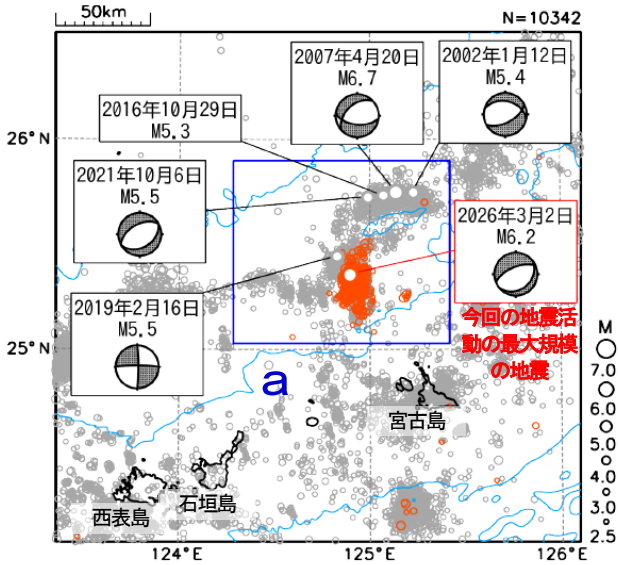
地形データは日本海洋データセンターの J-EGG500、米国地質調査所の GTOPO30 及び米国国立地球物理データセンターの ETOP02v2 を使用

- ① 3月2日に宮古島北西沖で M6.2 の地震(最大震度 3)が発生した。宮古島北西沖では、3月中に震度 1 以上を観測した地震が 15 回 (震度 3 : 1 回、震度 2 : 7 回、震度 1 : 7 回) 発生した。

[上述の地震は M6.0 以上または最大震度 4 以上、陸域で M4.5 以上かつ最大震度 3 以上、海域で M5.0 以上かつ最大震度 3 以上、その他、注目すべき活動のいずれかに該当する地震。]

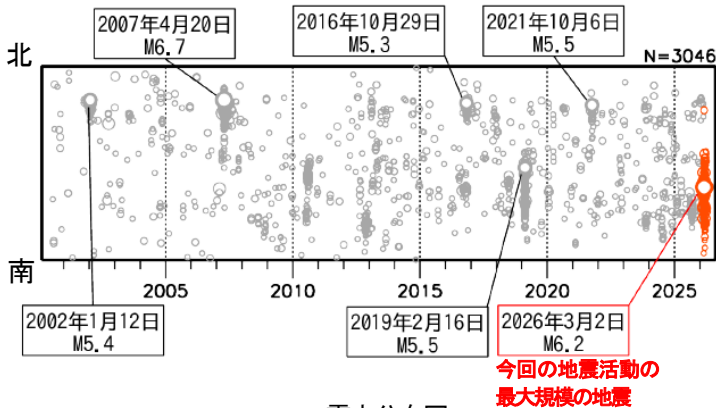
宮古島北西沖の地震活動

震央分布図
(2000年7月1日～2026年3月31日、
深さ0km～50km、 $M \geq 2.5$)
2026年2月26日～3月31日の地震を赤色で表示
図中の発震機構はGMT解

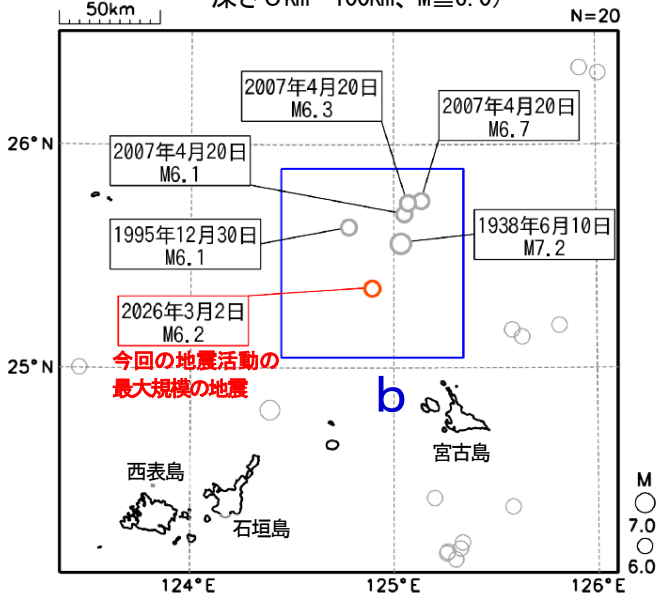


図中の水色の等値線は、水深1500mを示す

領域a内の時空間分布図（南北投影）
(2000年7月1日～2026年3月31日)



震央分布図
(1919年1月1日～2026年3月31日、
深さ0km～100km、 $M \geq 6.0$)

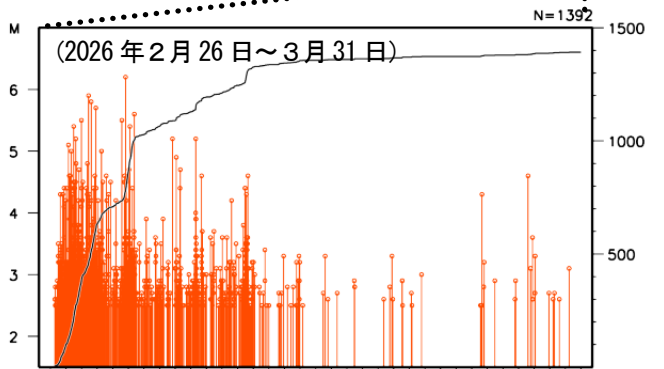
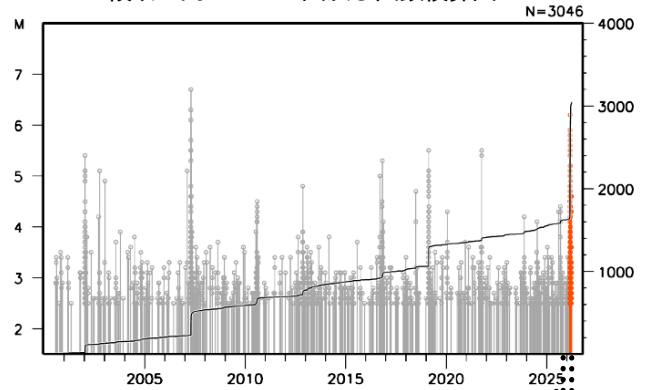


宮古島北西沖では、2026年2月26日から地震活動が活発となり、2月26日から3月31日までに震度1以上を観測する地震が32回（震度3：1回、震度2：13回、震度1：18回）で、これら一連の地震活動は、沖縄トラフ沿いで発生している。このうち最大規模の地震は3月2日19時39分に発生したM6.2の地震（最大震度3）で、発震機構（GMT解）は、北北西-南南東方向に張力軸を持つ正断層型で陸のプレート内で発生した。

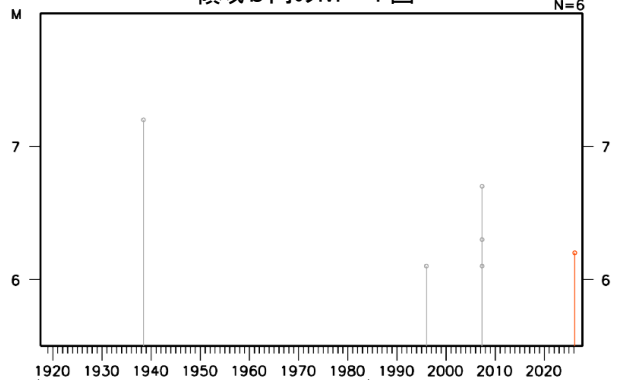
2000年7月以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域a）では、M5.0以上の地震活動が時々見られる。2007年4月20日には、M6.7の地震（最大震度3）が発生した。

1919年以降の活動をみると、今回の地震の震央周辺（領域b）では、M6.0以上の地震がまれに見られる。1938年6月10日にはM7.2の地震（最大震度4）が発生しており、宮古島平良港に地震後10分で津波が襲来して高さ1.5m（目視による最大の高さ）、栈橋の流出などの被害があった（被害は、日本被害地震総覧による）。

領域a内のM-T図及び回数積算図



領域b内のM-T図



この期間地震の検知能力が低い

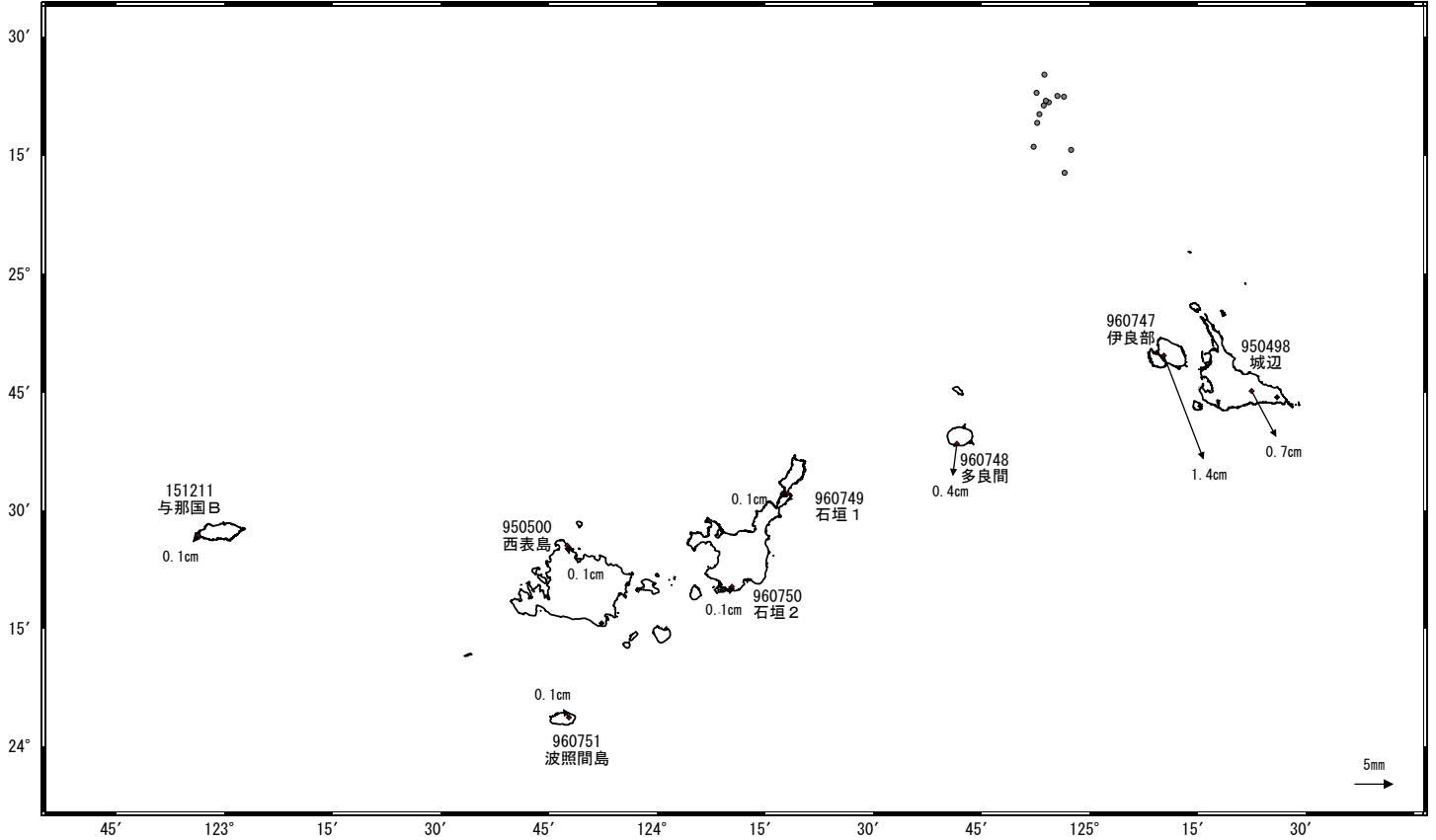
気象庁作成

宮古島北西沖の地震活動に伴う地殻変動(暫定)

一連の地震活動に伴い小さな地殻変動が観測されている。

地殻変動(水平)

基準期間: 2026-02-19~2026-02-25 [F5.1: 最終解]
比較期間: 2026-03-19~2026-03-21 [R5.1: 速報解]



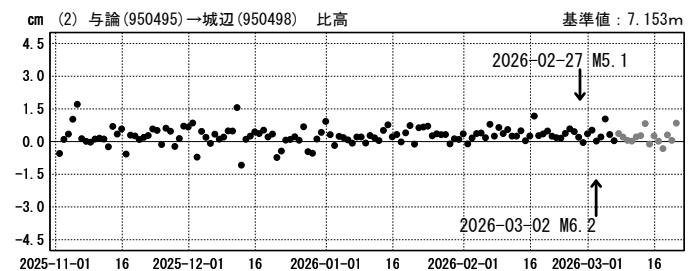
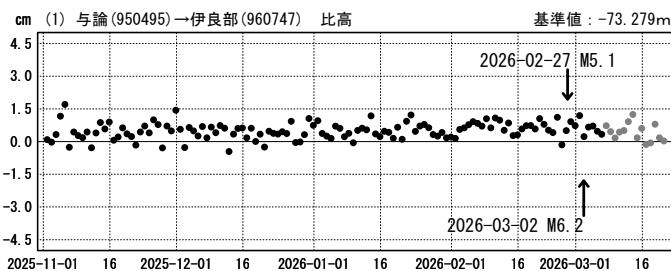
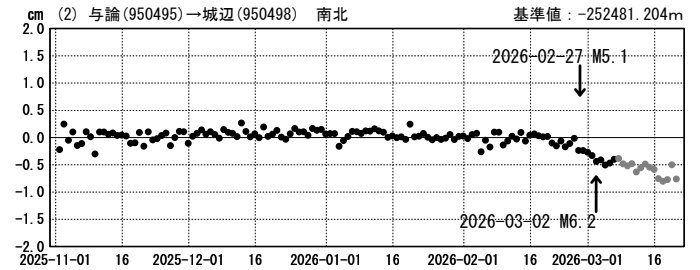
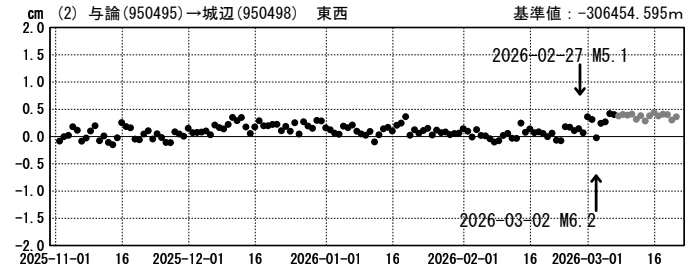
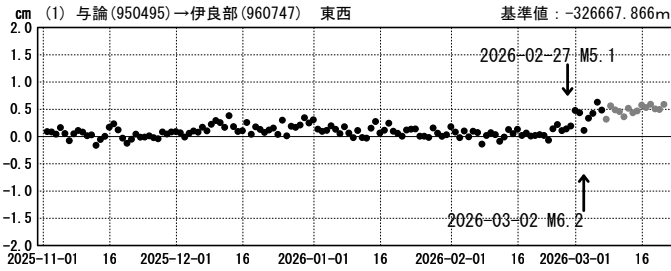
- 震央 (M5以上の地震)
- ☆ 固定局: 与論 (950495) (鹿児島県)

1次トレンド除去後グラフ

計算期間: 2023-01-01~2024-12-31

期間: 2025-11-01~2026-03-21 JST

期間: 2025-11-01~2026-03-21 JST



●—[F5.1: 最終解] ●—[R5.1: 速報解]

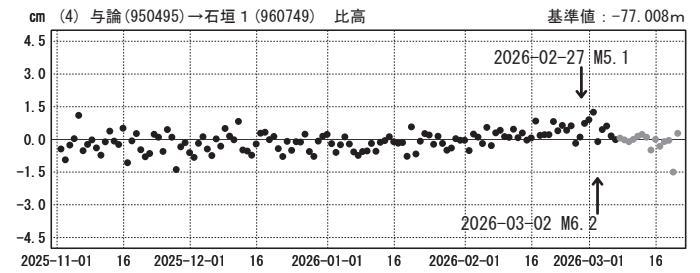
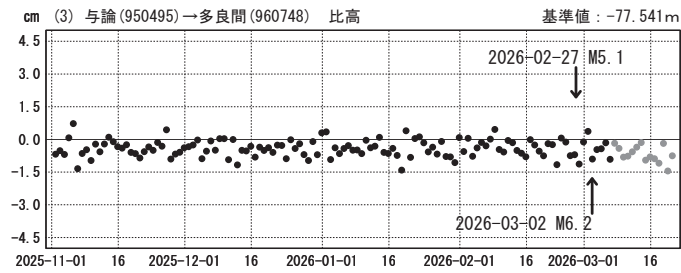
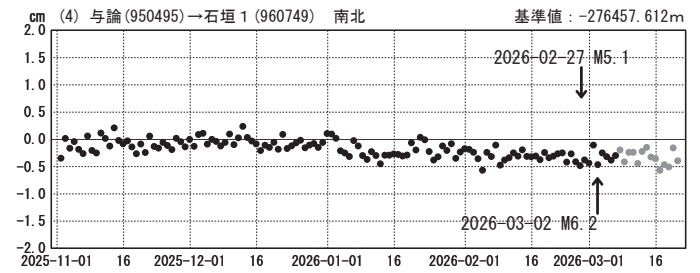
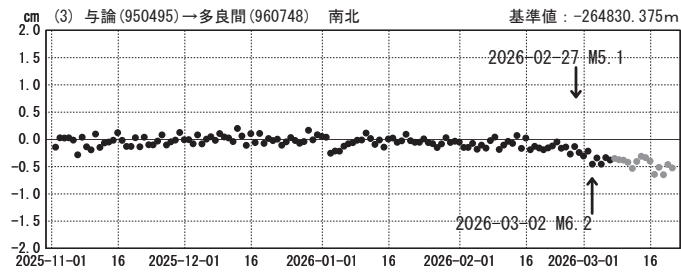
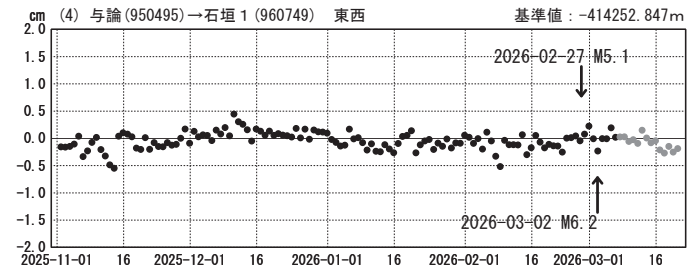
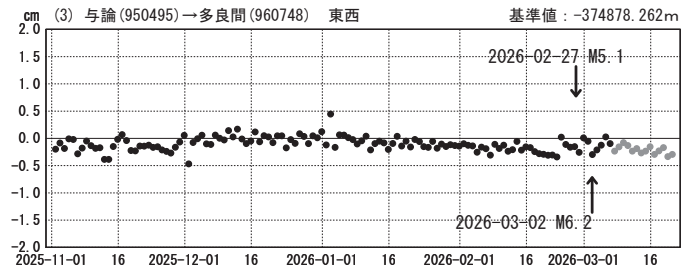
宮古島北西沖の地震活動に伴う地殻変動(暫定)

1次トレンド除去後グラフ

計算期間：2023-01-01~2024-12-31

期間：2025-11-01~2026-03-21 JST

期間：2025-11-01~2026-03-21 JST



●---[F5.1:最終解] ●---[R5.1:速報解]